



一緒に考えるミステリー

愛した人の罪

鳥居 大誠

愛した人の罪

島居大誠



目次

第一話	静かな船	1
第二話	他人	26
	人物相関図 I	
第三話	運命共同船	46
第四話	探偵の素質	70
	人物相関図 II	
第五話	袁彦道	92
第六話	孤独の船	106

第七話	愛する人	128
-----	------	-----

人物相関図Ⅲ

第八話	一族	150
-----	----	-----

第九話	鑑定	164
-----	----	-----

人物相関図Ⅳ

第十話	愛した人の罪	188
-----	--------	-----

第N話	帰納	208
-----	----	-----

あとがき		220
------	--	-----

※この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは一切関係ありません。

第一話 静かな船

水平思考問題と呼ばれる推理ゲームをご存じだろうか。出題された問題に対して質問を投げかけながらストーリーを推測し、真実を解明するという簡単な推理ゲームである。その中でも「ウミガメのスープ」と呼ばれる代表的な問題を一つご紹介しよう。

ある船乗りはたまたま立ち寄ったレストランでウミガメのスープを注文しました。ウェイトレスが運んできたスープを一口飲んだ船乗りはとても驚いた表情を浮かべ、そのウェイトレスに「これは本当にウミガメのスープですか？」と尋ねました。ウェイトレスは「はい。」と答えましたが、その回答を聞くと、船乗りはそれ以上スープを飲むことなく店を出て行きました。そしてその夜、船乗りは自ら命を絶ってしまいました。どうしてその船乗りは自殺をしてしまったのでしょうか。

俺は山田颯人。やまだはやと二十八歳のサラリーマンで日本橋駅の近くにあるのジャンク有善堂書店という古本屋にて書店員として働いている。書店員と聞くとレジ打ち役の人を想像するかもしれないが、俺は店の奥にある事務室

にこもっている。ジャンク有善堂書店では、一昨年から読書嫌いの若者に向けて一人ひとりにあった小説を送るという企画を行っており、俺はそこで選定者として依頼客の記入したアンケート用紙をもとに本を厳選するという仕事を主にしているのだ。

「このお坊ちゃんには春日漱石の『吾輩も猫である』がいいかな……」

最近はお自分の興味の幅も広がってきて全ジャンルの本を担当しているのだが、ミステリー小説だけは全て俺が任されている。この書店は自宅の近くにあり高校時代からアルバイト店員として雇ってもらっているのだが、その当時から俺は店長にコナン君と呼ばれている。小学生の頃からこの書店でミステリー系漫画の立ち読みをはじめ、中学生になってお小遣いを手にしてからは、一冊百円まで値下がりした推理小説を毎日のように買い集めていたことが店員の間で話題になっていたらしい。最近知ったことではあるが、俺が入社する前から俺のあだ名はコナン君だったようで、正社員になってから急に店長は思ひ出話をいっぱい聞かせてくれるようになった。十三歳の時には三百円を握りしめて書店に行き六百円する推理小説の光沢のある表紙を一時間以上眺めていることもあったのだが、その翌日になるときまつてその本だけが半額になっているというミステリーもようやく解決した。店長は俺の父さんの古くからの友人だったらしい。高校も大学も家から一時間以上離れたところにあつて、正直学校の近くで働きたいと思つたことも何度かあつたが、できるだけ母さんの近くにいてあ

げたいという思いが勝ったのであった。

俺が十五歳の時に父さんが他界したことがきっかけである。父さんは菊地という男の車に轢かれて脳に外傷を負い、医師からは高次脳機能障害の二級と説明された。意識や過去の記憶はあるものの一人では外出もできず、生命の維持のための介護を必要としていた。事故から数週間後、父は家族に最後の言葉を残して他界した。父もあの言葉が自分の最期の言葉になると分かっていたのだろう。

高校生になってからも謎解きに対する情熱は冷めず、ジャンク有善堂書店で稼いだお金をジャンク有善堂書店に注ぎ込んでいた。そんな本にしか興味がなかった俺は今有給休暇を消費して船旅に来ているのだが、海の上においてもなお推理小説を読んでいるのであった。一応この船は沖縄へ向かっている。朝昼晩の三食が船の中で出るのだが、これは俺にとって人生初の船内朝食なのである。鰹だしのきいたお吸い物を一口すすって俺はウミガメのスープの話を思い出したのであった。一度答えを知ってしまうとなかなか忘れないのである。

船乗りはレストランのメニューにあった「ウミガメのスープ」を見て、「そういえば昔海で遭難した時にウ

ミガメのスープを飲んだことがあったな。」と思い出しました。遡ると数年前の話、その日男は船に乗っていましたが、その船が嵐にあい、数人の男と一緒に救難ボートで無人島に漂流してしまいました。食料も途絶えてしまった為、体力のないものから死んで行ってしまうました。やがて生き残るために彼らは死んでいった仲間の肉を食べ始めますが、その船乗りだけはかたくなに食べようともしませんでした。当然、何も食べない為、彼は衰弱していきます。そんな船乗りを見かねた他の仲間が「これはウミガメのスープだから」と偽り、男に仲間の肉を使った人間のスープを飲ませ救難まで生き延びることができました。しかし今回、このレストランで明らかに味が違う「本物のウミガメのスープ」を食し、そのすべてを悟り、船乗りは自殺してしまいました。きつと彼なりの無意識の正義の見せ方だったのでしょう。

作り話とは言え、自分の知らないうちに人間の、それも友人の肉のスープを口にしていてということとは考えたくもない話である。知らず知らずのうちに人を殺しているかどうかという気分になるのだろうか。味わいたいのではないが気になるところである。一人で船旅に来たとはいえ、本を見ながら自分自身に話しかけることしかできないなんてなんとも情けない。

「俺にもっと勇気があれば横にいる可愛い子にも話しかけられるんだろうな」

と背もたれに身体を預けてため息をついた。今日の船内は人が極端に少ない。半年前に新型のウイルス感染症が流行して以来客足が減ったのだろう。中型のクルーズ船というのに従業員と客数がちょうど同じくらいで足しても三十人にも満たないのではないだろうか。出港の時も見送りに来ていた人は数人しかいなかったことを覚えていいる。何なら見送りに来ていた人の特徴までもしっかりと覚えていいる。赤髪のお兄さんに、誰かのお母さんが二人。そして一番印象的なのは猫連れの女の子だった。猫は黒く尖ったサングラスを飼い主にかけさせられていたのだが、相当嫌だったのだろうか、飼い主のお姉さんの髪のに噛みつきながら外せ外せと訴えていたようだった。汽笛信号が鳴ると人も猫も驚いた様子で船の方を振り返るのだが、俺はあの猫とサングラス越しに目が合った気がした。

「俺も見送られたかったなあ」

彼女はいいなし、母さんは足が悪いため家でお見送りをしてもらうことにした。港からのお見送りがなかったとはいえ贅沢すぎる旅である。気づいたら本を机に置きっぱなしにしていた。

「せっかくだし、今しか見れないものを見ておくか」

何の懸賞だったかはもう覚えていないが、懸賞好きの母さんが当選させたクルーズチケットらしい。普通こういうものはペアチケットだと思うのだが、一人旅の方が少し気も楽で良いかもしれない。きっと船内のプール

も独り占めできるんだろ？と想像しながらサングラスを外した。

「ここ室内だったな」

朝ご飯はビュッフェスタイルなのだが面白いくらいにスタッフが少ない。これもまた集団感染を防止するための策なのだろうか。……というより、

「いない？」

俺の気持ちにシンクロするようにそう言葉にしたのは隣に座っていた一人の女性観光客であった。

「さつきから従業員の姿見かけなくないですか？」

小柄で黒の髪を肩まで伸ばしたその女性の唐突な発言に俺は少し戸惑った。

「そ、そうですね」

「それに、もうとつくに片付けてもいい時間なのに。食事の時間って朝八時から十時までの予定なのに、もう一時間も過ぎてますよ。不思議ですね」

それってそんなに重要な事なのだろうか？と心の中で思っていたが、どうでもいいことに興味津々な彼女を推理小説にでてくる女探偵の姿に重ね合わせてしまつて少し魅かれている自分がいた。

「すみません、どうでもいいですよ。私一人旅が初めてで、出発したばかりですけど少し寂しくなっちゃつ

て」

「い、いえいえ、ボクも同じなんで」

気づいたら一人称が変わっていた。

「藍果って言います。大塚藍果おおつかあいかです。藍果って気軽に呼んでください。同羅どうら大学法学部卒で今二十七歳です。

名前って聞いてもいいですか？」

「はい、山田です」

「下の名前は？」

「颯人さんまろです。反町大卒で社会人五年目になります」

「五年目！ 年一緒じゃない、年上だと思ってたよ。しかも反町なんだ！ 学校結構近かったんだね。じゃあ

タメ口でいいね。山田くん」

実際のことを言うと高校と大学の間に暗黒の一年があったため事実上は一歳年上なのだが、話をややこしくするの面倒だったので黙っていることにした。それより下の名前を聞いてきたのにもかかわらず名字で呼ばれるんだ、と少しばかりショックを受けた。何か会話を続けなければと思ってはいるが、なかなか話のネタが出てこない自分が情けない。そんな俺を救ってくれる男性の張りのある低い声が後ろの方からした。

「姉ちゃんたち、ひよつとして恋人さん同士かい？」

四十歳近くの金持ちそうなおっさんが新聞を片手に近づいてきた。短い黒髪をジェルワックスでオールバックにし、グレーのスーツを着こなした高身長その男性の指にはファッション用の尖った指輪が数個はめてあった。

「そんな感じですよ！」

藍果が元気よく答えた。

藍果、俺ら初対面同士だぞ、たった今自己紹介したばかりだぞ、と心の中で思いつつも藍果の返答を否定しなかった。彼女なりの防衛策なのだろうか。

「残念やなあ、せっかく俺が遊んでやろうと思ったのに。俺石橋って言うねん。よろしくな。それよりクルーズのスタッフ誰もいーひんくない？」

俺も何となく感じていたが確かにスタッフの姿が見当たらない。今まで読書と食事に夢中でずっと気づかなかったが、船内アナウンスもしばらく聞いていない。

「ところで石橋さんはお一人なんですか？」

藍果が少しあざとい目をして石橋さんに尋ねた。

「そーやねん。俺には君たちくらいの歳の娘が二人いるんやけどな、その二人が俺の誕生日祝いやって言うてクルーズの旅を用意してくれたんよ。ほんまは家族みんなで来たかったんやけど娘は二人ともテレビ局に就職してしもてな。親としては嬉しいもんやけど、夜勤だの休みを取れないだのいろいろあつて来れなかったんよね。せやから今日は一人旅を満喫しようと思ってさ」

「そうだったんですね」

「娘さんが二人もいらつしやるのに、私を引っかけようとしたんですか？」

「いやいや、それはなんていうか冗談やつて。冗談冗談」

「まったく大人ってのは信用なりませんね」

藍果がプスッと頬を膨らませると石橋さんは張りのある声で腹から笑った。

「ま、大人も学生の延長線やからな。お近づきの印によければ」

そう言つて石橋さんはスノーと書かれた白いドロップキャンディを手渡してくれて、俺は手に握りしめたまま服の左ポケット突っ込んだ。

「石橋さんって関西人なんですか？」

「せやで。やつぱ方言抜け切れてないかあ」

「そうですね。抜け切れてないというか、抜くつもりないですよね」

「兄ちゃんさすがやねえ」

石橋さんの大阪節は一切停まる様子を見せなかった。

「関西人って本当に飴玉持ち歩くんですね」

「せやなあ、でも意外と持ち歩かん人の方が多かったりするで、知らんけど。ただ気軽に持ち歩いて気軽に人にあげれるから便利やなあって思て。なんかいつも持ってたのよな」

「なるほど。そうなんですね」

そんな話を三人でしていると、甲板に繋がる扉から一人の女子学生が焦った様子で飛び込んできた。

「だ、誰か！ 船を運転できる人いませんか？ 誰か！」

韓国アイドルのコンサート衣装のような服を身にまとった女性だった。その元気さと若さを見るからに学生である。彼女が入ってきて俺らは周りを見渡したが、今このレストランには俺と藍果と石橋さんというおっさんの三人しかいなかったようなので必然的に彼女の問いに応じることにした。厳密に言えば少し離れた喫煙室に深い緑色のカーディガンを着た小柄な女性が背を向けて立っているのだが、きつと声は届いていないのだろう。その学生の質問に対して石橋さんが答えた。

「どうしたんや急に」

想像以上に大きい声に驚いたのは俺だけじゃなかった。

「わあびつくりした、おっさんそんな大きい声出さないてくださいよ！ もう」

「なんやて？ 失礼な。俺にはちゃんと石橋河大^{いしばしこうだい}って名前があるんだよ」

「はいはい、すみません。それより、今デッキから操縦室を眺めてたんですけど船長がいらないんです！」

「はいはいってあのねえ。ま、ええわ。最近は自動運転の船も主流になってきたし、休憩でもとってるん

^{じやないか}とちやうか？ それかどつか別の部屋に集まってミーティングでもしてるんとちやう？ 最悪二級船舶の免許

くらいでよければ俺持つてるから、まあ困ったら俺を呼べや」

「なんだあ、そうなのか。分かったよおっさん！」

「あ、君、良かったら」

そう言って石橋さんは個包装された飴を一つ女の子に向かって軽く投げた。

「わわ、なにになに」

飴は顔を直撃して床に落ち彼女は少しムスツとしたが、足元の飴に目をやったその女の子はすぐに笑顔を取り戻した。

「おっさんありがとう！ まほ戻るね〜」

名前さえ名乗りはしなかったが、まほというお転婆学生と一緒に乗船していることは分かった。

しかしやっぱり変である。本当にこの船のスタッフはいったどこにいるのだろう。変な事件には巻き込まれたくないので余計な詮索をするつもりはないが、一度くらい乗っている船の船長の顔は見ておきたいものだなと思う。この船はかなり大きく、施設としては船頭から順に木の床の甲板、赤い絨毯のレストランがあり、四階建ての客室を挟んでレストランと反対側に屋外温水プールと小さなカジノ小屋が設置されている。またプールには夕方八時まで利用できる飛び込み台が設置されているようだ。もちろん市民プール同様監視員がついて二十四時間体制で安全を確保している。夜になると船の後ろ側一帯がナイトモードに切り替わり、重低音の響く音楽とネオンの灯りで終始輝き続けるらしい。客室の一階とプールの入り口の近くにはささやかながらカラオケボックスがあり、その横にダーツ、ビリヤードが一台ずつ置いてあって乗客同士の交流の場にもなっている。またプール内にはお酒を提供しているブースがあり昼間からオープンしているらしい。

「ところでお二人さんは今日の夜の過ごし方とかって決めてるん？」

「いえ、全然考えてなかったですね」

「ほんならナイトプールとかどうよ？ 俺もパンフレットでしか見たことないんやけど結構良いらしいで」

「私はいですよ」

「お、ノリがいいねえ」

「じゃあ私はミドリカイピリーニヤで」

「なんと。姉ちゃんはちゃっかりしてるねえ」

「えっへん。二杯目はウイスキーフロートの予定なんでよろしくお願いしますね、おにいさん」

石橋さんは鼻を掻いて喜びながらも少しだけ参ったという顔をしていた。

「まったく、親の顔が見てみたいもんだ。兄ちゃんもおーけい？」

「え、ええ。じゃあ、チャ、チャイナブルーで」

俺にはあまりカクテルの知識がなかったので、数日前に読んだ小説に出てきたカクテルの名前を口にした。

「山田くんって結構可愛い飲むんだね。もしかしてあんまりカクテル知らない？」

「バ、バレました？　なんていうか、そういう複雑なお酒ってよく分からなくて」

「カクテルって全然複雑じゃないのよ？」

「そうなんですか？　なんか名前が複雑そうなんでつきり」

「確かにせやな。って言うてもベースになる酒に他の酒とかジュースとか混ぜてるだけやで？　梅酒のソーダ

割とやつてること大して変わらんよ？」

「え、そうなんですか？」

「うん。例えば赤ワインとコーラを一对一の割合で混ぜればカリモチョってカクテルになるし、そのコーラをジンジャーエールに変えるだけでキティってカクテルになるのよ」

「え、意外と単純なんだ。赤ワインを白ワインに変えることもできるの？」

「うん。キティの赤ワインを白ワインに変えると今度はオペレーターってカクテルになるのよ」

藍果の解説は今までに受けたどの先生の授業より簡潔で分かりやすかった。

「カクテルの世界も深いんだな。俺もいつか勉強しようかな」

「兄ちゃん、それ社交辞令やな？ 勉強するつもりないやろ？」

「これまたバレました？ でも味の違いとか分からなそうだしな」

「中身半分違うだけでも結構違うのよ」

「そう…なのか……」

「へへ、山田くんなんか可愛い。今日の夜は山田くんのカクテルを教える会になりそうですね」
可愛いと言われてしまつて、俺はまだ飲んでもないのに少し顔が熱くなつてしまった。

「何か初心者が飲みやすいのってないんですか？」

「せやなあ、兄ちゃんにはマリアージュフレールとか似合うんちゃう？」

「あ、じゃあまずはそれにします」

俺がそういうと二人ともなんだか楽しそうにニヤつき始めて、終いには藍果が

「それ、紅茶だよ？」

と言ってきた、俺の顔は新橋にいる酔っ払いなみに真っ赤になった。

「もう、からかわないでくださいよ」

「すまんすまん、夜はちゃんとしたやつ選んだから楽しみにしといてや」

客室は防音部屋になっているため、夜になっていくらはしゃいでも外の音は一切聞こえないらしい。最もそのせいで朝食の時間に間に合わないお客さんも多いらしい。カジノの奥には芝生のデッキがあり、柵の向こう側には広い海が見える。木製のステアリングホイールの模型が海を背景にして設置されているため、写真撮影のスポットとして人気だとパンフレットに掲載されていた。パラソルと寝椅子も設置されているため晴れた日には人が多く集まるらしい。本物の舵輪は操縦室にあって丁度今いるレストラン入口に隣接された簡易的な階段から二階へ上がったところにある。

「そういえばなんや、朝食は二人で食うてたんか？」

「え、ええまあ」

「ほな昼食は俺も混ぜてよ」

「もちろんですよ。一人旅といっても終始一人じゃ面白くないですしね」

俺は船が目的地に着くまで、いやなんなら街についてもなおずっと帰りの船までこの三人で行動を共にするのではないかと思っていた。食事も済ませ一息ついたのでそろそろ自分の部屋に戻ろうと思い立ち上がったその時、また同じ年くらいの女性が息を切らしながら走ってやってきた。今度は船の後ろに繋がる扉からだった。

「そりや三十近くにもなつて船内を走つてたら息も切れるわな」

「あなたこれが初対面というのにちよつと失礼ね。私はまだ二十七歳ですよ」

しまった。余計なことを言ってしまった。

「あれ、ナナコじゃない？」

「えつ、藍果？」

「久しぶり！」

二人は知り合いなのだろうか。そう思っているのは俺だけではなかったようで石橋さんが口を開いた。

「お、なんや？ お前ら知り合いか？」

「はい、古内菜那子ふるうちななこと言います。藍果とは同羅大の時の同期でサークルも一緒だったんです。これ学生時代に二人でとった写真ですよ」

そう言つてスマホケースに貼っていたプリクラサイズの写真を見せてくれた。

「まー私は日本史専攻で彼女は確か法学か経営学とかの専攻だったから授業はあんまり一緒じゃなかったんですけど」

「へー、そんな偶然があるもんなんやな。びっくりやわ。俺は石……」

「つて、そんなことより大変なんです！」

彼女は石橋さんの自己紹介を聞かずして話を続けた。

「ぶ、ぶ、プールに人が……！」

「そりゃプールなんやから人くらいいるやろ」

話を遮られて不機嫌になった石橋さんがちよつと強めの口調で返事をしたが、すかさず菜那子が続けた。

「……死んでるんです」

空気が凍り付いた。

「ナナコ、死んでるってどういうこと？」

「私の部屋からプールに浮いている人が見えたんです」

菜那子は少し脅えた表情を見せていた。でも一つ、冷静に考えたらおかしいことがある。

「監視員は？ プールの監視員は何してるんです？」

「分かりません」

「とにかくプールに行ってみよう」

藍果、石橋さん、菜那子さん、そして菜那子さんの叫び声に反応して戻ってきたまほの四人とともにレストランを後にした。喫煙室の女性はイヤホンを耳に背を向けたままであった。プールまでは一分もかからないうちに到着したのだが、そこにはただ一人、革のジャケットを着た男性が顔を沈めて浮かんでいた。

「これ、ほんまに死んでるんか」

まほは驚きのあまり両手を口に当てて息を飲み、菜那子さんは浮かんだ男性を見ていられなくなって視線を逸らし、石橋さんに話しかけた。

「わ、私が上で見た時もこの姿勢だったから多分」

「と、と、とりあえず誰かスタッフを呼んできたほうが良くないですか」

まほが恐る恐る喋るが石橋さんにバツサリ声を重ねられてしまった。

「そんなことしてたら間に合わへん！ 今すぐ引き上げるで」

そう言うのと石橋さんは着ていたジャケットをプールサイドに脱ぎ捨てドルフィンジャンプで飛び込んだ。俺はただ見ていることしかできなかったが一分もかからないうちに溺れた男の肩を掴んだ石橋さんが戻ってきた。

「すごい」

「一応水上安全補助員の資格も持ってるからな」

男は完全に意識を失っていて石橋さん曰く脈ももうないようだ。藍果は初めて見る白目を向いた死体を見て海に向かって嘔吐し、目も当てられない現場に俺は愕然とした。そんな騒然とする現場でも石橋さんだけは冷静で、男のジャケットから財布を見つけ出して免許証の名前を読み上げた。

「若生瑛貴^{わこうえいき}」

免許証記載の誕生日によると昨日が三十歳の誕生日だったらしい。誕生日のお祝いの記念旅行といったところだろうか。

「財布には何も入ってねえな。免許証と数百円分の硬貨と交通祈願のお守り、あとゴミぐらいか」

「交通祈願のお守りって全然役に立たないんだ……」

まほの衝撃的な一言に絶句している余裕もなく、石橋さんは話を続けた。

「菜那子さんって言ったね、目撃した時の話とか経緯を詳しく話してくれへんかな」

「はい、あの、自分の部屋に忘れ物を取りに入ったらふと外の景色が見たくなって、カーテンを開けて外を眺めていたらプールに浮いた人の影が見えたんです。それで怖くなって誰か助けを呼ぼうとレストランまで来て皆さんにお会いしました」

「なるほど」

「まほじゃないよ、まほじゃないよ。私サイコパス心理テストで百二十パーセントサイコパスってできたけどまほは何もやってないよ」

菜那子さんの横に呆然と立ち尽くしていたまほに目を向けると彼女は慌てふためき急に話し出した。

「まあまあ、今はそんなこと言ってる場合じゃないんだから」

皆が俯いてしまつてしばらくの沈黙が続いたその時、プールの奥の小さなカジノ小屋から高身長の方がワイトデビルと書かれた煙草の箱を手の上で転がしながら歩いてきた。ニット帽にサングラス、黒い革のジャケットをまとつた四十歳前後に見えるその男性に石橋さんが声をかけた。

「こんにちは、調子はどうですか。この船のは甘デジって噂は本当ですかね。俺も今日の夜くらいに回して

みようかなって思うんですけどねえ」

きつとカジノ小屋に設置されてあるパチンコかギャンブルのマシンについての会話だろう。

「誰だい」

「俺は石橋。石橋河大。よろしくしてな」

「塚田だ。ここのカジノはやめときな。一発もあたりやしないさ」

塚田さんは鋭い目つきで彼の後方にあるカジノ小屋に目をやって、そう一言呟いた。

「そうかあ残念やな。じゃあ今夜のナイトパーティーはビリヤードにしようかな。ところで兄ちゃん、この男の人知ってたりしません？」

「兄ちゃんじゃない、塚田だ。さっき名乗ったろ」

そう言つて持つていた煙草を口にくわえ、ルイバリ―と書かれた銀のジッポを口元まで持つていったが、まほの一言によつて点火までには至らなかつた。

「おじさん、ここ禁煙ですよ。喫煙室はレストランの奥にあるんでそつちで吸ってください。私クサいの嫌です。あと、絶対に吸殻をそのへんにポイしないでくださいね。灰と唾で汚れた煙草なんて見たくもない」

「塚田だ、何度言えばわかる。じゃあ通してくれ、喫煙室に行く。ちなみにだがその男、名前は知らねえけど

さつきカジノにいたぜ。じゃあな」

塚田さんが通り過ぎしばらくして石橋さんが口を開いた。

「これは自殺やな」

「ほらね、まほじゃないでしょ！」

まほはきつと軽いショックを受けたのだろう。

「そうだね。ところで石橋さん、自殺ってどういうことですか」

菜那子さんが質問した。

「さつきこの若生って兄ちゃんの財布を見た時にな、お札が一枚も入っていなかったからピンときたんや。金どころじゃねえ、レシートもなかった。普通お金を使ったらレシートを受け取るもんやろ？　せやのにこの兄

ちゃんの財布には支払った金と引き換えに渡されたであらうはずのレシートがないんや」

「でもレシートを受け取らない人もいますよ」

口元を拭って体勢を立て直した藍果もまた口を開いた。

「俺も最初はそうやと思ったけど、乗船前におにぎりとお茶とリングゴをコンビニで買った時のレシートだけは何で知らんけど残ってんねん。たしかに財布の内側にはクレジットカードも入ってたけど、このコンビニのレ

シートは現金会計のレシートや。今から船に乗るって時にクレジット一枚で、お札の一枚も持たずに乗船するやつがおるか？　つまり俺の推理はこうや。ギャンブル好きが読むギャンブルマガジンって雑誌にはこの船のスロットは比較的大当たりの確率が高いって特集されていた。あ、これは事実な。それを読んで乗船したこの兄ちゃんは全額をカジノに注ぎ込んだ。実際俺も半分それ目当てで乗船してるしな。しかしさっきの煙草の兄ちゃんが言うたようにここでは全く当たりが出なかった。そこで現金じゃ足らずクレジットカードを挿し込んでゲームを続行。しかし結果は大負け、破綻した挙句自殺してしもた。せやから小銭は残ってて札は一枚もなかった。きつとそこの飛び込み台からジャンプしたんとちゃうかな」

「なるほど」

皆納得したような顔をしているが何か引っ掛かる。

「とりあえずスタッフ呼ばか」

石橋さんがそう言った時、俺と藍果と石橋さんは同時に嫌なことを思い出した。

「ねえ、この船って今本当にスタッフいるのかな」

不安そうにそうつぶやいた藍果の言葉に俺は鳥肌が立った。

「みんなで手分けして探す？　例えばまほと藍果さんと菜那子さんのペアとその男の人とおっさんの二人ペア

とかでさ」

レストランの店員がいないと話していたけれど、プールの監視員までいないのは明らかにおかしい。

「ごめん、俺は探さなくていいと思う。従業員はきつといいない。そんな気がするんだ」

「私もなんかそう思う」

俺の発言に藍果も賛同してくれた。それにもう一つ引っ掛かることがある。

「あの、自殺なら何で海じゃなくてプールで死んでいるんでしょう。飛び込み自殺だったらプールに飛び込むより船のわきから海に向かって飛び込んだ方が確実に死ぬるんじゃないですかね？ レストランの従業員はともかくプールの監視員がいないのは明らかに都合がよすぎるし、わざわざプールで死んでるのって、俺からしたら何だか死んでるところを誰かに見せつけたかったんじゃないかと思えないんですよね。自分でもこんなこと言ってるのが怖いんですけど、これってれっきとした事件じゃないかなって思うんです」

「じゃあ船の中に犯人がいるってことだよな」

ずっと俺の顔を見ていた藍果が足元に視線を落としながらそう呟いた。

「は？ 殺人？ まほ嫌だよ、船の中で殺人犯と一緒にだなんて。夜も眠れないじゃない」

「藍果、一回船の中にいる人を全員一か所に集めるように呼び掛けない？」

「そうだね。でもナナコ、どうやってやるの？」

「館内放送を使おうよ。操縦室の近くにあるんじゃないかな」

「なるほど。この若生さんはどうしますか」

「とりあえずタオルでも掛けて寝かせておこか。プールの入り口に大きい茶色いタオルが積んでなかったかな」

ここは船の上。電話が繋がらない今、外に連絡することはできない。よって警察や救急隊を呼ぶこともできない。若生さんには申し訳ないが死体と一緒に船に乗るというのは凄く気持ち悪いものだ。けれど、今は石橋さんの言う通りそつとプールの陰にタオルをかけて寝かせておくのが一番かもしれない。死んでいるとはいえ海に落とすなんてことはしたくない。そこにいた全員で合掌をしてプールを後にした。



第二話 他人

「乗客の皆様にお知らせいたします。お伝えしたいことがございます。メインデッキにお集まりください。

Ladies and gentlemen, I'd like to announce to all ship passengers. Please report to the main

deck, thank you. 繰り返します。お伝えしたいことがございます。乗客の皆様、メインデッキにお集まりください」

菜那子さんのアナウンサーのような綺麗な声が船内に響き渡った。石橋さんは菜那子さんの横で船の進路を確認し、俺と藍果はさっきの塚田さんというおじさんと名も知らない緑の服の女性を呼び出しに喫煙室に向かった。乗客全員が集まるのには十分もかからなかった。まだ来ていない乗客がいるだろうと皆が集まってから更に十分無駄に待つてしまったくらいだ。まさか乗客が九人しかいないとは考えてもいなかった。

「皆さんお集まりいただきありがとうございます。古内菜那子といいます。皆さんを館内放送で呼び出したのは私です。えっと……」

集めるところまでは良かったがその後何を話すかまでは決めていなかったのだろう。たしかにクルーはいなくて死体がいるだなんてことをどう驚かせず刺激させず説明すればいいのかは俺にも分からない。早めにデッキ

に呼び出してしまったため塚田さんは貧乏ゆすりをしながら解放してほしそうなオーラを終始放ち続けている。

「えーっと、船長代理の石橋河大です。と言うても勝手に代行しています。本当は二階に泊まってる客なんですけどね、実はずっと船長が見当たらないんですよ。船長どころかレストランの店員もプールの監視員も」

「本当にいないのかい？ 休憩中とかミーティング中とかじゃなくて？」

喫煙室にいたショートカットの緑の服の女性が口を開いた。

「皆さんをここに呼び出して確証が持てました。この放送は船のどこにいても聞こえるようになってるはずなんです。一般の乗客が勝手に船内放送を使ってスタッフが誰も止めに来ないって言うのは、つまりそういうことと違いますかね？ そしてもう一つ、驚かないで聞いてほしいんですけど悲しいことにこの船内で若生瑛貴という一人の男性の乗客が何者かによって殺害されていました」

石橋さんが『若生瑛貴』と言った時の皆の顔を見ていたが、怪しい表情をした人は誰もいなかった。気になった反応といえば藍果が少し俯いたくらいで、名前の知らない二人の女性はひどく驚いた様子を見せていた。人が死んだと聞かされれば当たり前の反応であろう。しかし一方で喫煙室にいた緑の服の女性は全く動じる様子を見せなかった。そして誰にも何も言わず石橋さんの話は続く。

「ここは船の上です。海の上に監禁されてしまったわけで、気休めにしかならんかもしれませんがお互い身元を明かして極力集団行動を心がけられればと思ってお呼びしました。まあ人が死なおじくなりになられてはってあまり楽しめる雰囲気ではないですけども、自己紹介タイムといきましょうよ。ね。じゃあ、はい」

そう言つて手に持っていた有線マイクを隣にいた藍果に渡した。

「大塚藍果、二十七歳です。うーん気軽に藍果って呼んでください。……こんなもんかな？　じゃあ、まほちやん」

「え、もうまほ？　あーあー、えっと和田わだ茉帆まほです。十九です。最後のティーンエイジャーです！　えーつと三階に泊まつてるから遊びに来てね。えーつと、以上です。はいっ」

マイクが俺に回ってきた。

「山田颯人です。二十八歳です。高校大学と陸上をやっていたので学生時代のあだ名はだっしゅでした。気軽に接してください」

それだけを言い残して次の人にマイクを渡したが、マイクがなくなった今無駄に自分の手が震えていることに気づいた。意外と緊張しやすいのかもしれない。

「えっと、はい、私は江川えがわ綸奈いとって言います。なんだろう、綸奈って呼んでください。三〇九号室に泊まつて

ます！ あ、二十三歳です。よろしくお願いします？ 以上です」

短い黒髪の綸奈の次は長い茶髪の女の子だった。

「はい！ 傳虹嘉ふにじかです。二十一歳です。三〇八号室にいます。うーん、虹嘉って呼んでくれると嬉しいです」
だんだんコンパのようにあたたかくなってきたムードを次の男がぶち壊してしまった。

「塚田だ。以上だ」

なんとも素気のない返事に綸奈が切り込んだ。

「下の名前は何て言うんですか？」

「竜勇孫だ。塚田竜勇孫つかだたいそん。一階にいる。よろしく」

「おいくつなんですか？」

「三十八だ、もういいだろ」

さすがに十五も下の可愛い女の子に上目遣いで聞かれたら答えざるを得ないのだろう。

「三十八なんですか？ 見えない！ 塚田さんもつと若く見えます」

人が死んでいるというのに何とも言えない空気である。けれど最低限聞きたいことは聞くことができた。

「君は何て言うんだい？」

塚田さんと綸奈の終わりの見えない会話に少しイラついたのか、石橋さんは最後の女性に無理やり話を振った。例の緑の服の女性だ。彼女はマイクを一瞬だけ口元にもってきて一言、

「小林真璃愛、二十八です」

と息の多く混じった声でそれだけを言い残し、マイクは石橋さんのもとに戻ってきた。

「みんなありがとう。まあそんなわけでとりあえず、誰か若生って人のことで何か情報持っている人とかいーひんかな」

石橋さんがまた初対面の人に見せる明るく作られた関西弁で話し出すと、今自己紹介を終えたばかりの真璃愛さんが背を向けて近くの椅子に腰かけた。

「くだらない、犯人がここで見つかるまで延々とこんなことやろうだなんて思っていないでしょうね」

「お、おいおい待ってくれよ。真璃愛ちゃんっていったかい」

「気安く名前で呼ばないで！」

急に距離を縮められたことが癪に障ったのか、彼女は飛んできた虫を払うかのように声を上げた。しかし、すぐに苛立った心を静めて

「小林でいい」

と地声で囁いた。彼女と他の乗客との間に確かな壁がうまれたのはこの瞬間からだっと思ったと思う。

「すまんすまん、小林さんな。まあまあ彼の話はじゃあ一旦置いておいて、まだ問題っちゅうのが少し残っててな。掃除とかは個人で何とかするとして俺には飯が作れないんですわ。誰かちよっと協力してほしいなって思ってたりするんやけど、どうやるの？」

石橋さんが頭を掻きながら全員に向かって問いかけると、すかさず虹嘉が左手を挙げた。

「あ、じゃあ私料理できます！　よかったらやりますよ」

「おいおい冗談じゃないだろ。今この中に殺人鬼がいるって言ったばかりだよな？　立候補者に料理を作ってもらうとか無神経すぎるでしょう。毒を盛られる可能性とか考えないんですか？」

椅子のふちに足を立てて、花柄の靴下を隠すようにズボンの裾を引っ張りながら小林さんは訴えた。するとそれに賛同するかのように塚田さんも全員に向かって強い口調で話し始めた。

「だいたいお前らミステリー小説の一つも読んだことないのかよ。殺人鬼って言うのはこういう序盤でしれっと名乗り出てきて物語の最後まで人を殺し続けるんだよ。虹嘉って言ったな。俺はお前を信用できねえな」

塚田さんの言うことも確かに共感できる。虹嘉は成人して間もない学生だ。きつと善意で手を挙げてくれたのだとは思いますが、こんな状況になってしまっただけでも神経質になってしまふ。

「そんな、ひどいよ、私はそんなつもりじゃないもん」

「犯人は誰だってみんなそう言うさ」

「私は犯人じゃないもん」

「どうだか」

「じゃあお腹がすいた人がそれぞれ勝手に作ればいいじゃないですか」

犬の吠え合いの様に会話はどんどんヒートアップしていくも、唾が飛ぶほどの勢い溢れる虹嘉の主張は次の小林さんの冷静な一手により鎮められた。

「いや、それはやめた方がいい」

急に全員が話すことを辞めた時、俺はその静かさからふと海の広大さに気がついた。

「いつでも誰でもキッチンに入れるようになったらそれはそれでまずい。それこそいつでも毒を盛ることができるじゃないか。でもそこに一人責任者を立てておくだけでリスクは減る。それに、全員分一気に作れば全員死ぬか全員生きるかの二択に留まる。誰かが死んだ瞬間にそのシェフ代行人の責任になるなら、責任者も下手なことはできなくなるし監視の目もより光るだろ。だから決めた方がいい」

小林さんは冷たくてただただ無口な人だとばかり思っていたが、状況分析力や問題解決力に長ける冴えた頭の

持ち主なのかもしれない。小林さんが味方になればこの事件もすぐに解決するだろうと期待を寄せている自分がいた。

「じゃあどうやって決めるのよ」

虹嘉がまだ少し怒った口調で尋ねたが、回答は俺からしても予想外なものであった。

「くじ引き」

「は？」

「え？」

皆が口を半分開けたまま表情を固めた。

「下手に貧乏くじを引くよりちゃんとしたくじ引きで一人を決めた方が安心じゃないかい？　ここには九人の乗船客がいる。仮に一人が犯人だとしたら九人分の一の確率で、仮に犯人が二人組だとしたら九人分の二。確率で考えれば七十七パーセントから八十八パーセントの確率で当たりくじを引ける。天気予報で降水確率八十パーセントって言われたら傘を持っていくだろう？　だったら選ぶ側も選ばれる側もフェアになるくじ引きでいいんじゃないか？」

「なるほど、面白いじゃないか。ただ虹嘉は除外してくれ。やっぱり信用できん。それと俺は料理なんかやつ

たことねえから辞退する」

塚田さんが自ら辞退宣言をすると、続けて石橋さんと藍果も料理ができないという理由で辞退した。石橋さんはともかく藍果は料理ができそうに見えたが、実家暮らしのお嬢様で料理を一度もしたことがないという。そして情けないことに俺も料理はできないのだ。だから俺も極力目立たないように手を挙げて辞退した。

「結局残ったのは四人か。辞退しても構わないけどどんな結果になっても文句は言うなよ。例え辞退組が全員死ぬようなことになってもね。異論はないね？」

そう言つて小林さんはズボンの後ろのポケットに入れていた小さなスケジュール帳を開き、手早くあみだくじを書き始めた。

「私は最後でいい、みんな適当に名前を書いてもらえるかな。あ、それ以外のページは絶対に開かないでよ。開いたら殺すから」

冗談にもならない冗談を言い残して彼女は横にいた塚田さんに手帳を手渡した。全員が書き終えるのに時間はいくつ、その後小林さんが数本の線を適当にササつと書き加えて運命の瞬間は訪れた。

「結果は……イトナ。江川さんね」

「えっ！ 私！ まじかあ」

「君が犯人じゃないならどうとやりきれんだろう？　それかなんだ、君が犯人かい」

塚田さんの少しばかり冷たい口調に綸奈は小さな声で反論した。

「いえ。ただ、犯人じゃないからこそ不安なだけで」

「でも綸奈先輩はもう調理師免許の資格も持ってますし大丈夫ですよ」

虹嘉の発言にその場にいた全員が同じ疑問を持った。

「君たちって何、もともと知り合い？」

「はい。同じ東京美彩調理師専門学校みさ通ってるところに通っていて虹嘉は私の二個下の後輩なんです」

綸奈の返答にまた塚田さんが口を挟もうとしたが、それよりも先に小林さんが制するように言葉を残した。

「まあ何がともあれくじ引きで決まったことだし、今更決め直してたらいつまでたっても終わらないよ。こんな話し合い長々やってても意味がないんだから。もういいでしょ」

言い終わると同時に小林さんは甲板を後にし、それをきっかけに集会が終了した。塚田さんも次いで喫煙室に向かい石橋さんも甲板を去ろうとしていたのだが、残された側としてはちよつとした後味の悪さを感じていた。誰も傷つかないはずの集会で皆が傷ついた気がした。既に菜那子さんは解散とともに虹嘉の元へ近づき慰めの言葉をかけはじめている。藍果にくつついて動いていた俺も彼女とともに菜那子さんの元へ行き、しばらく

くミニ女子会に巻き込まれることになった。女子会といっても内容はただただ小林さんと塚田さんに対して感じていた不満を菜那子さんと藍果がひたすら聞いてあげるというものである。男はいない方がいいだろう、そう判断した俺は少し席を離れることにした。しばらく俺はすることが無くなったので船の先端にある椅子に腰をかけ、誰にも聞こえない程度の小声で一人ぶつぶつと人物情報を書き纏めることにした。たまたま持っていたハンドバッグを下敷きにして、手帳の自由欄のページに全員の名前を初めに書き全員の分析を始めた。

「まずは藍果。俺と一緒にレストランでしばらく話していたから彼女にはまあアリバイはあるほうだな。ちょっと消極的でボーっとしてるように見えるけど頭の中ではいろんなことを考えてそうだな。従業員がいないことに気づいたのも彼女。小柄で茶色いコートをよく着ている……つてメモしなくても藍果については覚えちゃったな。次に会ったのが石橋さん。関西弁のおっちゃんで今のところ正義感に溢れる船内のムードメーカーってところかな。部屋は二階。積極的に全体の指揮を執っているけれど細かいことを見落しがちな性格かな。小林さんのようなちよつと意見が強い人は苦手そうだなあ。きつと本当はもつともつと弱い人なのかも。それを関西弁っていうボールで隠している感じがするな。特技は海関連、と。その次に会ったのがレストランに走って入ってきた茉帆。船内では最年少の女の子で三階に泊まる彼女はとっても正直な性格。正直な性格というよりきつと、思った事を正直に口にする性格なんだろうな。誰に対してもフレンドリーなのが特徴の一つ

なのかな。でもなんか思っている以上に本当は大人な人って感じがするなあ。そして、その後にあつた菜那子さんが藍果の知り合い。同羅大学時代の同期でサークルが一緒だったんだっけな。藍果と同じように冷静な人ってイメージだけど、さっきの様子を見るとすごく心の優しい人で、その優しさが無意識のうちに表に出ているって感じ。でもまだ頭の中ではどんなことを考えているかが分からないからこそ、いまいち距離感が掴めないんだよなあ。その反対に頭の中で何を考えているのか分かりやすいのが小林さん。分かりやすいっていうよりは論理的っていうべきかな。彼女は探偵か何かだろうか。誰よりも視野が広くていろんなことに素早く気づけるあたり犯人殺しの女の子って感じで敵には回したくない存在だなあ。リスペクトリスペクト」俺は口を閉じて二回頷いた。

「見た目の特徴は服もコートも時計のベルトも深い緑色。人間関係の視点で見れば誰に対してもまだ友好的じやなく大勢を敵に回してしまっている。敵に回しているという意味では塚田さんも気難しい人だ。ぱっと見た雰囲気の特徴だけで言えば『西成でサングラスをかけながら風を切って歩くダンディなおっちゃん』ってところなのだが、彼の瞳の奥までは未だ分からない。午前中はずっとカジノ小屋に籠っているくらいのギャンブラーで、あとは……自分の中に明確な芯のある男？ こんなもんな。あ、あと常にニット帽をかぶっていることが特徴。身長が高く声が低いからかもしれないけど、時々一つ一つの発言や行動が威圧的に感じるんだよな

あ。俺はあの声好きだけど。残り二人は集会で会ったばかりの二人。綸奈と虹嘉は調理師学校の先輩後輩関係で、物静かで消極的な先輩綸奈と積極的で人想いな後輩虹嘉。部屋は三階で隣同士。彼女たちの性格ってなんだろう、今さっき会ったばかりだから全然分らないけど二人とも純粹でいい人っていう風にしか見えないんだよな。学生が殺人を犯すとは思えないし。ってかこんな雑なプロフィールを纏めて意味があるのかな」

他人の一面を見ただけで決めつけた見方をしてはいけなさと分かっていながらも、何かに役立てばいいなど今ある最大限の主観的情報をメモとして書き留めた。彼ら彼女らの本当の姿というものはどんなものなのだろう。二十年、三十年と積み重ねてきた人生によって作られた個性的な意識というものは、本人達ですら理解できない領域にあるのかもしれない。

「そういえばプールの状況をよく見ていなかったな」

俺は立ち上がってプールの視察に向かうことにした。レストランを通り抜ける道を選ぶことにしたのだが、キッチン周りにて綸奈を囲んで石橋さんと藍果と茉帆が何か話をしている様子が見えた。どうやら女子会の方が先に終わっていたようで、二次会のようなテンションで皆が会話をしているようだった。喫煙室には小林さんと塚田さんが立っていて、こちらでもまた何かを話しているようだった。レストランを抜けてプールの手前に差し掛かった時、誰かに急に話しかけられた。

「ねえ、どこに行くの？ 山田さん」

悪いことをしているつもりはなかったのだが、いきなりの出来事だったので心臓が熱くなった。感覚としては日本のホラー映画で感じる恐怖感に似ていた。背後に誰かの気配を感じて振り返るも誰もいず、顔を正面に戻した時に白塗りの女性のお化けが現れるような、そんな感覚である。

「な、なんだ、菜那子さんか」

これは俺の心の中で自己満足のためだけに行った補足ではあるが、決して菜那子さんをお化けであると思ったわけではない。

「菜那子でいいですよ。何をそんな焦っているんです」

この一瞬だけは菜那子が犯人なのではないかと心から疑った。

「お、おう。ちよつとプールに行ってみようかなって思ってた。犯人は現場に戻るとも言うし」

「なるほど、探偵ごっこですね」

「まあそんなところかな」

「とか言って、現場に戻る犯人っていうのが山田さんのことだったりして」

「おうおう、冗談はよしてくれよな」

「私もお供していいですか？」

「もちろん、一人より二人の方が安心だし、何かあった時の証言者になるから願ったり叶ったりだよ」
そんな話をして歩き続けているとプールサイドに一人の女性がいることに気づいた。虹嘉だ。

「何してるんだろう」

「証拠隠滅とか？」

「おいおい虹嘉を犯人に仕立て上げる気かい？ 菜那子って割と恐ろしい冗談をポンポン言うんだな」

「でもあり得ないかもしれないかもしれませんよ」

「まあそうだけど」

俺たちは足を止めてプールに踏み入るタイミングを計っていた。

「そもそも本当に他殺だったとして犯人の目的ってなんだと思います？」

「うーん、まずは若生さんに関わりがあった人物って考えるのが自然だよな」

「けどそれを見つけれのってかなり大変ですよね」

「そうだなあ。ん、そういえば塚田さんがカジノでどうたらこうたらって言っていたな」

「実はカジノで大当たりしていて、それを横取りするために殺したとかですかね」

「カジノの金庫でお金の動きを調べれば分かるか」

「けれどカジノの金庫ってきつと施錠がしつかりされてますよね。そう簡単に入れるとは思えないんですけど」

「そうだな。それより一回プールに踏み込んでみるか」

そう言ってプールのエリアに入ろうとしたところ、虹嘉がレストランの方に向かってるのが見えたので何事もなかったかのように話しかけてみることにした。

「あれ虹嘉じゃん」

「やっほー」

「何してたの〜？」

「ん？ プールの掃除だよ。誰かが綺麗にしなきゃと思ってはいたし、私は私ができることをやろうって。さつき菜那子さんとかと話していて気づかされたんだ」

本当に世話好きで心優しい人なのだろう。

「そうかそうか、ありがとうな」

軽く挨拶程度の会話を交わした後俺と菜那子はプールに着いたのだが、思いもよらない光景がそこにはあっ

た。

「お、おい菜那子、これって」

「え、ええ」

若生瑛貴が消えていた。

「虹嘉か」

「きっとそうかもしれないですね。たしかに綺麗にはなっているけど……死体は一体どこへ」

「虹嘉を呼び戻すか」

「話を聞く価値はありそうですね」

俺たちは大至急レストランへ戻った。

「虹嘉！！」

「あれ、山田さんに菜那子さん？」

「聞きたいことが一つあるんだけど、さっきプールで何してたって言った？」

「掃除ですよ」

「その、若生さんの死体は、どこに？」

「ああ、海に落としましたよ。散骨みたいな感じに」

その行為のまずさに気づいていないのか、悪気を一切見せずに平然とした表情で彼女はとんでもないことを呟いた。

「は?! 海に落としたって本当かよ」

俺たちの声が大きかったのかレストランにいた人たち全員の耳に届いてしまった。

「うん、虫も寄ってきちゃうし。殺すために海から突き落としたら問題だけど死んでしまった人を自然に還すのは問題ないかなって思ってた」

問題ではない。若生瑛貴の殺害方法すら分かっていない今、死体の遺棄は問題ではない。しかし遺棄されてしまった今となってはこれ以上問題か問題じゃないかを争うことには生産性がない。小林さんの思考手順を頭の中で真似しながら解決策を導き出そうとしてみたが、俺には適切な答えが見つけれなかった。そんな時にファインプレーを見せてくれるのはやはり石橋さんだった。

「まあまあ、きつと君なりの善意だったんだろう。これからもし何かが起こってもみんな話合ってから行動するようにしようか」

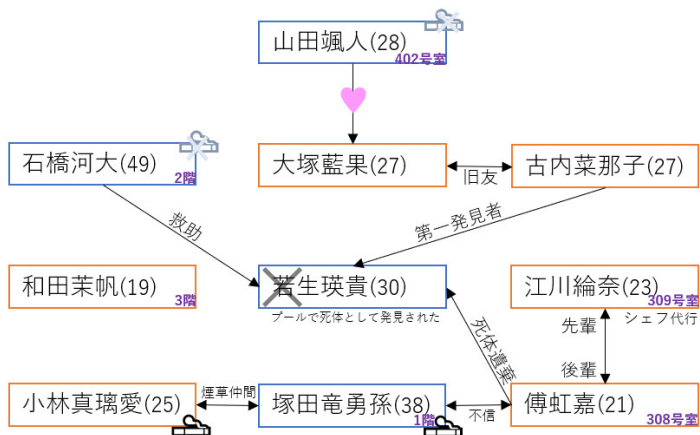
今の状況では一番気の利いたフォローを飛ばしてくれた。どれだけピンチな状況になっても上手いこと場を纏

めてくれるというのは石橋さんの良いところかもしれない。ファインプレーといいつつも死体の様子は見れないままで推理の方は纏まらなくなってしまったのだが、ずっと考え込んで沸騰した俺の頭を休めるように促してくれたのは綾奈だった。

「みんな、話割っちゃってごめんなさい。とりあえずお昼ご飯ができたので食べれる人から食べませんか」

「せやな。話だけしてても解決せんこともあるしな。菜那子さん、悪いけどまた放送いれてもらえるかな」

「分かりました」



第三話 運命共同船

繪奈が作ってくれたご飯は美味しかった。緑色の小さな豆の入った甘いご飯にアサリのお味噌汁。ホッケの塩焼きに出し巻き卵。ごぼうと人参をゴマで和えた小鉢に黄色い沢庵。デザートにはバナナプリン。正直こんなにも贅沢な料理が出てくるとは思っていなかった。料理はレストラン内に作り置きしており、食事のタイミングはそれぞれの乗客に任せるようにしている。しかしやっぱり一口目というのはなかなか怖いものである。大丈夫だと分かっているにもかかわらずできない。繪奈を疑っているわけではないけれど、もし毒が盛られていたらどうしようという考えでしまう。なかなか箸をつけない俺を繪奈が見たらどう思うだろう。俺よりも先に食事を口に行っているメンバーもいるし、何より繪奈が食事をしているから大丈夫だろう。みんな一口目は同じことを考えたのかな、と思いつながら俺はまずアサリのお味噌汁を手に取り一口すすったのだが、その時、呻き声とともに何かが倒れる大きな物音がした。

「何だ？」

ついつい怖くなって大声をあげてしまったが視線の方向には椅子ごと倒れた女性がいた。虹嘉だった。

「大丈夫か！」

それは咄嗟の出来事で瞬時に彼女のもとへ駆けつけることができなかったが、自分の両腕からうなじにかけて大量の鳥肌が立ったことを実感し、初めて自分が怖がっていることに気がついた。ふと横を見るとキッチンから駆け出してきた綾奈が口を開けながら立ち尽くしていたが、その顔に涙は流れていなかった。

「綾奈！ お前毒見したのか？」

こんなことを言うつもりは一切なかったのだが、少し焦っていたせいか俺の口調が少し荒々しくなっていた。
「ちよつと山田くん、そんな言い方しなくてもいいでしょ」

藍果の顔が強調って俺は罪の意識を感じた。

「したよ。ちゃんとしたよ。ちゃんとしたのに……」

震えた小聲で綾奈が返事をした。綾奈は毒見をしたのに虹嘉だけが死んでしまった。正直理解が追い付かない。なぜ死んでしまったのが虹嘉だったのだろうか。若生瑛貴を殺したのが虹嘉だったのだろうか。若生の財産を吸った虹嘉を殺して新たな犯人が全財産を横取りしようとしたのだろうか。それとも綾奈が若生瑛貴を殺して罪を虹嘉に擦り付けたのだろうか。いや、だとしたら虹嘉を殺すのは変だ。綾奈が若生瑛貴を殺したとして、その決定的証拠を虹嘉に見られたのか？ 俺の頭の中では既に安っぽい推理劇が始まっていた。そもそも食事中に死んだからと言って綾奈が犯人と決めつけていいのだろうか。警察がいらないからこそ仕方がない

話ではあるが死因が何であるかが分からない。

「せめて少しばかりでも法医学の知識があればよかったのに」

俺はもう一度綸奈に目を向けるも、彼女は虹嘉の死にショックを受けてずっと黙りこくっている。

「とりあえず姉ちゃんには悪いけど、しばらくどつかの部屋に監禁させてもらってもええかな。それから彼女の食器は下船した時に何かの証拠になる可能性があるから手はつけずに残しておこか」

「私じゃないのに……。虹嘉は私が一番愛情を注いだ後輩だったのに。今日の船旅も虹嘉が誘ってくれたのに……。なんでみんなそんな目をするのよ！ 何とか言つてよ！」

緊張が走った静かなレストランの中で皆、綸奈に何と声をかければいいのか、ただそれだけを探っているのだろう。

「犯人は誰なの、犯人は。いるんでしょう？ シェフ代行をくじ引きで決めようって言つた小林さんはどこよ。本当は私が料理人になるように仕向けたんじゃないの？ 虹嘉を信じないって言つた塚田さんはどこよ。なんで虹嘉を疑うのよ。なんで私を疑うのよ。私たちは何もしてないっていうのに！ もう誰も信じられないよ」

その言葉にショックを受けた俺は自分の席から彼女に向かって静かに声をかけた。

「いめん」

レストランにいた全員の視線を浴びていることに気付きながらも話しかけることを辞めなかった。もうそんなことで緊張できるほど俺は正常ではなかった。

「ごめん、綸奈。少しでも疑ってしまったことを謝りたい。でもな、誰が犯人か分からない以上誰かを犯人じゃないって言いけることはできないんだ。綸奈も俺が百パーセント犯人じゃないって信じれないだろう？ みんな死を目の前にして思っていることは同じなんだよ」

綸奈は言葉を失ってただただ俺を見ることしかできなくなっていて、そんな彼女に対して俺は今考えたことを語ることにした。

「人はみんな死ぬのが怖い。でもきつと本当は死ぬこと自体が怖いんじゃない、死ぬ時の未知の痛みや未知の恐怖や未知の心臓の高鳴りが怖いんだと思う。心無い犯人はきつとそんなことお構いなしに手を加えていくんだろうけど、その容赦の無さがまた恐怖の一つになっているんだと思う。だからきつと死にたくないって言うし、自分は生き延びたいと思う。今までの人生に長期的な苦しさや辛さが多くあったのにもかかわらず、ここぞとばかりは生きたいと思う。それほど死なないことに執着している人間は最後、自分さえ生き残れば良いって考える。だから海の上で今こうして追い詰められている俺たちは、全員が一致団結した仲間の様に見える

て、心の中では全員が敵なんだって考えてしまふんだろうな」

「うるさい、自分が疑われてないからそんな呑気なこと言ってられるんですよ。本当は山田くんが犯人なんじゃないの」

「違うよ。違うけど、気持ちは分かるんだ」

「同情なんていらなから。同情なんかいらなから私が殺人犯じゃないことを証明してよ」

俺と綾奈の会話をしっかり聞いてから石橋さんが話を切り出した。

「若生の兄ちゃんと虹嘉ちゃんって言うたっけな、二人が死んでしまった今、無差別殺人が起きてるのかもしれない。くじ引きでシェフ代行を決めてこんなことになってしまったからこそ姉ちゃんには申し訳ないけど、しばらくどつかの部屋に拘束してもええかな。監禁って言うたら聞こえが悪いかもしれないけど、しばらくの間行動を自粛してもらいたい。その代わりといったらなんやけど、この監禁は逆にまた何か事件があった時、君が犯人じゃないことを証明するアリバイみたいなものになるからさ」

石橋さんの考え方は少し手荒な気もするけれど、これもまた今の状況では一番良い判断なのかもしれない。ただ綾奈を監禁するということは逆に、これ以上船内で何も動きがなかった場合無条件で綾奈が犯人という扱いを受けることになってしまう。犯人が見つかって何事も起こらなくなることは誰しもが願っていることではあ

るが、目の前で一見無実に見える学生が犯人と断定される瞬間はあまり見たくないものである。しかし綸奈がシェフになったのはくじ引きで決まったことだった。もし綸奈が犯人だとして、あみだくじの結果シェフにならなかった場合はどうやって虹嘉を殺していただろうか。そう考えると綸奈が犯人じゃない気もしてくる。

「虹嘉はどうするつもりですか」

綸奈が弱弱しい声で尋ねた。

「せやなあ、彼女の部屋に運び込んで上陸まではそのままかな」

「そんな……。私、自分と虹嘉の身の潔白が証明されるのであれば監禁を望みます。ただし、虹嘉と同じ部屋に入れてください」

「おいおいまじかよ、彼女はもう死体やで」

「うっさい！」

綸奈は初めて声を震わせた。

「私は虹嘉のことを本当に慕っていたんです。虹嘉と私は親同士が知り合いで小さいころからよく遊んでいたんです。中学校に入ってからのはあんまり遊ばなくなっただけ、彼女が高校三年生の時に親の携帯を通してメールをくれたんです。私を追いかけて同じ学校に入学したよって。授業も一緒、放課後も一緒、家に帰っても

SSで繋がっていて、今となっては誰よりも一緒の時間を過ごした大切な人なの。今日会ったばかりのあなたに分かつてもらうつもりは到底ないですけど、彼女が生きていても死んでいても私の中での価値は変わりません。死んで価値が変わるならお前なんかとつと死んでしまえ！」

綸奈は少し息を切らし、険しい声でとどめを刺した。

「彼女をゴミのように扱ったこと、私は絶対に許しません」

「す、すまなかった」

石橋さんはいつもの勢いを急になくして頭を下げた。その様子を見てはっと我に返った綸奈は

「石橋さんは天国の存在を信じますか？」

と、惨めな声で問いかけた。

「天国？」

綸奈の唐突な質問に石橋さんは答えを出せなかった。

「虹嘉は死んでも虹嘉は生きているんです」

その話を聞いて菜那子が優しく賛同した。

「私は信じますよ。形ある全ての物体は誰でも触れるし扱える一方、自我を扱えるのは本人だけです。私は他

人の自我に触れることができません。つまり自我は単体として地球に存在できないんです。私たちが定義する『生きる』って言葉はつまり身体をただ借りるだけのことにすぎなくて、綸奈さんの心の中に虹嘉さんが生きていてのと同様、虹嘉さんは生きていますよー

菜那子の考え方には時空間的概念が抜かされているようにも思えたが、明らかな真実というものは存在しないのかもしれない。人間の進化の過程で根本的に欠陥のある論理法則が全人類の知能に反映されてしまったのかもしれない。そんな俺の思考は誰にも反映されず、綸奈は虹嘉とともに一度も顔を上げることなく石橋さんに連れていかれたのであった。彼女の目はもうどこにも焦点を合わせることができなくなっていた。自分のふるまった食事で自身の大切な後輩を失った可能性があるという状況に直面すると、誰しもがそういう顔になってしまふのかもしれない。俺はまだ食事に半分も手を付けていなかったがこれ以上食事を続ける気にはなれず、席を立ち自分の部屋へと戻ることにした。ほとんど全部を食べ残したお皿をどのようにして下膳しようかと、ただ手だけを動かしながらずっと考え事をしていた。部屋で鍵を閉めていれば殺されることはないのだろうか。誰かが入ってくるとしても部屋のドアは一つしかないし、このまま部屋にこもりっぱなしでも良いかもしれない。気づいたら自分の身をいかに守るかということばかりを繰り返して頭の中でシミュレーションしていた。

「怖いね」

そう声をかけられてやっと、藍果と菜那子と同じ席でご飯を食べていたことを思い出した。下膳の手も完全に止まっていて、それくらい自分の視野が狭くなっていたんだと実感した。考えてみれば食事を始めた時から彼女たちのことは最早見えていなかったかもしれない。ふと彼女たちの食事にも目をやったが俺と同じものを食べていたようだ。藍果も菜那子も食べるペースは俺とほぼ同じで、彼女たちの身体に異変もなかった。虹嘉の近くで一緒に食事していたのは茉帆だった。部屋に戻る時に茉帆の座っていたテーブルを見たが、やはりメニューの内容は俺らのものと変わらないように見えた。なぜ虹嘉だけが死んだのか、気になって虹嘉のほぼ完食されたプレートを眺めていたが何も変わったものは見つからなかったし小鉢の数も皆と同じだった。

「なんかこう言ったら死んだ虹嘉に申し訳ないけれど、今どこかで自分が死ななくて良かったって思ってる私がいるのよね」

菜那子がそう話してくれた。

「俺もだよ。死が目の前まで近づくと人って余裕がなくなるんだな」

「この船の中に犯人がいるってことだね。さっき虹嘉ちゃんが倒れた時、乗客みんなの顔が思い浮かんだんだ。あの人が犯人かな、この人が犯人かなって。あんまりよくないって分かっているけどどうしても人を疑っちゃう」

やうし、それと同様にこうしている今も誰かに疑われているんだらうなって思っちゃうんだよね」

「そうだな。俺も同じだからその感覚分かるよ。今日会ったばかりだけどさ、菜那子や藍果が犯人だったらどうしようって思ったりもする。でも、もうお互い様だからさ。俺も心のどこかでみんなを疑っていることを謝りたいし、一方俺だって疑われても仕方ない存在なんだから気にしないでほしいとも思うな」

「そうね」

「そういえば菜那子って部屋はどこなの？」

藍果が訪ねた。

「えっとね、今は二階の真ん中あたりの部屋だったかな」

「なんかさ、みんなが集まってた方が安心じゃない？」

藍果の言う通りである。しかしそれよりも気になることがあった。二階の真ん中あたりの部屋からプールは見えないはずではないか。

「菜那子、部屋移動したのか？」

「え、すごい、よく分かったわね。乗船して部屋で休憩している時に船長さんが入ってきて移動することになったのよ」

「まてまて、船長つていたのか？」

「うん。新井つて言つてたかな。女の船長さんだったからよく覚えてるよ」

「ちなみにプールで若生さんを見たのつていつどこの部屋だったの？」

「あ、えつとね、それは別の部屋なの。二階の部屋に移動する前は三階の部屋にいたんだけど、その前の部屋に時計を忘れてたことを思い出して取りに戻つたのよ。最後に三階からの景色を見ておこうつて思つて窓を覗いた時にたまたま目撃したの。だから多分時計を忘れていなかったら若生さんの発見はもつと遅れてたかもしれない……」

「なるほど、あれそもそも船長には何て言われて部屋を移動することになったの？」

「えつと、なんだつけな。確か隣接する部屋からクレームが入つたみたいなこと言われたんだよね。私スーツケースが重くて不器用だから結構壁にぶついたりしたんだけど、そんなに怒らなくてもいいのになつて思うよね」

菜那子が優しく微笑みかけてくれてやつと、人が死ぬ前の会話の空気に戻つた。

「じゃあさじゃあさ、この後どこかに集まつて推理大会みたいなことでもない？ レストランでこんな話してるのもなんだし」

たしかに、誰が聞いているかわからないところで深い話をするわけにもいかないなと俺は二、三度頷いた。

「藍果の提案に乗った！」

「じゃあ荷物を纏めて……どこにしようか」

「私の部屋で良ければ開けるよ」

「お、ありがとう」

「じゃあ菜那子の部屋にしよう」

「荷物ちよつと散らかしちゃってて少し片づけたいから、十分ちよつと後とかでも良い？」

「うん！」

「じゃあ私たち四階だから支度したら向かうね」

「あれ、藍果に俺の部屋どこか教えたつけ？」

「ううん、朝たまたま部屋から出るところを見かけたのよ。ただでさえ乗客少ない中で山田くんしか見なかったからさ」

「なるほど」

そう言つて二人で階段を上りそれぞれの部屋に戻った。俺の部屋の方が階段に近く藍果の部屋は三つくらい部

屋を挟んで奥の部屋だった。

「じゃ、また後で。菜那子の部屋集合とかでいいかな」

「そうね」

そうやって藍果と別れた俺は自分の部屋の扉を開けようとしたのだが、誰もいないはずの部屋の中から女性の話し声が聞こえてきて俺は少し怖くなった。声は籠っていて聞き取れず、仕方なくゆっくりと慎重に扉を開けると、真っ暗な部屋の中で消し忘れてしまったテレビが騒がしく雑に輝いていた。それ以上のことは何もないのだが、遮光カーテンが閉まっていたこともあって余計に不気味に感じてしまう。

『神奈川県横浜市で少女を誘拐し殺害したなどの罪に問われている女性の裁判で、横浜地裁は懲役六年の判決を言い渡しました。中継です』

「そういえばそんな事件あったな。まだ裁判やってたんだ」

『はい、去年八月の判決公判では自分には刑事的責任能力がないなどの発言を繰り返し判決が延期されていた高津被告ですが、今日の法廷では厳しい表情で入廷し、裁判長を前に身動きすることもなく判決を聞いていました』

「責任能力か。仕方ない罪なんてあるはずがないのに」

俺はそのままテレビのもとへ近づき考え事をしながらしばらく突っ立っていた。

『高津麗被告は五年前の八月、神奈川県横浜市で当時中学二年生の少女を誘拐し自宅で監禁、殺害するなどし

た罪に問われています。それに対し小川裁判長は犯行に計画性があり責任能力を有していたと指摘した一方、弁護人が提出したコラ鑑定などの新たな証拠から高津被告は殺害にまでは及んでいないとして検察側が求めた懲役十五年に対し懲役六年の判決を言い渡しました』

「六年はさすがに短いだろ。手を加えてなくても殺したようなもんじゃん。拉致監禁だけでも罪は重いのに。真実って追及しても人は生き返らないんだよな」

『またこの裁判をうけ警察は高津被告と当時交友関係のあった島尾本しまおもと成なり容よう疑ぎ者しやを……』

「そういえば電気つけて無かったな」

俺は入口の方まで戻ってスイッチを押し部屋全体に白い灯りをともすと、ふと足元に一枚の茶封筒が置かれていたことに気がついた。

「なんだ？」

不思議に思っ拾い上げて見てみると、見覚えのないその封筒には黒い靴の痕と数本のしわがくつきりとついていた。

「あ、踏んじやってたか」

そのまま部屋のベッドまで歩き腰を下ろした。宛名も部屋番号も書かれていないその茶色い薄い封筒の中にはどうやら手紙のようなものが入っているようで、しっかりと糊付けがされている。

「ラブレターか？」

中の手紙を傷つけないように封筒の底を数回ベッドにたたきつけて、爪を立てて封を手で破り開いた。中には簡単なメモ用紙が一枚だけ入っていた。

山田くん

俺は石橋が怪しいと思っている。次の犠牲者が出る前に石橋を殺さないか？

塚田竜勇孫

「塚田って、あの塚田さんか」

達筆な文字で署名までしつかりとしてあったが、この船に乗ってからどうしても理解の追いつかないことばかりが次々と起こる。俺も確かに石橋さんは怪しいと思っていたけれど、これでは本当に犯人が誰だか分からなくなってきた。誰かに脅されて書いたのかな。塚田さんは本当は良い人なのだろうか、それとも塚田さんと石橋さんによる共犯なのだろうか。こんな手紙、試されてるとしか思えないが俺に送る意図は何なのだろう。それより本当に送り主は塚田さんなのだろうか。せめてここだけでもクリアになれば真相に一步近づくのではないか。確かにさっき塚田さんはレストランにはいなかったから俺の部屋に封筒を投げ入れる時間は十

分にあったと思うが、今までの塚田さんという人物像からそんな行動をとっているとは思えなかった。

「内線をかけるか……」

どうやって他の人に知られず確認をとるか、そんなことを考えていたらつい思考が口に出てしまっていた。おもむろに自分のカバンから手帳を取り出し、自由欄に自分で纏めた乗客情報から塚田さんの部屋番号を確認しようとした。

「しまったな。塚田さん、一階にいらとしか言っていなかったな」

しかし同時にあることにも気づいた。

「あれ、一階に泊まっているのって塚田さんだけか」

四階には藍果、三階には綾奈と虹嘉と菜帆が泊っていて、二階には石橋さんと菜那子。これだけ分かれば十分であった。

「一階の部屋に片っ端から内線をかければいいのか。とりあえず石橋さんにさえかなければ良い」
そう思つて内線を一〇〇番から順番にかけた。そして一〇四番にかけた時、見事電話が繋がった。

「も、もしもし、あの、つ、塚田さんですか？」

弱弱しい声がバレないように声をはって話しかけた。

「なんだ騒々しいな。あれ、その声は山田くんだね」

落ち着いたその声を聴いた瞬間自分の過ちを痛感した。女性の声だった。

「え、えっと」

「内線するならまずは部屋番号を確認しなよ」

小林さんだった。

「すみません」

「塚田さんだったら確か私の前の部屋だから一〇九号室か一〇一〇号室とかだった気がするけど、何の用なんだ？」

「い、いや」

第一声目に『塚田』と名前を出したことが間違いだった。塚田さんに内線をかけると言う行動から俺は小林さんにきつと怪しまれていることだろう。

「おいおいおい情報提供したのにそれはないでしょ。で、あなたとは見た目も性格も正反対の塚田に何の用なんです？」

「弱ったな。小林さん、ぶっちゃけあなたは犯人サイドですか。探偵サイドですか」

無駄な質問をしてどうにか話をそらそうと試みるが、彼女には通用しなさそうである。

「そうだなあ、どっちも。なんちゃって。その質問に大した意味はないのだろう？ やすやすと犯人サイドって答える馬鹿は犯人なんかやってないさ」

「そ、そうか。そりやそうだよな。まあ俺は探偵サイドってわけなんだけど、ちょっと事情聴取をしようと思っただけ」

「ふーん、でもなぜピンポイントで塚田なんです？ もっと話を聞くべき人は多いだろうに」

「それはまあ、お、俺の読みが当たった時に話しますよ」

「気に入らないなあ。ま、頑張っただけ」

小林さんとの電話が切れてすぐ俺は一〇九番に内線をかけた。今度こそ失敗はできないと思うと変な汗が手に滲んでくる。

「もしもし」

「もしもし」

間違いないこの声は塚田さんの声だ。しかしこれ以上ドジは踏めないと思った俺は塚田と名前を出すかどうか迷い、続く言葉に躓いた。

「はい、あのー、もしもし……」

「もしもし？」

「あ、あの」

「山田くんだな、まさか電話してくるとは思わなかったけど、ビビってるのかい？」

「えっと、それじゃあ本当に」

「ああ、あの手紙は俺が書いたよ」

俺から話を出さなくても手紙のことを認識している。どうやらあの手紙を書いたのは本当に塚田さんらしい。

「あの、今、そこには」

「安心しろ、俺以外誰もいないさ。それで、用件は何だい？……って聞くのはちよつと意地悪だったかな」

「えっと、あの手紙ってどういう意味で……？」

「書いてある通りだよ」

「といっても俺が手を加える。お前は分かりやすく尾行をして石橋の注意を引けがいい」

「……そんなこと、俺にやれって言うんですか」

「まあ殺すというのはちよつと表現が過激的過ぎたかな。社会的に殺すって風にでも捉えてくれよ。綸奈ちゃ

んとか言ったな、あの人が女の子を監禁したのと同じように彼の動きを止めようってことさ。ま、目障りだから死んでもらいたいというのが本音だがな」

「あの、正直自信がないというか、なんというか」

「協力しないなら君を殺すぞ？ ……と言ったらどうする？」

最悪な展開になってしまった。

「わ、分かりました」

気の弱さというのが俺の弱点なのかもしれないが、今は塚田さんに従わなければ次に死ぬのが自分のような気がして怖かった。とりあえず協力しているふりをしてまずは塚田さんと石橋さんのアリバイや証拠を押さえる。それが正であつても悪であつても、片っ端から一人ずつ善悪を判断することが解決への近道なのかもしれないと感じた。

「じゃあ十分後だ」

そんなに早く実行すると思っていなかったので俺は反射的に口が開いた。

「十分後ですか？」

「なんだ、都合が悪いのか」

「い、いえ。そういうわけじゃないですけど」

「じゃあ準備をして外に出るんだな。多分今彼はまだ甲板にいるから」

そう言われて一方的に電話が切られてしまった。非常にまずいことに巻き込まれてしまった。しかし、これで殺人がやめばと思うと深く考えもせず体が自然に動いていた。とりあえず自分のスーツケースの中に手紙を放り投げ鍵をかけ、気がついたころには手ぶらで階段を駆け下りていた。レストランを通り抜けて甲板を覗くと石橋さんは椅子に座って紙に何かを書き残しているようであった。忍び足で甲板に足を差し入れたその時、石橋さんはいか気配を感じ取ったのか後ろを振り返った。俺と目が合った石橋さんは慌てて手にしていたペンを胸ポケットにしまい、紙を隠すように丸めて俺を睨みながら退席を試みていた。塚田さんの言う通り、本当に石橋さんが犯人なのだろうか。今見た様子だと石橋さんは限りなく怪しいとしか言いようのない態度である。無意識のうちに眉をひそめてしまったこと、思考が少し読まれてしまった。彼は俺のもとに近づいてきて、静かな声でこう告げた。

「君は今何を考えているんだい。ひょっとして『石橋が犯人なのだろうか』なーんて考えちゃいないだろうね」

「今、隠したものは何だったんです。手紙か何かですか」

俺も冷静を装って応戦した。隠し事、手紙、と聞くと勝手に塚田さんの手紙を連想してしまう自分がいる。そもそもあの手紙は俺だけに配られたものだったのだろうか。それとも全員に配られたものだったのだろうか。藍果や菜那子に話をしてから来ればよかったと今更ながら少し後悔している。もしあの手紙を石橋さんが探偵サイドとして書いていたとすればどうだ、或いは石橋さんと塚田さんが連携して書いたとすればどうだろう。石橋さんは真犯人を炙り出すためにこんなことをしているのだろうか。そうだとしたら俺はまんまと引っ掛かってしまったことになる。こんなところのこのこと出てしまった俺は今、自分が犯人だと言っているようなものではないのか。もし石橋さんが探偵サイドの人間だった場合、今俺はもつとも阿呆なことをしている。

「そりや誰にだって秘密はある。せやからそう俺のプライベートまで盗み見るようなことをされちゃええ気分はしないねえ。探偵ごっこをすんのは構わへんけども、人の気持ちというものをもう少し考えてほしいもんな。兄ちゃん、俺のこと殺そうやなんて思っへんよ。君が何を想像したかは知らんけど、もし俺が犯人なら繊細な作業はきつと俺の部屋でするやろうな。早とちんなよ」

冷たい声で確かに圧力をかけられた。

「い、いえ、俺はただちよつと外の空気を吸いたくなっただけで」

無理のある言い訳しか頭の中に浮かばなかったが、それをまた石橋さんも見抜いていた。

「兄ちゃん、嘘をつくくんやったらもつと上手くつかない。今までの接し方とだいぶ雰囲気がちやうこと^違にちゃんと君は気づいてるかな？」

やはり人は隠し事をするコミュニケーションが下手になる。

「石橋さんですよ。あんなに焦っている石橋さんというのは初めて見ました」

日頃弱気の俺が今、初めて言葉で牽制球のキャッチボールをしたかもしれない。

「安心せえ^{しろ}、俺も兄ちゃんと同じ探偵や。それでもって今少しづつ確かな情報を手に入れて間もなく犯人を突き止められそうやねん。ま、それを書き留めてただけやから。でもそれはまだ見られるわけにはいかへんねん。君も君なりに考えてることがあるんやったら、いつか答え合わせをしようや。二人とも生きていたらの話やけどな」

そう言つて石橋さんはレストランの方に去っていった。石橋さんが見えなくなるまで彼を目で追い、少し間をあけて恐る恐るレストランの方へ向かった。ふと菜那子と藍果との約束を思い出し、考え事をしながら自室に戻ろうとしたその時、俺の鼻が煙草のにおいを感知した。振り返ると通り過ぎた喫煙室の扉が開いていて、つくり笑顔に満ちた女性が腕を組みながら壁にもたれかかって立っていた。



第四話 探偵の素質

「ご精が出ますね。もう用事はおしまいですか」

十数分前に聞いた声であった。

「小林さん、いつの間に。また喫煙室ですか」

「いつ吸っても構わないでしょう？ 考え事をする時、私は脳に栄養を補給するタイプなので」

「なら考え事は身体に毒ですよ。そんなんじや長生きできませんよ」

「我慢する方が私にとっては毒なので。どうぞ中へ……吸います？」

そう言つて彼女はダブルピースとかかれた煙草のケースをくるくると手の上で転がした。

「俺は結構です。それより何か見てたんですか」

「何も見てませんが。何か見られちゃいけないことでもしていたんですか」

「いえ、そういうわけじゃないですけど」

「塚田さんに電話は繋がったんですか」

「ええ、おかげさまで」

小林さんの大人びた口調と冷静な態度を前にとすると、緊張からかなげか背伸びをしたような話し方になってしまふ。

「で、次は？」

「次というのは？」

「塚田さんと話して、石橋さんと話して、探偵ごっこはもう辞めちゃうんですか？」

「やっぱり見ていたんですね」

「あ、バレました？　それで実際どうなんですか」

「一回自室で情報を整理しようかなとは思ってますけど」

「あれ女の子と密会するんじゃないかって？」

「何でそれを知っ……」

「あら、そうなんだ」

そう声を重ねられて自分の過ちに気がついた。

「女の子と仲良さそうに話していたのをさっき見かけたのでカマをかけただけだったんだけど、まさか本当にそんなことするとは」

「いやいやいやいや、別にそんな。初対面だしそこまで怪しいこととかしないし」

「そりやそうでしょ。してたらさすがに血の気が引きます」

「俺はただこの殺人事件を止めたくて。このままだったら絶対次の犠牲者が出てると思うてゐるんです」

「山田くん、君はちよっと人を信用しすぎているんじゃないかい」

「それは、どういう」

「そもそもこれから会うって言ってたけど、その子は本当に信用できるのです？ 犯人じゃないっていう確証は得ているのかどうかっていう話です」

「いや、確証はないけれど。でも、藍果と菜那子はそんな……」

「へえ。藍果さんと菜那子さんに会うんだ」

小林さんに会話の主導権を握られて俺は余計なことばかり口走っていた。

「そういうところですよ。私が犯人だったら次はあなたたち三人の部屋を爆発させます。お口は軽いし、簡単に人を信じすぎているんですよ」

「きつと山田くんは探偵側の人間だと思っではいるけど、そんなんじゃないやすぐに犯人に殺されますよ」

「確かに注意不足で口が軽いのは致命的だったけれど、それでも俺はみんなを信用したいんです」

「なぜそこまでして？ 一人で動いた方が確実なのに。それは探偵サイドでも犯人サイドでもですけど」

「これは俺の勝手な考え方だけど、俺は多くの人に幸せになってほしいと思ってるんです。その幸せって言うのは決して大きいものじゃなくて良くて、例えば子供の笑顔を見れることだったり、欲しかった物を恋人から貰った時の喜びだったり、友人と外食に行く楽しさだったり。そんな経験を通して人は幸せになれるし優しくなれる。心に余裕を持てるようになる。そしてその蓄積がコミュニケーションに現れる。人と人との間に生まれる共感や信頼を通して、その幸せや人生のちよつとした豊かさを伝播させていきたいと思ってるんです。俺は俺の人生を生きて、小林さんも小林さんなりの人生を生きてきた。だから偏に日本人だからといっても分かりあうことが難しいのも知ってます。けれど俺は多くの人の生きてきた証を知りたいし、そんな過去を一つ一つ受け入れていきたいと思っています。だから信用したいんです」

「だから塚田さんや石橋さんに会って話してたのかい」

「いや、そういうわけじゃないけど」

「山田くんのその考えは素敵だと思うよ。ただ今は命がかかっているんだ。その口の軽さは何とか直した方がいいだろうな。死んだら幸せも糞もない。死こそが生という呪縛からの解放であって幸せな出来事なのかもしれないけれど、君が今まで幸せを伝播させてきた知り合い全員が不幸になる」

「そ、そうですね。それは気を付けます。一つ余計なことを聞くかもしれないですけど」

「余計なことって分かっていて聞くんですね」

小林さんは顎を引いて薄い目をした。

「え、ええ。別に答えなくても構わないです。小林さんはいつから人を信用しなくなっただんですか」

「あら、私が人を信用していないように見えるんですか」

「じゃあ質問を変えます。小林さんはいつから不幸だったんですか。いつから……自分だけを信じるようになってたんですか」

「質問は一つじゃなかったんですね」

「ダメですか」

「いえ、ただ自分だけを信じることはそんなに不幸なことなのかなと、そう思っただけです」

「人という漢字は人と人が支え合って生きていくってよく言うじゃないですか」

「それはゴシック体の話です。教科書体では人という漢字は良く見ると片方がもたれかかって楽をしています」

「皮肉ですね」

「私は、世界は実力が全てだと思ってます。それはいつの時代においてもです。実力が全てになるから競争が生まれるんです。だから犯罪もこうして起きる。私は自分以外を信じて自分が損をするのが嫌なんです。誰にも責任をぶつけられなくなるから」

彼女は大きく震えた息を一回吐きだして話を続けた。

「生き物はみんな利己主義なんです。だから自分が第一、知り合が第二なんです。知りもしない人のことなんかはどうでもいいんです。民主主義も実力を前にして平等なんかじゃないんです。信頼とか助け合いとか、そんなぬるい平等を訴えるのは全部エゴなんです」

小林さんは主張のための敬語を会話の中で選択してきた。

「でも人間が社会的立場についての一切の知識を失ったら平等を求めるんじゃないんですか？」

「それは最低限のルールを作る時の話です。平等の基盤を手に入れた人間は結局自分の利益を望みます。だから愛する人が増えれば増えるほど守りきれなくなるんです。たくさんの愛する人を持つと沢山の犠牲をだす。富豪は貧しい人が居なければ裕福にかななれないんです。これが愛をする者の罪です。私はあと二十年くらい生きて、誰にも迷惑をかけずに死ねればそれでいいですよ」

「俺は、信じれる人を見つけられずに死んでいくことは不幸なことだと思ってます。小林さんは賢い。でも馬

鹿だ。馬鹿すぎる。信用できる人を一人見つけるだけで小林さんが望む残りの二十年の色は正反対の色に変わるのに」

「私は信じられる人の見つけ方を知りません」

「『信じられる人』というのは信じてから見分けるんです。信じてみなければ信じられる人は一生現れません」

「小林家は人を信じた結果崩壊したんです」

涙を隠して訴えるような彼女の眼差しに、俺は言葉を失ってしまった。

「ずっと隠してきた愛人が父親にはいたんです。今思い返せば母親はそのことを知っていたと思います。母は父のことを信じ続けてきたけれど、裏切られることの連続で心がもたなくなりました。ある日の土曜日、家族三人で海浜公園に行きました。楽しみにしていたピクニックです。海を前にレジャーシートを敷いてお弁当の蓋を開け、崩れてしまったおかずをプラスチックの箸で突っついていた時、当時小学生だった私は未だ何も理解していませんでしたが、公園で父の浮気相手に遭遇しました。翌日日曜日、両親は離婚していました。白いハットを被っていたその女性は両親よりも一回り年下で、この人が新しいお母さんになると言われた時はママが更に一人増えるのでしょうか思っています。一週間後にパパかママのどつちかがいなくなるならどつちが

良いかつて聞かされて、私は当時担任をしていた男性教師に相談をしました。聞いた人が間違っていたのかもしれない。その担任は、定職に就いている父親についていく方が未来の私のことを考えると幸せだと言って、愚かにも私は不甲斐無い決断をしました。私はそれ以来一回も産みの母には会っていません。月に一回会えるという言葉も信じてはいけなかった。新しい家で父は今の母との子をつくり、私は前の家の子だと遠ざけられて生きてきました。とても非情な仕打ちでしたが、それは全て判断を他人に任せた自分の無責任さが生んだ結果で、私は独りでそれを受け入れるしかなかったんです。だから人間が気持ち悪いんです」

彼女の話を聞き終わって今やっと、小林さんに対して押し付けるように自分の考えを語ってきたことを罪深く思った。俺の心がお花畑だったとすると、彼女の心は焼野原だ。焼野原に一本の花を植えても焼野原である。と、彼女は最初から訴えていたのだろう。

「ありがとう、話してくれて」

でも、今確かに彼女は人を信じ始めた、そんな気がした。

「ごめんなさい、忘れて」

「ああ、忘れるよ」

「ありがとう。ごめんなさい、取り乱して。……それで、犯人が分かったらどうするつもりなんですか？」

「えっ？」

「どこか陸に辿り着くまでに殺人事件の犯人が分かったらどうするつもりなんです？ 山田くんのことだから殺しはしないんでしょう？」

彼女の選ぶ言葉が一瞬、親しみのこもった敬語に変わっていたことを俺は見逃さなかった。

「えっと、説得……とかかな」

「犯人が逆上したら？ 乗客全員が犯人だったらどうするんですか。人殺しの目的が最終的にあなたを殺すためかもしれない。山田くんの命は一個しかないんだから、首を突っ込みすぎると危ないですよ。これだけは言わせてください。簡単に説得されるような犯人は最初から事件なんて起こしません」

「あ、ありがとう。でもなんで？ 小林さんこそ、俺が犯人かもしれないのに」

「あなたの考えに感化されたと言えば、喜んでくれます？」

「本望です」

「まあ、こうやって話したら私は犯人には見えてこないでしょう？」

今までの少し重たい空気を軽く吹き飛ばすように小林さんはわざと声のトーンを変えた。

「ますます分からなくなりますね」

「山田くんは分かりやすい。私が話しかけた本当の目的は君のことをもっと知りたかったから、だったんですけどね」

「小林さんは探偵であつてほしいですよ。切実に」

「君が犯人だったらきつと殺されちゃうから、うんとは言えないな」

「最後まで小林さんらしいですね」

「誉め言葉として受け取っておくね。呼び止めてごめんなさい、ではそろそろ」

そう言つて体感時間の長い彼女との会話が終了した。小林さんはそのまま喫煙室に残ったが煙草を手にはしていなかった。俺は大きく息をついて客室の方に向かって歩き出したが、遠くの方から塚田さんが歩いてくるのが見えた。彼はそのまま甲板の方に向かい何事もなかったかのように俺とすれ違ったのだが、一度も目を合わず会話すら発生しなかった。そんな様子を見ているとさつき俺が電話をした相手というのが本当に塚田さんだったのかすら疑問に思えてきた。ミステリー小説ではこういう時に限って『犯人実は双子だった説』というオチに行きついたりする。現実的に考えるとなかなかありえないことではあるが、百パーセントありえないとは言いいきれないあたり、俺みたいな素人探偵に本物の現場は過酷である。そもそも家族ぐるみで犯罪などできるのだろうかと自分の家族のことを思い返した。俺の父は何年も前に他界してしまつたが家族四人とても仲の

良い家庭だった。父親は心清く正しい人で、自分で言うのも気恥ずかしいのだがその血を継いだのが俺と二歳下の弟の豪^{たけし}だった。豪は数年前に婿入りをして今では苗字も変わり、もう山田家にはいない。父と死別してしまった母親を一人にできないと俺は今母親と二人で暮らしている。正義感の強い山田家ではどう頑張っても家族ぐるみで殺人というものは想像がつかない。むしろ自分の身近で何か事件が起きたら解決のために積極的に関わっていつてしまう、そんな家族だと思う。一方、塚田さんは山田家とは正反対で面倒なことには関わりたくない主義の家庭で育ったんだろ^うなという印象がある。印象だけで物事を決めつけてしまうことはよくないが、そんなイメージの塚田さんが俺に手紙までよこしたのはやはり引か^かかってしまう。俺が塚田さんの部屋に電話を掛けた時、声質と手紙の内容を知っていたという二つの理由から電話相手は塚田さんだと考えたが本当は違ったの^らうか。現代では人の声を機械で再生する技術がある。電話越しで名前を聞いても無駄にはなるが、もっと何か電話相手が塚田さん本人である証拠を掴んでい^いればよかった。今も彼を呼び止めて確認すればよかったが、運悪く塚田さんは喫煙室に入^いって行^いってしまった。後々筆跡でも確認するか。喫煙室にはまだ小林さんがいて正直気が^きでない。小林さんと塚田さんはグルなの^らうか。探偵サイドなの^らうか、犯人サイドなの^らうか。しかし三十八歳の塚田さんと二十五歳の小林さん、この二人には何も接点が見当たらない。喫煙室では煙草を通じて他人同士でも仲良くなる^ことがあると聞いた^ことがあるが小林さんと塚田さん

はどこまで結びついているのだろう。いや、現時点で結びついていないとしても彼女のことだからきつと、塚田さんが喫煙室に入った瞬間彼にも何かカマをかけるだろう。彼のことを知るために。心配しても何も変わらないし今から喫煙室に戻っても逆に怪しまれてしまいそうである。もし塚田さんが犯人だった場合少々面倒なことになってしまうが、今は動揺せずにここを立ち去ることがベストだと考え、再び部屋に向かって歩き出した。階段を上っているとドンドンドンとリズムカルに階段を駆け下りる音が聞こえたので少し警戒し身構えた。

「わああああ あ、なんだ、だっしゅ君だっけ」

「茉帆か。よく俺のあだ名なんか覚えてたな」

「え、まほ頭良いから」

いかにも頭が悪そうな返事である。

「あ、で、そんな急いで何かあったのか」

「あ、丁度よかった。死にかかわる問題なの！」

そう言われて俺はまた身構えた。

「次は誰が！ 誰が殺されたんだ」

「え？ 殺された？ んーしいて言うならまほ？」

真剣な俺の質問はどこかで空回りをした。

「は？」

「え？」

「茉帆、お前こんなタイミングで冗談はよしてくれよ」

「冗談じゃないよ、まほにとっては死活問題だよ！」

必死に訴えてくる茉帆の考えていることがサッパリ分からなかった。

「どういうこと？」

「だから、にじちゃんが死んじやって、いとつちが監禁されて、まほピンチなの。今日の夜ご飯抜きとか言われたらまほ生きていけないよ」

そう言われてやっとすべてを理解した。確かに目の前の事件に夢中になってシェフ代行のことをすっかり忘れていた。そうはいつても、綸奈のことが見せしめのようにになっている今、きっと誰もシェフ代行なんてやらな
いだろう。俺たちの会話の声が響いたのかまた上から階段を下りてくる足音が聞こえた。今度は二人分の足音
だった。

「あ、いた。ちよつと山田さん何してたんです？」

菜那子と藍果だった。どうやらずっと姿を現さない俺を心配して探しに来てくれたようだ。

「ごめんごめん、ちよつといろいろあつて」

すると莱帆がすかさず菜那子と藍果に向かって語り始めた。

「菜那子さん、藍果さん、死にかかわる問題なんです！」

菜那子も藍果も俺と同じような反応を見せデジャブをしばらく味わった後、俺たちは四人で話し合うことにした。

「どうしようか」

「そうねえ」

「とりあえずみんな呼び出す？」

「でもまた集会を開いたところで話は決まらない気も」

「でも俺思うんだけど、みんなで決めることに意味があるんじゃないかって」

「だつしゅ君、もうちよつとまほにも分かるように言つてよ」

「うーんと、つまりシェフ代行が動けなくなった今、最初にみんなで決めたことを貫き通せなくなったわけじ

やん。だから各自で作るにせよ、また誰かを代行人として選出するにしても、みんなで決めないと後後になつて揉め事が起こると思うんだ」

「なるほど。確かにまほの知らないところで勝手に話が決まったら嫌かも」

「そしたらまた私アナウンスいれようか？ みんな集まってるって」

「菜那子お願いできる？」

「うん、いいよ」

「アナウンス、客室にも聞こえるけど綿奈のこととか配慮しないでいいかな」

「そうだな。そしたらさつき塚田さんと小林さんが喫煙室にいるのを見たから、あとはここにいない石橋さんだけ指名して呼び出すか」

「それがいいね」

人が死んだとはいえ疑心暗鬼にならない点が旧友の特徴だろうか。藍果と菜那子はこうした状況でも仲良さそうに話している。

「ねえねえナナコ、アナウンスってどうやってるの？」

「ん？ 簡単だよ。マイクの電源入れて話すだけだよ」

「あ、そんなシンプルなんだ。もっと難しいと思ってた」

「藍果やってみる？」

「え、やってみたい！」

「いいよ！」

そんな会話を横目に俺は喫煙室に行くことにした。

「じゃあアナウンスの方は頼んだ。茉帆、一緒に小林さんと塚田さんを迎えに行こう」

「え、まほも行くの？」

「うん、いいでしょ」

「しかたないわね、この偉大なるまほ様が付き合ってあげるわ」

そうして石橋さんと繪奈以外のメンバーが甲板に集まった。

「もう七分も経つけど石橋さん来ないね」

菜那子がそう言い放ったことをきっかけに皆が次々と口を開き始めた。

「まさか、あのおじさんも死んだなんてことないよね」

意外にもそういう始めたのは塚田さんだった。小林さんに仕組まれたのか、何を思ってそんなことを言ったの

かは分からないけれど、もし石橋さんが本当に死んでいたとして一番怪しいのは塚田さんだと思っている。俺の部屋に戻れば塚田さんが殺害予告を記した証拠となる手紙があるが、それを皆の前に見せるかどうかとても悩んでいた。俺が犯人になってしまう可能性があるからだ。こんな状況で俺は殺していないと言って誰が信じしてくれるだろうか。一人そんなことを考えていると全員が俺の方を向いていることが分かった。

「ねえ聞いている？」

小林さんだった。

「えっ？」

「え？　じゃなくて、さっき何してたのって聞いているの。石橋さんと一緒にいたよね。しきりに彼の様子をうかがっているみたいだったけど」

はめられてしまった。

「いや、違うんだ。俺じゃない」

「俺じゃないってどういうこと？」

「俺は、その石橋さんを殺したりしていない」

「まだ死んだとも決まっていらないのに、どうして殺されたって分かるの？」

小林さんの尋問は続く。

「それは、言葉の綾っていうか。これだけ殺人が続いていて姿を現していないってなると殺されたと考えるのが自然じゃない。それに……」

この際このまま俺だけが疑われるくらいなら自分の持っている情報のすべてを打ち明けようと思った。

「それに？」

「それに、俺は犯人を知っている」

小林さんと塚田さん以外は凄く驚いた顔をしていた。

「くだらない」

吐き捨てた小林さんの言葉を遮るように茉帆が食い気味で話してきた。

「もう言い逃れは出来ないんじゃないの」

「しょ、証拠があるんだ」

「証拠？」

「犯人を特定する手がかりだよ」

そう言って手紙の話を口にしようとした瞬間、すかさず塚田さんが挙手をした。

「それ、俺も知ってるぜ。これのことだろう」

そう言つて塚田さんは彼の横にいた藍果と茉帆にその紙を見せていたが、二人は驚いた表情というよりは不思議そうな顔をしていた。

「これということ？ 落書きじゃん」

茉帆のその一言に救われたと思つたのも束の間、塚田さんが見せていた紙はあの手紙なんかではなく全然違う内容が記されたメモ書きだった。

『三つの勾玉 六つの星 一つの丹 これに共通するものが今回の事件の犯人だ』

暗号か何かだろうか。綺麗な文字で書かれたその紙にうつすら血のような痕が付着していたのが見えた。

「ダイイングメッセージ？」

なんとか俺から話題がそれたものの、俺の知らない新しい展開に少し動揺した。ふと顔をあげると顔をしかめた小林さんがいた。

「なるほど」

そう呟いた小林さんは

「ちよつと一本」

とだけ言い残し喫煙室に向かった。俺はてつきり塚田さんと小林さんはグルだとばかり思っていたが、今の反応を見るかぎりどうやらそうでもないのかもしれない。小林さんにとつてもあのダイイングメッセージのようなものは初見だったのだろう。そもそもあのメッセージは誰が書いたものなのだろうか。塚田さんなのだろうか。俺は少しばかり推理し終えて帰ってくる小林さんに期待をしていた。彼女が甲板を後にして数分後大きな爆発音が船内に響くとは思ってもいなかったからだ。

「何、今の音？」

「おい、あれ！」

「え、まってなんか黒い煙があがってるんだけど。まってまってまって、まほ無理まほ無理まほ無理」

小林さんが向かった先だった。喫煙室だろうか。俺はいてもたってもいられなくなって喫煙室めがけて走って行った。

「小林さん！……小林さん！」

駆けつけた時には既に、喫煙室のガラスは粉々に割れていて灰は海へと流れ出ていつていた。近くにあった消

火器を一気に使い切りなんとか船本体の爆発と沈没を避けることはできたが小林さんの姿はどこにもない。

「これって……」

俺は真つ白になった喫煙室の床から飴玉の袋を拾い上げた。煤の粒子が焦げ臭いにおいを発していて、黒く汚れた飴玉の袋をはたとスノーという文字が顔を出した。

「まさかな」

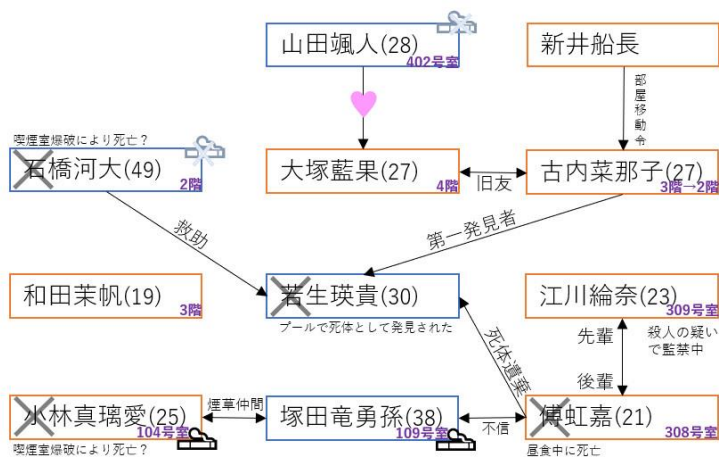
俺の目にはなぜか涙がこぼれていた。

「そんな終わり方はないだろ……」

若生さんが死んでいた時も虹嘉が死んでしまった時にも味わわなかった不思議な悲しみに浸っていた。それでも船はゆっくりと進み続ける。深い緑色の服に包まった小林さんは海の底深くまで沈み、海底の毬藻の一つとなって生涯を終えた。

「教科書体か。人は人を信じれなきや背中なんて預けないんだよな」

俺は船のふちに両手をかけて、涙であふれた目を瞑りながら哀悼の意を表し黙祷を捧げた。この涙が自分の人生においてエンターテイメント的要素を持った消費物であることには、いつまでたつても気づけないのである。



Kobayashi

第五話 袁彦道

若生さん、虹嘉に続いて石橋さんと小林さんがいなくなってしまった。さらに遡るとどこかのタイミングで船員や船長すらも消えてしまっている。犯人はいつたい誰なのだろうか。そして犯人の狙いは何なのだろうか。ただの無差別殺人事件なのだろうか。虹嘉の時とは違って今回は犯人を絞ることができるかもしれない。石橋さんが確実に生きていたのは甲板で出会った時。この目で見たら確実に石橋さんで間違いない。以降間もなくして石橋さんはいなくなってしまった。そのあと小林さんと塚田さんに会い俺は階段を上がったが、その時に階段を駆け下りてきたのが茉帆と藍果と菜那子。もし石橋さんが例えば今もなお客室に監禁されているとするのなら茉帆か藍果か菜那子のいずれかはおそらく犯人になる。しかし俺でもきついと思うあの階段を男性の死体をもって上ることは厳しいだろうし、そもそも女性だけであの石橋さんを監禁したり殺害したりすることは不可能なのではないだろうか。そうなるとやはり可能性としては客室より奥で塚田さんが手を加えたとか考えられない。小林さんのケースはどうだろうか。小林さんの殺害方法は間違いなく爆破。おそらく小林さんが一服しようとライターに火を点けた瞬間、犯人が予め充満させておいた☑ガスが気化したガソリンが何かに引火して爆発させたのだろう。全員集まるように呼びかけをした際、喫煙室にいたのは小林さんと塚

田さんであった。しかしあそこには二人を呼び出すために俺も足を踏み入れたが変なおいはしなかった。そもそも塚田さんは手ぶらで喫煙室に入っていたため彼に殺人は厳しいかもしれない。そう考えると犯人がいなくなってしまう。俺たち全員が甲板に集合してから席を外したものはいなかった。つまり小林さんを殺害した犯人は綿奈、ただ一人となる。虹嘉を毒殺し、全員が集合している間に喫煙室に発火する何かを仕組むことができれば二人を確実に殺害することが可能である。申し訳ないが虹嘉が死んだ時に見せた綿奈のあの取り乱した姿は演技であったとしかいいきれない。もちろん石橋さんが死んでいることが前提にはなる。

「みんな、提案があるんだ」

そこに残った藍果、茉帆、菜那子、塚田さんに俺は話しかけた。

「今からここにいる全員の部屋を五人で見に行かないか」

「それはどういう？」

藍果が尋ねた。

「今こうして人がさらに二人死んだが、その時はみんな甲板にいて誰一人と外には出ていない。だから部屋に戻って何かを隠したりする時間は一切無かったことになる。無駄足にはなるかもしれないけど何か手掛かりは見つかるかもしれない。これ以上人数が減る前に一部屋一部屋見に行くっていうのはどうだろう」

「そっか、部屋の鍵は本人しか開けられないからそこで何かが出てきたら動かぬ証拠になるってことか」

「まあそういうことだな」

俺はまず女の子の部屋に石橋さんの遺体が隠されていないかを確認したい。

「じゃあ四階から順番に、全員で確認していてもいいですか。もちろん俺の部屋も開けますので」

この状況で提案を断ると間違ひなく犯人だと思われるからだろうか、拒否をする人は誰もいなかった。

「じゃあまずは藍果の部屋から」

「え、私の部屋から？」

「都合が悪いんですか？」

「いや、別にそうじゃないけど。とういかさつきから自分のペースですずっと仕切ってるけど、山田くんも容疑者の一人ってことを忘れないでよね」

「あ、ごめん」

四〇五号室の部屋の前に到着し藍果がカードリーダーに鍵を差し込んだ。扉のノブについていた機械の豆ランプの色がピツという音とともに赤色から緑色に変わり扉が解錠された。藍果から茉帆、俺、菜那子、塚田さんの順番で部屋に入り彼女の部屋を物色した。彼女の部屋は俺の部屋とほぼ同じつくりになっていて、入ってすぐ

のところに大きなクローゼットがあり、開くと冷蔵庫と金庫が一つずつ。ガウンが二着にスリッパが二つ。風呂場にはシャンプーボトルが三つに大きさはばらの白いタオルが四つ。未使用ではあるが歯ブラシや櫛や綿棒などのアメニティ用品がきれいに並べてある。もちろんシャンプーボトルからはシャンプーやコンディショナーしか出ず怪しいものは隠されていなかった。奥に進むとベッドが一つあり、ベッドの下に何かを隠せるようなスペースはない。テレビを載せているラックもカラフルなパンフレットが数枚入っている程度で俺の部屋と大して代わり映えの無い部屋であった。

「藍果、スーツケースの中見ていいか？」

「えっ、ちよつとそれは」

驚いた様子の藍果だったが、その理由は何よりも単純なものであった。

「着替えとか入ってるし、それはなんていうか」

「そっか、そうだね。ごめんごめん。じゃあ莱帆、ちよつと藍果のスーツケースの中を見てもらえないかい」

「え、まほが？」

「うん。変なものとか見慣れないものとかが入っていないかを確認してほしい」

「わ、わかった。藍果さんいいですか？」

「ええまあ、それなら」

菜那子も遠目から一緒に中を確認したようだが、誰の表情にも目立った動きはなかった。

「なあんにも変なもんは入ってないよ」

茉帆のその一言で俺はこの部屋から自信をもって去れる決心がついた。

「次の部屋、行くかい」

あまり部屋を探索せず後ろの方で突っ立っていた塚田さんが額を掻きながら呟いた。

「次の部屋は山田さんの部屋ですね」

菜那子のその一声で全員の視線が俺に集まった。俺は犯人じゃないし誰も部屋には入れていない。自信を持って良いはずだがなぜか少し不安な気持ちになっている自分がいた。藍果の部屋の時と同じようにカードキーを差し込み、部屋の扉を開けた。部屋には俺から順に藍果、茉帆、菜那子、そして塚田さんの並びで入ったが藍果の部屋の時とは違って誰も物色をし始めなかった。きつとさっきは俺が率先して部屋を漁ったから物色しやすかったのだろう。

「えーっと、適当に部屋を漁ってもらって構わないんだけど」

そう言うのと塚田さんを除く三人がゆつくりとソファや家具に手をかけ始め、徐々にクローゼットや金庫を適当に漁り始めた。塚田さんは相変わらず入り口付近で面倒くさそうに突っ立っている。まるでことのすべてを知っているかのように、この事件に一切興味を示さなかった。俺はみんなの様子を見ながら三階に誰の部屋があったかを思い出そうと部屋の中の女の子たちをゆつくりと順番に目で追っていた。その時、部屋の隅に立てて置いてあるスーツケースが目に残ったのだが、思い出したくないことを思い出してしまった。あのスーツケースの中には石橋さんの殺人が予告された手紙が入っている。適当に漁って良いと言ったものの、あの手紙を見られてしまったのは立場がなくなってしまう。俺の心は今までにないくらいに焦って

「何もなかっただろう？ 次に行ってもいいかい？」

と慌て気味に聞いてしまった。しかし、その様子を怪しいと思った茉帆が

「ねーまって、まだこのトランク見てないよ」

と、そう言ってきたのだ。人生最大のピンチである。

「えっ、ちよつと待って」

俺は思わず声を出してしまったのだが、それをさらに不審に思った菜那子が

「何焦ってるの？」

と、かなり鋭く怖いトーンで追及してきた。正確には普通のトーンで質問してきただけなのだろうが、今の俺の心理状態をフィルターにするとそれは非常に鋭い質問に聞こえた。手紙はスーツケースの中に放り込むように入れたのでケースを開けた時にはおそらく一番初めに目に留まるだろう。

「い、いや、別に怪しいものがあるってわけじゃないんだけど」

「じゃー別にいいじゃん、まほ開けるね」

そう言つて茉帆は一步ずつスーツケースに近づいていき、俺には言い訳を考える時間すら与えられなかった。俺の心臓の鼓動はどんだんスピードを上げ、容赦ない茉帆の行動を前にして身体は少しずつ震え始めていた。

「もうダメだ、間に合わない」

心の中でそう思つた時、神様から一瞬のチャンスが与えられた。

「……あれ、これ鍵かかつてるじゃん」

そんなチャンスも束の間で、早く鍵を開けてよと茉帆から催促された。女性三人を目の前にして逃げ場がなくなった俺は投降するかのようにスーツケースに近づいたが、ふと解錠手前で今年一番の名案を思いついたのだ。つた。

「あー、ほら、あのさ、俺も下着とか入ってるし、なんていうか見られるのちよつと恥ずかしいんだけど」

「えー、まほ全然気にしないのに」

「いやいや俺が気にするんだよ。そ、そ、そうだ、塚田さん！」

形勢逆転の瞬間、俺の声はいつもの二倍高く明るくなっていた。

「ん？」

扉の入口から雑な返事が返ってきた。

「ほら、こういうのはどうだろう。女の子たちのスーツケースは女の子たちが見る。俺ら男のスーツケースの中は男がみる。これならプライバシーも守れるしある程度フェアでしょう？」

あの手紙は塚田さんが書いたものであった。手紙が見つかってしまうのことは塚田さんにとっても大きなデメリットになる。少々汚い手だとは思うが人を殺しているわけでもないので、一時しのぎのための嘘として神様に許してもらいたいものである。

「まあそれなら」

茉帆はそう言つてスーツケースから離れた。

「そういうことで、塚田さん、お願いです」

「だりいな。ま、しゃーねえか」

舌打ち混じりの返事までは想定通りであつたが、意外にもスタスタと歩いてきた。俺は鍵を開け女性陣には中身がみられないようにスーツケースを床で開いた。案の定、手紙と封筒が目立つ形で置かれてあり、塚田さんはしゃがみ込んで手紙に触れた。スーツケースから外には出さず中の内容を確認してスーツケースの中に乱雑に戻した。俺の読みは当たっていた。さすがに自分が殺人犯になる可能性があるような証拠を公開するわけがない。塚田さんは引き続きケースの中を漁っているが他に怪しいものは何も発見されなかった。最も、何も怪しいものは所持していないので当たり前ではある。

「山田くん、君も趣味が悪いな」

そう言いながら塚田さんはスーツケースを閉じた。さっきの下着の話にのつかつてきてくれたのだろう。俺はピンチの時に暗黙の了解で協力し助け合える漢の絆というものは全国どこにでもあるものだと思つていた。

「そうだろう？　こんなもの見られちゃったらドン引きされちゃいますよね」

と俺はアメリカンジョークのテンションでリアクションをとり笑顔で塚田さんの方に目を向けたのだが、彼は手紙を片手に持つて高々と掲げていた。

「えっと、これは、その、どういう？」

やはり俺には彼の行動の意味が理解できなかった。

「それ、何なんです？」

藍果がそう言つて近づいてきた。

「石橋河大殺人事件の犯行予告書ですよ」

「ど、どういふつもりですか、塚田さん」

「まほ信じらんない。どういふつもりつてだっしゅ君、それはこっちのセリフです」

「山田さん、この手紙は見てもいいのかな？」

俺は仕方なくはいと答えるしかなかったのだが、その返事を聞く前から菜那子は手紙をひろげ声に出して読み上げていた。

「『山田くん、俺は石橋が怪しいと思つてゐる。次の犠牲者が出る前に石橋を殺さないか？ 塚田竜勇孫』

……説明してくれる？」

「まづてくれ、それは違ふ」

「それは違ふつてことは、少なくともこの手紙のことは知つていたのね？」

菜那子の態度が今までと明らかに違ふことに誰もが気づいた。

「とりあえず君たちを監禁します」

このままだと俺は間違いなく独房入りになってしまう。

「待ってくれ。話を聞いてほしい」

「うるさい、まほこんなサイコパスみたいな人と一緒にいたくない」

「俺も混乱してるんだ、話だけでも聞いてくれたっていいじゃないか」

「でもその手紙を持つてゐることは、石橋のおっさんが殺されるかもしれないことを分かって何も動かなかったんでしょう？ おっさんが居なくなつた時もだっしゅ君は何も知らないっていう顔をしてたじゃない。

信じられるわけないでしょ」

「そ、そりやあのタイミングでこんな手紙なんか出したらみんなから犯人だと疑われると思つたから」

「そんなの私が犯人でもそうやって言い逃れするよ」

「じゃあ分かつた。船が目的地に着くまで俺はみんなの言うことに従う。目隠しされても手を縛られても服を剥がされても何されても良い。ただその交換条件としてまず話を聞いてほしい」

「分かつたわ。じゃあ山田くん、まずゆつくりとその着ている服を脱いでもらえるかな」

武器が出てくることを恐れたのだろう。もちろん持っているはずもないのだが、肌着一枚になつて地面に胡坐をかき菜那子の指示に従つた。

「この手紙は、虹嘉が死んだあと、俺が部屋に戻った時に、部屋の入口の地面に、置いてあったんだ」

俺はゆっくりゆっくりと話し始めた。

「きつと誰かが扉と床の間の数ミリの隙間から投げ入れたんだろうなって思ってる。封筒にはその紙一枚だけが入っていたんだ。理解ができなくて俺は塚田さんの部屋に電話を掛けた。これは後々内線のログかなんかを調べたらわかるさ。そうしたら書いてある内容通りだから死にたくなければ今すぐ動けって、そう言われたんだ。だから菜那子と藍果と会う約束をしていたけど行けなくなっちゃったんだ」

俺の話が一通り終わると、今度は皆塚田さんが犯人じゃないかと怯えだした。

「だったら相談してくれても良かったのに」

「ごめん。でも、誰が犯人か分からない中この手紙は決定的な証拠品で、もし紙に書いてある通り塚田さんが犯人だとしたらこの殺人事件を終わらせられると思ったんだ。だから塚田さんに協力すると見せかけて俺は甲板へ降りた。そこには石橋さんが座っていて何かを隠れてこそこそ書いていたんだけど、俺が石橋さんと接触したのはそれが最後だったんだ。何かやましいことがあったのか石橋さんはすぐに立ち去ってしまっただけが俺の知ってる事件の全貌です」

「犯人の醜い抵抗ってところね。で、それで終わり？」

藍果の態度も次第に冷たくなっていくことが分かった。

「この手紙には塚田と署名されている。だから俺は今までずっと塚田さんを疑ってきた。だから彼の部屋も調べたい」

塚田さんは反論もしないままずっと黙りこくっている。

「そんなの誰かが偽装したんじゃないかって？ もし塚田さんが犯人だったら今わざわざここでこの手紙を取り出さないでしよう？」

「だから俺も分からなかったんだ。でも、犯人はそんな狂った行動はとらないのではないかという常識の死角に潜り込んで、あえてみんなの前で手紙を出して自分を犯人じゃないように仕向けたのかもしれない」

「だつしゅくん、あんた私たちを今までずっと騙してきたじゃん。真相がどうであれまほはあなたの味方はないわ。下着がどうたらこうたら言ってたけどさ、塚田さんはこの手紙について触れないだろうってたかをくくってたんだよね。まほはもうあんたの言うこと信じれないよ」

「それは本当にごめん」

「でもまだ事件の全貌が見えていない今山田くんだけを疑うのはちよつと。塚田さんの部屋も調べる必要があるのかも」

「そうだね。まほちゃんとナナコの部屋は後で私たちだけで調べるとしてもね、塚田さんの部屋に私たち三人だけで行くのもあれだし」

菜那子に続いて藍果もこう口にした。

「あの、じゃあとりあえず塚田さんの部屋に」

「あんたは黙ってて。だっしゅくんは容疑者なんだからね」

「い、ごめん」

俺は謝ることしかできなくなっていた。

「分かったら来てもいいけど、ずっと手を挙げたまま移動して。というより、今一人になってもらっちゃ何されるか分からないし逆に困る。とにかく自分の立場を理解して」

茉帆のいつになく冷静な一言によって皆は塚田さんの部屋に移動することとなった。



Hayato

第六話 孤独の船

「入れよ」

塚田さんは黙ったまま堂々とした態度で部屋の扉を解錠し、そう一言残してから廊下の壁に背をつけた。

「待って、怪しいんだけど。部屋に入った瞬間爆発するみたいな仕掛けがしてあるんじゃないでしょうね」

小林さんの一件もあったことから、皆もう誰も信じられなくなってしまったのだろう。

「そんなのねえよ」

塚田さんは自ら扉を勢いよく開けて抵抗もなく部屋に入ってしまった。普通に考えれば当たり前の行動である。

死体の一つでも転がっているかと思っていたが驚くくらいに何もない。唯一怪しいものといえやはり、スーツケースくらいである。推理欲とでもいうのだろうか、俺は反射的にスーツケースの方へ近づいたがこの行動もまた藍果によって止められてしまった。

「山田くん待って。さっきまほちゃんも言ってたけどあなたは容疑者の一人なんだから。こんなところでスーツケースから拳銃でも取り出されて、『実は男同士グルでした』なんて言われたらシャレにもならないんだけど」

本当に俺は誰も殺していないからこそ、ついつい自分が容疑者であることを忘れてしまう。

「ごめん、でも、どうするんだ？　男子は二人しかいないし」

「塚田さん、私スーツケース見てもいいかな」

藍果の提案を塚田さんはあっさり認めた。塚田さんは藍果にスーツケースの鍵を投げて渡し、それを一度落としそうになりながらも胸元でキャッチした彼女はスーツケースを前に立膝になったが、彼女は躊躇いの目をしていた。鍵を挿し込んだ時に爆発するのではないか、ケースのふたを持ち上げた時にナイフが飛び出る仕掛けなのではないか、きっとそんなことを考えているのだろう。

「まほも見ろね。だっしゅくんはちよつと部屋の角にいて。塚田さん、その反応だと別に誰に何見られても問題ないんですよ」

「ああ」

自信たっぷりですます犯人が誰か分からなくなっていたところだったが、塚田さんの行動には謎が多すぎることを改めて痛感する出来事がまた起きた。

「な、なにこれ」

怖さ故に目を半分以上背けていた藍果の目はまんまるくパッチリと開き、スーツケースの中身に対して釘付け

になっていた。最終的には菜那子も近寄って覗き込み、ケースの中身を知らないのは俺だけだった。

「なあ、何が入ってるんだよ」

皆声を失っていたため『そっちに行くぞ』と一言声をかけてから両手を挙げ、ゆっくりとゆっくりと近づいて俺もスーツケースの中を覗き込んだ。

「えっ」

俺も声を失った。

「これ何だよ」

「見ての通りだよ」

「見ての通りってどういうことだよ」

「それ以上に言うことはねえよ」

スーツケースには日本円の札束が詰められており、厚みからみて一千万円程度になるのではないだろうか。札束といっても全て一万円札ではなく、ところどころ五千円札が混ざっている点が少し引っかけた。

「そうか、金庫室だ」

この札束が最後のピースとなり、俺は頭の中で矛盾の無い推理を完成させ一目散に動き出そうとしたのだが、

またしても自分が容疑者であることから行動を規制されてしまった。

「待って、次は何をするつもりなの？」

茉帆は容赦なく俺の足を止めてくる。

「一番初めに若生さんが死んだ時に金庫室に行っておけばよかったんだ。あそこに行けば何か重要な手掛かりがつかめたはずだったんだ。塚田さんは見ての通り大金を所持している。それも一人で船旅に持ち込むような額じゃない。聞いてほしい、俺の推理を」

「分かったわ、とりあえず聞くだけね」

「カジノで大勝ちした若生さんは石橋さんにプールで殺害された。そして石橋さんは大金を奪いそれを独り占めした。虹嘉や小林さんを殺したのは多分、重大な証拠に触れたからでしょう。昼ご飯を食べる前、虹嘉だけはプールにいました。あの時話の中心は虹嘉だったはずなのに急に虹嘉だけが居なくなっています。石橋さんはおそらく凶器となった何かを回収させるために虹嘉をこっそりと掃除させるように向かわせたのでしょう。

一方、小林さんは犯人の立場からすれば生かしておくこと自体が危険です。俺が犯人でもまっさきに排除する存在だと思います。だからといって殺していいわけではないですが、考えられなくはない動機だと思います。そして塚田さんも一人ながら事件についてずっと考えていた。次のターゲットになるのは同じギャンブラーの

俺になるだろうと悟った塚田さんは自分が殺される前に石橋さんを何とか始末したいと思った。だから俺に手紙を送りつけて石橋殺しの罪を分散させようとした。最終的には有り金全部を手に入れて何事もなかったかのようにこの船を降りる。これが塚田さんの目的だったんじゃないですかね」

塚田さんは何も言わない。凶星なのだろうか。

「だからきつと金庫室のログや防犯カメラをチェックすれば何か分かるはずなんだ！」

「だから待ってって」

とうとう藍果が大声を上げた。

「山田くんは動かないで。それも今の段階ではただの推理でしかない。まだ百パーセント山田くんが白だと決まったわけじゃないし、あのダイイングメッセージの謎もまだ解けていないじゃない」

そう言われて今やつとダイイングメッセージの存在を思い出した。

「藍果、私あのダイイングメッセージについて気付いたことがあるんだけど。それを確かめるためにちよつと金庫室に行ってくるね。山田さんの推理の真偽を確かめるためにも。私は山田さんのことまだ信じてるから」

「まって、まほも行く。殺人犯二人とはいたくない」

藍果一人を残して行くのかよと心の中では思ったが間違っても俺は犯人ではない。だからこそ藍果の身に何か

あつた時には俺が彼女を守ると決意した。

「塚田さんも、申し訳ないですけど今着ている服を脱いでもらってもいいですか。ポケットが多いとどうしても警戒しちゃうので」

塚田さんは彼女の指示に従った。部屋には肌着一枚で両手を挙げた俺と塚田さん、そして扉の前で腕を組みながら仁王立ちしている藍果だけが残った。

＊

「菜那子さん、さっきのダイイングメッセージの『気付いたこと』って何だったんですか？ まほさつぱりなんでしょう」

「あのダイイングメッセージね、多分ですけどすべて山田家の家紋を表してるの。三つの勾玉も、一つの丹も。六つの星はきつと、六つの黒丸が花びらの様に並んでいる様子を意味しているんだと思うわ。ルーツは違うけれど三種類全部山田家の家紋なの。本当に被害者があのメッセージを残したとするならば……私の推理はこうよ。動機は分からないけれど山田さんが石橋さんを含めて全員を殺害し船を乗っ取ろうとした。理系卒って言

つてたから毒物や発火物の知識もありそうだしね。もしかしたら大金を目にして計画を思いついたのかも？」

「なるほど、菜那子さんって頭良いんですね。まほはそんなこと思いつかないから」

「いやいや、そんなことないよ」

「ううん、だってダイイングメッセージの謎も分かっちゃうし」

「それはたまたまだよ。同羅大学では日本史専攻でさ。日本人の苗字と家紋について勉強してた時があつたんだ。特に丸の中に丹って書かれた山田家の家紋はなんか印象的で覚えてただけだし」

「それでもすごいですよ。こんな恐怖しかない船の中でそんなことにも気付けちゃうって」

そう話していると間もなく私と菜那子さんは金庫室の前にたどり着いた。

「あ、あつた、金庫室だ」

「あ、でも鍵がいるのか。すっかり忘れてたね」

「ほんとだ。私ピッキングできますけど、やりましょうか？」

「え？ ピッキング？」

「うん、まほ高校生の時までずっと悪いことばっかしてて、その時に興味本位でピッキングを始めてみたら意外とあつさりできちゃつて。だからクリップとか細い針金みたいなものがあれば基本出来ると思いますよ」

「そうねえ、非常事態ではあるし天罰はくだらないよね。お願いしようかしら」

菜那子さんが扉のノブに手をひっかけたところ重たい扉が少し動いた。

「あれ、鍵かかってない？　ちよつとここで待ってて」

そのまま菜那子さんは扉をゆつくりと奥に開けて、薄暗い金庫室の中に彼女だけがスタスタと吸い込まれるように入っていた。そして一分も経たないうちに中から彼女の声が聞こえてきた。

「な、何、これ。まほちゃっ……」

私が異常事態を察知したのは、物音とともに菜那子さんの声が途切れたところからだった。

「菜那子さん？　どうしたんですか？」

閉まった扉を片手で開け、スマートフォンのライトとともに金庫室の中へ恐る恐る入っていたのだが、偶然私は床に寝っ転がった人間を照らしてしまった。悲鳴というのは自分で音量もタイミングも調整できないように、狭い金庫室にて私は大きな叫び声を上げた。

「だ、誰！」

そこには両手両足、口を縛られた女性が一人倒れていて、その女性の胸元に光を当てると新井と書かれた金色のネームプレートが美しく輝いた。

「新井ってどつかで……」

「そうだ。この船の女船長さんだよ」

私の後ろから聞き馴染んだ男性の声が聞こえてきた。

「その声は……おっさん」

「おいおい全然名前で呼んでくれへんやん」

振り向いてスマートフォンライトを当てると、そこには石橋さんと口元をハンカチで抑えつけられ脱力した状態の菜那子さんがいた。

「どういうことなの、何でおっさんがここにいるの？ 犯人は山田じゃないの？」

「せやな。真犯人は山田の兄ちゃんや」

「じゃあおっさんはここで何をしてるの」

「それはあれや、監禁されてたんだよされててん。あの山田って兄ちゃんに」

おっさんの歯切れの悪い発言は、現行犯行為を目撃した私にとって何の意味もなさない証拠であった。

「そんなの嘘だ」

「嘘やないって。今までずっと真っ暗な中で監禁されてたんやで？」

「じゃあ何でおっさんは菜那子さんを殺したの」

「殺してへん殺してへん。物音がしたから山田が来たと思って奇襲をかけたろうと企んだんやけど、来たのが菜那子さんやっただけや。ほんまにほんまに、脈もあるしちよつと眠つとるだけでちゃんと生きてるから」

「嘘だ。じゃあその女の人は？　なんで船長は手足を縛られてるのにおっさんは自由なの？」

「それは俺にも分からへんなあ。ロープが足りなかったとかちやう？　けど金庫室は真つ暗で今こうして扉が開くまでは船長さんがいはるって知らんかってん」

「嘘だ嘘だ嘘だ、何もかも嘘だ。そもそも金庫室に監禁されたとか言ってたけど扉の鍵が開きっぱなしだったなんておかしいよ」

私の腕は既に鳥肌だらけになっていたが、石橋さんの睨むような表情を見てその鳥肌は首を伝って脳を突き刺す衝撃に変わった。目の前にいる石橋さんと片腕を掴まれた菜那子さんの姿に重ね合わせるように、五年前に起きた少女誘拐殺人事件の犯人と被害者の親友が姿を現した。今でも悪夢として夜中に出てくる二人であるが、私が起きている時にはつきりと現れたのは初めてである。中学二年生の夏、私という人間の形成に大きく影響を与えた事件が今、フラッシュバックとして鮮明に蘇ってきた。不思議なことに嫌な記憶の全てを思い出しながらも、私はいつも以上に冷静になっていた。そして今まで人前で見せてきた『まほ』という人間はもう

いなくなっていた。夏休みのある日、私は同じマンションに住む瑛美里と一緒に市民プールに行くことを約束していた。朝から早起きをして水着をカバンに詰め、二人並んで小さい自転車に乗って人工芝の広い公園の丘を駆け上がった。市の駐輪場は一日当たり六百円以上もかかってしまうことから、プールの建物に沿わせるように自転車を無料停め^{ただいめ}することが暗黙のルールで、結果私たちは一人当たり三百円だけを払ってプールで目一杯泳ぎ、夕方の七時くらいまで遊び続けた。更衣室でだらだらと話しながら着替えることもあって、私たちが外に出る頃には朝いつぱい停まっていた自転車のほとんどがなくなっていることが日常なのだが、その日はなぜか瑛美里の自転車まで消えていた。すぐにプールの管理人のもとへ相談しに行こうとしたのだが、背後から警備員のような格好をした三十代くらいの女の人に声をかけられ、思い返せばその時から既に事件は始まっていた。

「君たちどうしたの？」

「あのね、自転車がなくなつたの」

「それってどんな特徴の？」

「ピンクと白の自転車！」

「もしかしてムンリオのハロー・マイラのシールが貼ってあったやつかな？」

「そう！ それ！ お姉さん何で知ってるの？」

「実はさっきみんなの自転車が風に吹かれてドミノ倒しになって、それを一台一台立て直して整理している時に私が別の場所に持っていつちやったんだ。案内するから二人ともおいで」

そう言われて疑いもなく彼女の車に乗り込んでしまったことが幼さ故の過ちであつた。その車を運転していたのは別の男性で、少し走つたところでやつと今まで一度も経験したことのないような恐怖感に襲われた。車が到着した先は二階建ての誰かの家だつたのだが、そこにはなぜか私たちのためのベッドが二つ既に用意されていた。もし警察に話したら命はないよと脅されたものの、それ以外に言われたこともされたことも特に無く、豪華な夜ご飯が出てきた時には誘拐も何かの冗談だと思つてしまった。そして、明日には帰れるだろうとちよつと安心した私はベッドで眠りにつくことにした。物音に気付いて目を覚ましたのは深夜三時半のことだつた。ふと横を見ると隣にいたはずの瑛美里はいなくなつていて、目をこすりながら彼女を探しに階段を降りるとリビングの灯りが廊下に漏れていることに気がついた。扉の隙間から中を覗くと運転手の男に腕を掴まれ床に倒れかけた瑛美里がいて、向かい側にはそれをビデオカメラで撮影するお姉さんの姿があつた。しばらく息をのんでリビングの中を覗いていたのだが、一瞬その男と目があつてしまったような気がした。このままだと二人とも危険な目にあつてしまうと思つた私は静かに玄関を出て、助けを求めて夜の街を逃げるように全速力

で走った。走っている時は恐怖からの解放感を体全身で感じていたが、いくら走っても真夜中に外を出歩いているような人はおらず、結局私は近くにあった六階建ての茶色いマンシヨンの柵を飛び越え、不法侵入と分かっているながらも無断で他人の敷地内に忍び込んだ。そして、

「こうなったの、あたしのせいじゃないよね。あたしは悪くないよね」

と唱えながらメゾン・イワサワというマンシヨンの非常階段で体育座りをし、真夏の夜を震えながら明かすことにした。翌朝すぐに管理人の元へ謝罪とともに助けを求めに行き、家と警察に連絡をしてもらい事件はすべて解決したかのように見えた。母は私が家に帰ってきたことを泣いて喜んでいたのだが、私の心は複雑だった。

瑛美里が死体となって翌朝発見されたことを知ってしまったからである。母親もそのことは知っていたはずなのに、「帰ってきてくれてありがとう」と言って私を一日中抱きしめ続けた。彼女の話をしようにしても「その話もういいの」と怒られ、試しに笑顔を作って生活してみると、母はこれでもかというくらいに喜んでくれた。私は愛した人を失くしたというのに。私は本物の笑顔を忘れた。あの時逃げていなければ彼女は助かったのだろうか、あの日必死に助けを求めていたら彼女は助かったのだろうか。彼女は私の罪を許してくれるだろうか。その頃から十四歳の私には背負いきれないほどの後悔が一生付きまとうことになり、しばらくは学校にも行けず、情緒的混乱とそれによる不登校を誤魔化すために人生の約四分の一を『不良少女を演じるこ

と』に費やしていた。作られた笑顔だけで生きてきたのだ。しかし、名門大学の学生にはそれが一切通用しなかった。私が高卒認定を取得し一般入試で入学した帝国大学の学生は皆目が肥えていて、人とコミュニケーションをとらずに生きてきた私の本質はすぐに見抜かれてしまった。コミュニケーションにおける優柔不断さも、付き合いの悪さも、もう二度と親しい友人を失いたくないという思いから派生されたもので、賢いのに馬鹿な、馬鹿なのに賢い私は次第に友達を失っていった。今となつては初対面の人と一瞬の付き合いをすることが精一杯だった。そんな私を作り上げてしまった事件と全く同じシチュエーションに今遭遇して、私は目を閉じて深呼吸をした。

「まほは茉帆にならなきゃいけないんだ」

正義感の強い石橋さんが今もなお正義を主張するならば、きっと今すぐにでも新井船長を助けにいつているだろう。彼がもし人殺しの罪を山田さんに擦り付けていたとしたら、そしてこんな瞬間を誰かに目撃されたら、間違いない彼はきっと私を殺すだろう。そう思った瞬間私の足は動き出していた。

「これは逃げじゃない」

仲良くなりはじめた皆を守るため、私は一目散に藍果さん、山田さん、塚田さんの元へ走っていた。

＊

あれから約十分が経ったが二人はなかなか帰ってこなかった。

「二人とももう手を下ろしていいわ」

「えっ」

「もう何もしないことは分かったから」

「ありがとう。それにしても菜那子と茉帆、遅いな」

「そうね」

どうやら口を利くことも許してくれたようだった。立っていた藍果もとうとうしやがみ込み、疲れきった様子を見せていた。今までずっと気が休まることのない時間が続いていたから仕方ないだろう。しかし藍果に休める瞬間が訪れることはなく、彼女が力を抜いた瞬間茉帆が息を切らしながら走って帰ってきた。

「藍果さん！ 大変なんです。石橋が犯人です」

俺と藍果は慌てたように驚いた。菜那子が戻ってきていないということはまだ現場で何か証拠でも押さえているのだろうか。

「何かあったのか？ 茉帆、金庫室に何があったんだ？」

「今から説明するから山田さんはチョット黙っててください」

そう言つて茉帆は一部始終を主に藍果に向けて語り始めた。

「なるほど。つまり金庫室に船長が監禁されていて、一緒に石橋さんが身を隠していたってことか」

「うん、で、石橋さんは最後まで山田さんが真犯人だつて言っていたけど、もうそのあたりの事実関係はよく分からないです。あと、」

「まつて俺は何も」

真偽の分からない事例に対する子どものような俺の反応に少しイラついた藍果は

「もう分かったから」

と少し怒つた口調で俺の話を遮り、冷静なトーンで続けてこう話してきた。

「とにかく、近くの陸に上がりましょう。ここまで証拠が揃えば警察も相手にしてくれるでしょう」

「陸っていつてもどうやつて？ 太陽の位置から方角が割り出せたとしても陸がどちにあるかは分からないですし」

「金庫室に船長が居たんでしょ？ 無理やり起こすしかないんじゃない？」

「そっか」

「多分だけど、経過した時間から推測するにここからなら兵庫県の港が一番近いだろうから、それまで絶対に死者を出さないようにしましょう」

「そうですね」

「塚田さんと山田くんはそれぞれ別の部屋でもう少し動かないでいてもらいたいんだけど。監禁っぽくなるとは思いますけど待機していてもらっていますか？」

俺らに断る権利はなく、藍果は俺と塚田さんから部屋のカードキーを取り上げた。俺と塚田さんの部屋の内側の扉のノブはドライバーで丸ごと取り外され、外からしか開けられない仕様に変えられた。そして俺は塚田さんの部屋に、塚田さんは俺の部屋に入ることとなりしばらくは部屋から出られそうになかった。ほとんどの荷物はそれぞれの部屋の中に置きっぱなしであったが、あの大金だけはデリケートな問題で盗まれたと騒がれてしまつては厄介だったので、丸ごと俺の部屋、つまり塚田さんが監禁されている部屋に入れることとなった。

これは話し合いの結果満場一致で決まつたことであつた。監禁されてしばらくすることを失つてしまつたが、考えなければいけないことは多くある。石橋さんがまさか生きているとは思わなかったが彼は真犯人が俺であると主張した。何度も繰り返すようだが俺は本当に殺人を犯していない。しかし船が港に着くとおそろく俺は

任意同行を求められるだろう。その時にちゃんと事情を話せるように、そして無実を主張できるように完璧な推理をここで立てる必要があった。本当はこんなことしたくないのだが俺は塚田さんの部屋をもう一度漁ることにした。

「塚田さん、ごめんなさい」

そうはいつでも彼の部屋の中に置いてある荷物はかなり少なかった。五分くらい部屋を漁り続けたけれどやはり怪しいものは何も出てこなかった。もう漁る場所がなくなつて半分諦めながらテレビバックの引き出しを乱雑に開けるとそこには見覚えのあるメモ帳がしまつてあつた。

「あ、これ」

あの例の手紙が書かれたメモ用紙の束だった。そしてその一番上のページには手紙のあの文章がうつすらと残っている。筆圧によつて残された殺人予告の文章だ。

「これがここにあるつてことは、やっぱりあの手紙は塚田さんが書いたつてことで間違いないのかな」
部屋に一人でいると、思っていることがついつい言葉となつて出てしまう。

「茉帆は石橋さんが犯人と言つていてその証拠も挙がつている。金庫室で船長を監禁したうえで自分は狂言。共犯者として一番可能性が高いのは塚田さん……だから石橋さんは俺を指名して真犯人だと言つたのだろう

か。しかし石橋さんも足掻き方が雑じやないだろうか。たとえ共犯者がいたとしても石橋さん一人がやったことにすればいい」

もう藍果や菜那子や茉帆も含めて今の船の乗組員の全員が共犯者なのではないかと思ってしまう。

「小林さんを殺したのは間違はなく石橋さんだろう。あの時みんな甲板にいてアリバイがある中石橋さんだけは姿を現さなかった。石橋さんは殺害されたという可能性もあったが実はずっと金庫室に隠れていただけ。しばらくしてみんなが居ないタイミングを見計らって喫煙室に可燃性のガスを撒き、その後はまた金庫室に身を隠した。小林さんには喫煙室に入る前から煙草に火をつける癖があつたから、扉を開けておいの異変に気付く時には既に手遅れだったのだろう。若生さんが死んでいた時のことはあまり覚えていないけれど、確か真つ先にプールに飛び込んで助けに行つたのは石橋さんだった。脈がないといったのも石橋さんで、スタッフを呼んでいたら間に合わないからスタッフを呼ぶなといったのも石橋さんだった。そういえばそうだ、スタッフだ。たくさんいるはずのスタッフが一人もいない謎に今まで全く触れていなかった。金庫室に居たのは船長だけで他のスタッフはどこにもいなかった。船長は利用価値があると思つて監禁したが他のスタッフは騒がれないように一人ずつ海に落としていった……とか？ もし本当にそうだとしたら、そんなことができるのは体格的にも石橋さんしかないない。虹嘉を殺したのも石橋さんだとしたら、この事件、共犯者なんかいない！ 綸奈

がご飯を作っている時、石橋さんは常に料理の近くにいて配膳のチャンス伺いながら毒を盛ることはいつでもできた。動機は……動機は……」

自然と大きな欠伸が出て瞼がだんだん重たくなってきた。俺は体力に限界を感じ遮光カーテンを閉め、塚田さんの布団を借りて掛布団に包まることにした。

「動機はやっぱり若生さんの金か？　だとしたらもつとひっそりできたはずだ。動機は動機を隠すため？　船内で大量殺人が起きれば無差別殺人扱いとなり犯人の動機はより分からなくなる。石橋さんはこれを狙っていたのだろうか。あれ、でも何かおかしい。何か。何か……」

あれから何時間が経っただろうか、とてもぐっすり眠れた気がする。窓から差し込む強烈な朝日を体に受け気持ちの良い朝を迎えた。できることならこのふかふかのベッドの上でこれからもずっと寝ていたい。そんな気分である。左手を枕替わりに横向きで寝ていた俺は口まわりと袖がほんのり湿っていることに気がついて慌ててベッドシーツを横目で確認した。セーフ。涎の痕はベッドにはなく口元を拭ってもう一度布団を被った。

「……あれ、カーテン閉めなかったっけな。それより俺、何時間寝てんだ？」

「丸二日くらいじゃない？」

そこには俺の独り言に返事をした女の影があった。いくらぐっすり寝たとはいえ今までのことを忘れてはいな

い。部屋に一人監禁されていたままだと思っていたから、犯人であるかどうかはもはや関係なく藍果に対して警戒心を拭いきれなかった。



Captain Arai

127 愛した人の罪

第七話 愛する人

「藍果？ お前なんでここに」

「あら、ビックリした？」

「いやいやビックリも何もシヤレにならんど。何でここにいろの？」

俺はしわの寄った白いシーツをくしゃつと握りベッドの上でお尻を後ろに引いた。

「そりやあなたが昨日私に鍵を預けたからじゃない？ あ、この部屋の鍵は塚田さんから貰ったのか」

鍵を顔の前で摘まんで持ち上げた藍果の遠くを見るような眼はどこか狂気に溢れているように見えた。彼女から感じる天然さは全て偽りのものだったのだろうか。

「いや、そういうことじゃなくて」

周りを見渡してみると塚田さんの荷物が全てなくなっている。誰かに盗まれたのだろうか。そうだとしたら藍果しかない。大金を塚田さんに持たせておいてよかったと心から安心してゐる一方、この状況をうまく読み込めず大きな不安も抱えている。

「で、藍果はこんなところで何してるの？」

「何って、あなたを起こしに来たのよ。は　や　と　君　♡」

監を作った藍果はこの状況をどこか楽しんでいるようにも見える。

「か、からかうのはやめてくださいよ。殺人事件が起きた船の中で仲良くなりたいと接触、のちに監禁。そして気づいたら部屋の中に侵入。猟奇的な犯人にしか見えませんよ」

「そりやそうねえ。私が全事件の犯人なんだから」

そう言つて不気味に笑つた藍果を目の前にして俺は思考回路が停止した。今目を覚ましていなかったら間違ひなく殺されていただろう。冷静になろうと姿勢を立て直した時に藍果が続けた。

「つて言つたらどうする？」

「わ、悪いな、俺はもう何も信用できなくなつてきているんだけど」

藍果に刺激を与えないように彼女の心の中を探ろうとしたが、やはり何が本当かは分からなかった。

「じゃあさらに信用できなくなるようなこと、言つてもいい？」

セリフさえ変われば顔も仕草も可愛いのだが、絶望的な会話の内容に脳は悲鳴を上げ始めている。可もなく不可もなかった自分の人生を一目惚れした美人の女性に終わらせてもらえぬなら悔いはないかと思うと、体の力は一気に抜け、もう事実関係の全てがどうでもよくなつていた。小林さんが言つていた生の呪縛からの解放に

よる幸せというのはこのことだったのだろうか。

「聞くだけ聞くとよ」

ため息の混じった声が出た。

「すぐく上から目線だね、そんなに警戒しなくてもいいのに。ま、いつか。この事件、すべて終わったのよ」
日本語の『終わった』にはいろいろな意味がある。寝起きの俺にはついていけない内容だった。

「それ、信じていいのかよ？」

「うん、まあ信じるか信じないかは自分次第だけど、意外な真犯人も見つかったしきちんと警察にも処理してもらってるからそれでも疑うのなら警察に話を聞いてみるといいわ」

「まじかよ。でもなんで藍果が？」

「山田くん、随分探偵ごっこ楽しんでたみたいだけど正直ボロが多いのよ。ひょっとしてミステリー小説好きでしょ？」

「えっ、まあ。でもなんで？」

「推理好きの私の話、聞く？」

「うん」

「あのね、ミステリー小説はいつも主人公が主人公目線で事件を解決するの。だから読者もその主人公のバックボーンを理解しながらあたかも自分がその物語の主人公であるかのようになぞ解きをしようにする。小説と現実の大きな違いは何かわかる？」

「えっと、リアルかリアルじゃないか？」

「違うわ。主人公が答えを知っているか知らないかよ。主人公は筆者が生み出した生き物であって、筆者は犯人を知ってるの。だから読み進めれば必ずといってよいほど主人公は簡単に真実を見つけられるのよ。でも現実はいくら主人公の真似をしても答えは出ないのよね。確実に犯人じゃない人とそうでない人を正確に見極めなければならない。そして確実に犯人じゃない人の命は確実に守らなければならないの。あんな大胆に犯人を刺激するような行動ばかりとってたら命がいくつあっても足りなかったわよ。だから山田くんと塚田さんはもう少し早く監禁したかったんだけどね」

「それじゃああの犯行予告を書いたのって、藍果？」

「いや、正確には私が塚田さんをお願いして、塚田さんが書いたって感じかな」

「だから塚田さんは俺の部屋であの手紙をどうどうと出せたのか……」

塚田さんに関する断片的な謎の多くが一つの真実をもとに繋がりはじめた。

「それで二人が怪しいってなれば監禁せざるを得なくなるでしょ？　だけど本当に石橋さんがいなくなっちゃうから予定は少し狂っちゃったけどね。まあ結果的に成功よ」

「犯人はやっぱ石橋さんだったのか」

「ええ。でももう一人いたわ」

「共犯者か？　誰だ」

「山田くんもちよつとは勘付いてるかもしれないけれど、一連の犯行って全部石橋さんがやったといえれば片付く。けれど、それぞれの犯行を振り返ると一点だけおかしな点があつたんだけど、何かわかる？」

「そう言われて今まで起きた事件をすべて振り返った。俺もどこかのタイミングで一度そのことに引っかけたことがあるような気がしたが、喉元くらいまで出かかった答えはいくら考えても形にならなかった。」

「わ、分からねえ」

「毒よ」

「毒が何だって言うんだ？」

「食事中に起きた虹嘉ちゃん毒殺事件、でも船の中に毒なんて普通あるか？ってことよ」

「それって」

「ええ。最初から誰かさんが誰かさんを毒殺するために毒を船に持ち込んだとすれば？　そしてそのターゲットは今回たまたま虹嘉ちゃんだったのではなく、必然的に虹嘉ちゃんだった。となれば？」

「まさか、倫奈か？　やっぱりあのショックを受けた振る舞いも全て演技だったっていうのか？」

「ビンゴよ」

「それで、今はどうしてるんだ？」

「新井船長とナナコが警察のところへ届けてくれてるよ。ナナコ、金庫室で石橋さんに睡眠薬で眠らされたみたいだけど、しばらくしたらちゃんと復活したわ。私もついていこうかって言ったんだけど、大丈夫って言うから任せちゃった」

「他の……塚田さんとかは？」

「塚田さんはもう船を降りる準備をしているわ」

「あれ？　ってことは、もう港に着いたのか？」

「ええ。最後は船長に頑張ってもらったってところかな。私たちもそろそろ降りるよ。それで起こしに来たんだから」

「お、おう。でもなんで俺の無罪を信じてくれたんだ？　塚田さんのみだけ？」

「あなたが犯人だったら、きっとボロが多くてみんなにバレてるわ」

「酷いな」

「それに、朝食の時も私と一緒にいたし、小林さんが死んだ時も虹嘉ちゃんが死んだ時も事件現場にはいなかったじゃん。塚田さんに関してはカジノ小屋の防犯カメラがアリバイを証明してくれたのよ」

「藍果ってすごいな、完全に物語の主役をとられたよ。真犯人ならぬ真探偵だな」

「へへ」

「ところでここはどこだい？」

「兵庫県。神戸の港だよ」

「俺はもう陸に上がれるだけで幸せだよ。海の上に監禁された生活はもうごめんだ」

「山田くんはこの後どうするつもり？」

「この後ってか……そういえば考えてなかったな。まさか兵庫県に来るなんて思ってもなかったし」

「せっかくだし、このあと一緒に観光しない？ どうせ暇でしょ？ 行く当てもなさそうだし、彼女もいなさそうだし」

「うるさいなあ」

やはり藍果はセリフのチョイスだけが問題である。しかしこんな可愛い女の子にデートのお誘いを受けたことなど人生一度もなかったもので心の底から喜んでゐる自分がいた。纏めるほどの荷物もなかったので部屋を出て数分で下船の支度は整った。最後に一目甲板からの景色を見ておこうと思つて軽くスキップをしながら足を運ぶとそこには先客がいた。俺は慌ててスキップを辞めると小走りで甲板に向けて走り出した。

「塚田さん、それに茉帆じゃないか」

「山田さん！ さつきはごめんなさい。疑っちゃったりして」

「いや、いいさ。あんな状況になれば誰だつてそうなるつて。つてか茉帆なんか変わった？」

「えつ、そうですか？」

「うん。なんとなくだけど、俺は今の茉帆の方が好きだな。何かあったのか？」

「いや別に、ないですよ」

茉帆は小声でささやいた。エネルギーで地に足がつかないような茉帆の腹が座つてゐるように見えたのだが、彼女には自覚がないのだろうか。

「そっか」

その後彼女は何かを言おうと口をあの字に開きかけたところで急に口を閉じ、声を出すことを辞めた。

「ま、海の上で殺人事件にずっと巻き込まれっぱなしだとさすがに疲れてエネルギーも切れるよね」

「そうですね」

相変わらず塚田さんは全く口を開かなかったが最後に一言、

「またとない機会だったのにな」と口にした。

「どう意味ですか？」

俺も茉帆も不思議に思つて塚田さんを見ると、彼は付け足すようにこう言い残した。

「せっかく死ぬ覚悟を決めたのに、良くも悪くも無駄に終わっちゃった」

「そんな寂しいこと言わないでくださいよ」

塚田さんが何かを話し続けようとしたところに、下船の支度を終わらせた藍果も甲板にやってきて会話を合流した。

「嫁にも娘にも逃げられて死に際を間違えたんだ。職も無いし分家だから貰える遺産も全然ない」

「あの、なんていうか、その奥さんとお子さんのことは愛していたんですか」

茉帆の素朴な質問に俺は何か重みを感じた。

「ああ。だから何で誰からも愛されず人生の目標すらもたない俺が生き残って、期待されて生きている子たち

が死んでしまったんだろうって、今回の一件で思うようになったんだ」

「分かりますよ、その気持ち。私もそうですから。愛する人の定義は違うかもしれないですけど、私も中学生の時に目の前で大切な人を失っているんです。何とも言葉にしにくい情けなさみたいなのは五年経った今でもしっかりと残ってるんです。でも気づいたんです。生きてる人は死にたいって思えるけど、死んでしまった人は生きたいって思えないんです。それだけでも生きるってことの価値が大きいものに思えてきませんか」

二人の話を聞いて藍果も優しく慰めるように話しかけた。

「奥さんのことに関しては凄く残念なことだと思います。良い意味で見返すように生きみたらどうですか。誰よりも幸せそうに生きて、奥さんが塚田さんのところに戻りたいって思ってもらえるように生きようとすれば、また人生に目標もできるじゃないですか」

「そうだな」

「人生に意味付けをするのが俺たちの役目なんだと思いますよ」

「ああ」

二人の話が塚田さんに響いたかどうか確かな感触はなかったけれど、塚田さんの始めた密度の濃い雑談は塚田さんの一言の返事によって終わらされた。

そのまま僅かに沈黙の時間が流れ、四人で揃って船の降り口に向かって歩き出そうとした時、茉帆が新しい話を持ってきた。

「茉帆たちも事情聴取とか受けないといけなくなるのかな。ほら、一度任意同行を求められたらなかなか帰してくれないじゃないですか。茉帆、事情聴取結構嫌いなんですよ」

「そうだな。菜那子には申し訳ないけど事件に関わってないことにするか？　でもそんなことってできるのかな。なんか法に触れそう」

「ナナコが乗組員のことについて話していたら厳しいかもしれないけれど、顔も割れてないししばらくは大丈夫じゃないかな」

「事情聴取とか大変そうだな」

「そうね。石橋さんは最後まで山田さんが犯人だ、俺は犯人じゃない、みたいなことを言ってたんですけど、それ警察の前でやられたら最悪ですよ」

「確かに」

またしても覚えのない罪を被るということを考えると背筋が凍り付いた。

「じゃあ変に罪被らないようにみんなで黙ってませんか。そしたら誰にも迷惑掛からないし」

茉帆の提案は少し幼稚に聞こえるかもしれないが、この時の俺ら四人からしたらこれが最善の提案だった。

「俺も面倒ごとは嫌いだ。船で起きたことは誰にも言わないようにするよ。じゃ俺はこの辺で。世話になったな」

そう言って塚田さんはこの街を知っているかのように歩き去って行ってしまった。

「茉帆も、さっき明石に住んでる友達に電話したら今日暇って言うので、行ってきますね。もしかしたらもう会わないかもしれないですけど、また逢う日までってことで。お世話になりました」

茉帆は頭を深く下げた後、スマートフォンの地図機能を頼りに駅の方へと向かっていった。手を振りながら二人を見送った時、俺のお腹の音と藍果のお腹の音が同時になった。彼女の恥ずかしそうに笑った横顔はどこか可愛く、見惚れている自分がいることにも気がついていた。

「とりあえず、どこかでご飯にでもしようか」

「ずっと何も食べてなかったもんね、恥ずかしいけど私ももう限界。どこかレストランでも探そっか」

そう言ってスマートフォンを手にした藍果は歩きながら飲食店を検索していたようだが、一分一秒でも多く藍果と話したかった俺は彼女が画面を見ている短い時間ですら煩わしく思うようになっていた。特に話題があるわけでもないが彼女の名前を呼び掛けたその直後、彼女のスマートフォンが震えた。

「あ、もしもし？ うんうん、うんうんうん、うん、はい、わかった。お疲れ様、ありがとうね。そうね、またいつかお茶でもしよ。うん、うん、うん。はい。んじゃね、はい」

友達だろうか。そんな風に不思議そうに思っていることを見透かされていたのだろう。藍果は聞いてもない質問に答えてくれた。

「ごめんごめん、ナナコよ。一通り取り調べ終わったって。近くに親が住んでるから今日はそちに行くってよ」

解放されたようで一安心である。

「それと、取り調べではみんなのことは特に言っていないって。石橋さんもちやんと自首したから、追及されることもなく早く終わったって」

「そりや罪を認めてもらわなきゃ困るよね。殺人つて名のこの世で一番重い罪を犯してるんだからさ」

「そうね。今ふと思ったんだけど、この世で一番軽い罪ってなんだろう？」

「あー考えたこともなかったな。泥棒とか？」

「でもそれって盗んだものの価値に左右されない？」

「確かに。じゃあなんだろう。嘘をつくこととか？」

「なるほどねえ」

「そもそも罪に優劣ってつけられるもんなの？」

「全部きれいごととして処理しちゃうならそれでもいいんだらうけど、何十人の人を殺すのと泥棒することって、或いは嘘をつくことって等価なのかなって一瞬考えちゃったのよね」

「どちみち人を傷つける行為そのものを罪と呼べばそこに重みの優劣はないと思うよ」

「そっか、人間界って想像以上に厄介だね。生まれ変わるもんならそんなしがらみのない猫にでもなりたいたいもんだわ」

「あきれた発言だね。野生も野生で苦勞するよ」

俺は鼻と口でつい優しく笑ったが、こんなにもどうでもよい話を笑顔で共有できることほど嬉しいことはなかった。

「野生的な生き方に道德とか倫理とか持ち込む方が苦勞しちゃうよ」

「それもそうかも。まあとりあえず船の事件は一件落着つてことで、良かったな」

「そうだね。あ、ごめん結局店調べられてないや」

「あ、いいいいいよ。その道ファストフード店あるっぽいけどその辺とかにする？」

「うん、そうだね」

道路には数台の白い車が止まっており、歩道では数羽の雀が地面を突いている。結局公衆電話とポストを通り過ぎたすぐ先にあるファミリーストランに入ることになった。デートとカウントして良いか分からないが、初デートでファミリーストランを選んでしまった俺を無性に殴りたい。せめてもの配慮で上座を譲り、店の二階の角の席に座って俺は唐揚げ定食を、藍果はハンバーグ定食を注文ししばらくの間水を片手に話をしていった。

「そういえば藍果ってどこ生まれなの？」

「私？ 私は千葉だよ。山田くんは？」

「俺は東京だよ」

しまった会話が終わってしまった。なんとかして話を繋げて間を持たせなければ考えれば考えるほどありきたりな質問しか出なくなってくる。

「藍果は兄弟とかいるの？」

「妹がいるよ、二歳下かな」

「じゃあ俺の弟と同じくらいか」

「山田くん、弟いるんだっけ？」

「うん。豪ってやつ。昔はよく喧嘩したなあ」

「山田豪くんか。いい名前だね」

「今はもう苗字変わっちゃったけどね。藍果の妹は何て名前なの？」

「サラだよ」

「へー、やっぱり顔って似てるの？」

「うーん、どうなんだろうなあ。私とはあんまり似てないかも？ あ、あと猫！」

「猫？」

「うん。私が小学生の時から飼ってるみるくって猫がいるんだ」

「あれ、もしかして出港の時見送りに来てた？」

「あ、そうそう、よく覚えてるね」

「猫に敵ついサングラスかけてたのが何か面白くて、今でも印象に残ってるよ」

そうこう話しているうちに俺の唐揚げ定食がテーブルに到着した。なぜ俺の定食から来てしまうのだろう。

「ハンバーグ定食の方なんですけど焼くのに少々時間がかかっておりますので、あと三分ほどお待ちください」

い」

デート的には最悪のシチュエーションである。食べるか食べないか、どのようにしてこの場を繋ぐかを必死に考えざるを得なかったのだが、氣を使ってくれたのか藍果はお手洗いに行ってくるねと言って席を立った。この店の化粧室は一階にあつて彼女が階段を降りて姿を消した時、俺は大きなため息をついた。

「助かった」

彼女は五分ほどで帰ってきてハンバーグ定食も丁度同じタイミングできた。その頃には俺の唐揚げ定食は少し冷めてしまっていたが、それを極力顔に出さないように笑顔で頬張った。

「えーっと、何の話をしてたっけ」

「えーっと、何だっけ」

家族の話をしていたことを覚えていても、どう話を戻せば良いかが分からず不器用な話の切り出し方をしてしまった。

「あ、家族の話だ」

「あ、そうだそうだ」

「藍果の両親ってどんな人なの？」

唐揚げを一口に放り込みながら尋ねてみた。

「両親かあ。お父さんはね、なんていうかすつごく子ども想いで、いつでも私とサラの二人の味方って感じだったかな。お母さんは家庭的って言うよりは仕事のって感じ。しっかりした人で外にいることの方が多かったかも」

「へえー、良いご両親なんだね」

「まあ普通のコメントしかできなかった自分を強く引っ叩きたい。」

「山田くんは？」

「うーん、父さんはもうこの世にはいないんだけど誠実で厳格でかつこいい人だったな。小学生の時くらいから母さんは女手一つで育ててくれて、俺と豪を心から愛してくれた優しい人だったかな」

「いいお母さんなんだね」

「まあね。今は豪が家を出て行っちゃって母さんが一人になっちゃったからさ、これからは俺が面倒見る番って感じよね」

「なるほどね」

「父さんは昔からずっと武道をやってて俺には男の生き方みたいなのを教えてくれたんだ。まあ俺はそんなに

ハマらなかつたから結局今は図書店員として働いてるんだけど、何かあつた時ように護身術だけは教えてもらつてたんだ。例えばこういうふうに対面で片手を握られることをストレートハンドつて言うんだけど、てこの原理を使つてそれをこんな感じで潜り抜ける技があつたりするんだ」

「あ、今私の手握りたくてわざとそんなことしたでしょ」

「いやいやいやいや、そんなじゃないつて。誰か大切な人を守るためにもこういうことくらいは知っておくと思つてさ」

熱心に説明している俺に対し彼女は優しく微笑んでくれた。

「山田くんつて優しいんだね。もしこの護身術で助けられる日が来たら、その時は山田君の顔を思い出しながら感謝するよ。颯人くんつて言つたっけ」

「え？ うん」

「颯人くんつて呼んでいい？」

「いいけど」

たった数日で女の子とここまで距離が縮まつたことは今までに一度たりともなかつたので、心の中のニヤニヤが無意識のうちに漏れ出していた。

「何ニヤついてんのよ」

「い、ごめん」

アサリのお味噌汁に手を伸ばしてニヤついてしまった口元を隠そうとしたその時、肩に誰かが手をのせた。

「山田颯人さんですね」

振り返るとそこには黒のスーツをまとった長身の男性が数名立っていた。

「兵庫県警の平山と申します。署までご同行願えますか？」

なぜだ。なぜ俺の名前が、俺の居場所が知られているのだろうか。おそらく船内での事件の取り調べだろう。

ここにきて真犯人はやっぱり藍果でしたというオチだけは避けたかった。どういふつもりで警察を呼んだのかは分からないけれど、藍果がトイレと言って席を立った時に通報する余裕があったことを思い出すと、藍果が真犯人である可能性を否定できる材料がどんどん見当たらなくなっていく。

「えっと、俺は何も」

「とぼけても無駄です。清水屋昂紀殺害の容疑で逮捕します」

想像と全く違う事件の名前に俺は耳を疑った。同行理由が全く理解できなかった。そもそも俺はずっと船内にいた。どうしてこうも二連続で冤罪に巻き込まれなければいけないのだろうか。

「藍果！ 証明してくれ。俺は昨日お前と船の中にいたよな？ アリバイの証明をしてくれよ」

「ごめんなさい、アリバイは証明できないわ。確かに私たちは昨日から一緒にいたけど、ほら、船には乗っていないし。アリバイの証明って言ってもどうすれば……」

藍果はこんな状況でも四人で結んだ約束を守り通すというのか。このままだと身に覚えもない疑いで捕まってしまう。

「事件現場から押収された証拠品から君が犯人であるという結果が導かれてしまったんだ。残念だけど」

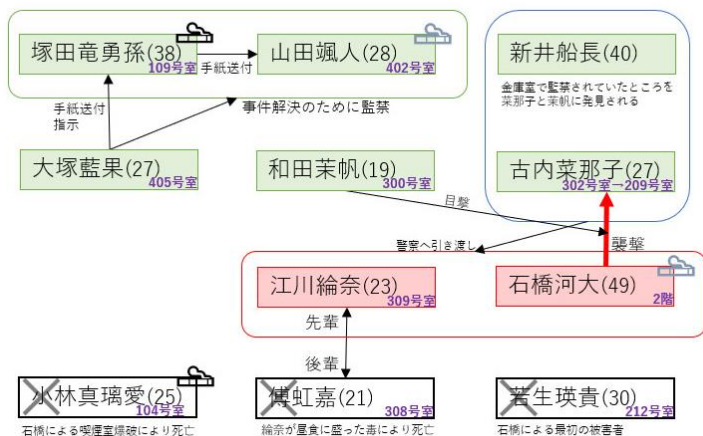
「颯人くん！」

藍果の目からは一筋の涙がこぼれた。

「人当たりがよくていつも正義を貫こうとするそんな姿に私は魅かれてました。ちよつと颯人くんのが好きになつちやつた。颯人くんはそんなことしないって私信じてるから……。絶対に戻ってきて」

藍果は食べかけのハンバーグのお皿を引っかけて床に落とし、わんわんと泣き崩れた。俺は連行されながらも最後の最後まで藍果のことを見つけていたが藍果と目が合うことは一度たりともなかった。それほど藍果にとつてもショックな出来事だったようだ。俺はパトカーに乗った。人を殺した覚えなんて微塵もないのに。

「なんで俺ばかりが不幸なんだよ」



第八話 一族

俺は山田豪。いや、清水屋豪^{しみずやたけし}。俺は本当に良い妻をもらったのと日々の生活でつくづく感じている。正確には婿入りをしているので良い家族に向かい入れてもらったという方が正しいかもしれない。清水屋豪はその名も珍しく兵庫県では有名で由緒正しい家柄である。俺は一生遥香^{はるか}を笑顔にすると云って告白しこれまでずっと妻を守り続けていたが、それ以降初めて彼女を泣かせることとなってしまった。今は遥香の兄、清水屋昂紀^{しみずやこうき}の告別式に来ている。昂紀は遥香が二十何年と慕い続けた実の兄と一緒に盃を交わしたこともあったが、彼は誰かに恨まれるような人ではなかった。遥香は俺の横で終始大粒の涙を流しているが、俺は一ミリたりとも涙を流せなかった。むしろここにおいて良いのかとまで考えてしまう。なぜなら昂紀は俺の実の兄である山田颯人に殺されたと刑事に告げられたからだ。ありえない。兄ちゃんはそんなことするような人ではない。しかしあの刑事は清水屋家全員の前で兄ちゃんが殺人犯である証拠が既にあがっていると言いつけて帰って行った。俺はどんな顔をして妻に、家族に、顔向けすれば良いのだろうか。俺も身体検査やDNA鑑定まで食らったが兄ちゃんもそんなことをされたのだろうか。あの刑事の名前は絶対に忘れない。平山刑事は本当に嫌な刑事だった。横に一緒にいる腕に火傷の跡を負った刑事は佐藤といったが、まだ彼の方がまともに見える。彼らとの会

話の記憶は鮮明に残っている。

「どうもどうも、何度も何度もすみませんね。すっかりお馴染み平山和樹刑事です」

「佐藤です」

「今日は清水屋家の皆さんにお知らせがございまして参りました。朗報ですよ。清水屋昂紀さん殺害の犯人が分かりましたので」

ふと思い返すと佐藤刑事は最初の自己紹介以降終始黙っていたような気がする。

「清水屋豪くん。あなたのお兄さんである山田颯人くんを清水屋昂紀さん殺害の疑いで逮捕させていただきました」

玄関先で出迎えた遥香も遥香の両親も口を開けたまま声すら失っていた。

「それは、どういう……」

「それについてお話をさせていただきたくですね、こう、おたくをお伺いしたんですけれども」

「待ってください。兄は無実です。兄はそんなことするような人ではありません」

「まあまあ落ち着いてくださいな。今山田容疑者は否認を続けてますけども、豪くんと共犯の可能性もでてきているんです」

遥香は何も言えなくなつてとうとう下を向いてしまった。目の前で起こっている嘘のような出来事を理解できず、ずっと俺たちは全員玄関先で話し続けることとなった。

「俺はそんなことしてません」

「俺は？ 颯人くんはしたつてことかな？ 颯人くんも君と同じことを言つてたよ。俺はしてませんつてね」

「俺も兄ちゃんもそんなことする人じゃありません。捜査をやり直してください」

「それはどうでしょうね」

「そもそも動機がない。昂紀さんを殺す動機が俺にも兄ちゃんにもない！」

ついつい熱くなつて年上の刑事にため口まで利いていた。

「動機ならバツチリありますよお。あなたも想像ついちゃうんじゃないですか？」

平山刑事の嫌味の混じつた攻撃的な発言は止まらない。

「そもそも俺は被害者の妹の夫です。ましてやここは被害者家族の家なんです。俺たちの気持ちを分かつてそういう言い方をしてるんですか。それでも刑事ですか」

この時にはもう俺以外平山刑事に口を利ける人はいなくなつていた。

「ええ。刑事ですよ。なんなら警察手帳でもお見せしましょうか？ まあ話を戻しますけども、清水屋一族に

は代々受け継がれてきた莫大な遺産があることぐらいはご存じですよ。そこで本家の昂紀さんがいなくなればあゝ、あなたがそれを継ぐことになるのかな。豪くん？」

「昂紀は大切な妻の家族です。絶対に殺したりしません」

俺は鋭い目つきになって刑事の顔と紙一枚の距離まで近づき、睨むことを辞めなかった。

「どうだろう。昂紀さんを殺せて遺産が全て手に入ったら分け前を少しあげるとでも颯人くんと言っちゃったんじゃないのかな？ お父さん、事故で死んじゃったらしいね。やっぱり収入が大きく減ると厳しいでしょ」

「言ってますし、殺してません」

やってないことはやってないと言え、これは俺の父さんから教えられた言葉だ。本当に犯していない罪だからこそ、ここで簡単に頷くわけにはいかなかった。

「ほお。家族って面白いですね。豪くんも颯人くんも意地でも容疑を認めないんですね。まあ今はあなたに対する証拠はあがっていないんで今日はここらで失礼しますけど、くれぐれも清水屋の名を汚さないよう気を付けてくださいね。では。佐藤、行くぞ」

「はい」

平山刑事は好き放題言うだけ言って家を後にした。兄より少し喧嘩っ早い性格が今回だけは吉と出たようで、

この時俺は佐藤刑事と戦わなければいけないことを覚悟し、意思を強く持った。間違はなく今が人生最大の危機である。山田家、清水屋家の両家が崩壊しないためにも俺がこの事件を解決しなければならない。俺は振り返って土下座をした。これは謝りの土下座ではない。お願いの土下座であった。

「お父さん、お母さん、遥香、時間をください。今俺の兄が疑われている中、どういう態度をとればいいかわかりません。が、兄は、颯人は人を殺すようなことをしません。俺もどんな動機があろうとも人を殺すようなことは絶対にしません。昂紀さんが亡くなってしまつてこんなことを言える立場にありませんが、俺は兄の無実を信じます。真犯人は別にいます。なのでお願いです。俺に山田家の冤罪を証明させてください」

人生二度目の土下座であつた。

「もういいよ」

遥香の冷たくかすかな一言を聞き俺は頭を上げた。その後家族全員が無言のまま部屋の奥へと消えていった。家族なのに家族ではないような孤独を味わうのは初めてであつた。

「そうだよな、血の繋がりのないやつに愛情なんて注げないわな。俺は苗字だけ借りて清水屋家とは家族じゃないんだ」

誰にも聞こえないくらいの小さく情けない声が涙とともに零れ落ちた。

俯いた頭はなかなか上げることができず目だけを使って家の様子をうかがっていると、禁煙をしていたはずの遥香のお父さんが煙草に手を伸ばしていたのが見えた。まずは事情を把握しなければならない。俺は一度玄関から外に出て小声で兄との面会の予約を入れ、部屋に戻ってからは自分の部屋でそれに向けた準備をしていた。

「何してるの？」

遥香の無機質な声がした。

「兄ちゃんに会ってこようと思って。あまりにも情報が少なすぎるから」

自分が思っていた以上に暗い声しか出なかった。

「もういいよ。そんなことしなくて」

いつもの優しい笑顔を失った遥香の表情はどこか暗く、妻から殺気のようなものを感じたのは初めてであった。

「でも、俺は無実を証明したいんだ。絶対に兄ちゃんは人を殺さないから」

「なんで絶対って言いきれんの？」

とうとう遥香の心もやられてしまったのか、部屋の入口に立ち尽くしたまま不気味に笑って会話を続けてき

た。

「遥香は昂紀が人を殺すような人だと思うか？ 思わないだろう？ それと同じだよ」

「でももう証拠まで挙がってるんだよ。私だって信じたくないけど、もう無理があるよ」

「あの刑事のことだ。どうせ雑な捜査をしたにきまつてる」

「そんなこと言ったって検査はちゃんと入念に行われたじゃない。私たちもその検査とかいろいろ受けたですよ？」

「それはそうだけど……」

お互いに違う意味を持つため息の混じった会話は終わりを迎えようとしなかった。

「もう私は正直颯人さんが犯人でもいいの。颯人さんが犯人じゃないならだれが犯人って言うのよ。兄さんは誰に殺されたっていうのよ。この恨みは誰にぶつければいいっていうのよ」

そこにいる遥香はいつもの遥香ではなかった。誰だって同じ状況に遭遇したらこうなってしまうだろう。俺の心も徐々に狂い始めていたが平静を取り戻そうと大きく息を吸い、手に持っていた油性ペンのふたを閉めて遥香に向き合った。

「じゃあ俺の兄ちゃんが無実なのに独房にぶちこまれることには目をつぶれて言うのかよ。俺はこのやり場

のない気持ちをどこに投げればいいんだよ」

「やり場のない気持ちを誤魔化すために探偵ごっこでもしようとしてるんですよ」

「違うよ」

「これ以上傷つけないでよ。真犯人が見つかったとしても兄さんは蘇えりはしないの。大切な家族だったのに」

「遥香！」

「……」

人生で初めての夫婦喧嘩がこんなにも醜いものだとは思わなかった。

「颯人は確かに今容疑者だ。でもそれより前に俺の大切な家族なんだ。俺は遥香を傷つけない。けど、無実の可能性がまだ残っている兄を見捨てるわけにもいかない。遥香が本当に兄さんのことを大切に思っているのなら俺の気持ちも分かってくれよな。だから俺は最後まで兄ちゃんを信じる。ただ、本当に兄ちゃんが犯人だった場合、俺は清水屋家を去るよ。それくらいの覚悟はできてるつもりだから」

兄ちゃんとの面会に同伴してくれる人はいるはずもなく、俺は一人で面会に向かった。刑事ドラマで見た通り、アクリルの壁で仕切られた小さい部屋に颯人と一人の刑務官が入室して面会が始まった。そうとう酷い仕

打ちを受けたのだろうか、兄ちゃんは体力の限界を訴えるかのように俯きながら着席し、挨拶を交わす余裕すら失っていた。

「兄ちゃん、俺が分かるか。豪だ」

「……おう」

兄ちゃんがやつと顔を上げた。被害者が俺の妻の兄だからかどんな顔をすればいいのか分からなくなっているのだろう。ここまでは予想通りであった。事前に調べたことによると面会時間は十五分から二十分。プライベートルームな話は特に問題ないが事件に関係する話は全てメモを取られるらしい。そして内容によっては面会を中止させられることもあるとのこと。

「兄ちゃん、ちゃんとご飯食わせてもらってるか？」

と声にしながら俺は家で制作したB5サイズの紙を鞆から取り出してガラス越しに兄ちゃんに見せた。

『兄ちゃんは殺人なんてしない。でも情報が足りなすぎる。真犯人を俺が見つかるから質問に答えて』

兄ちゃんの顔がほんの僅かに明るくなった。

「その様子だとあんまり寝れてないのか？」

『犯人に心当たりはあるか？ グー…〇 パー…×』

兄ちゃんは黙ったまま罎の質問紙を見て手をパーにした。

「ちよつとは寝たほうがよさそうに見えるけどなあ。このままだとストレスで老けていっちゃいそうだな」

『何か専門的、或いは特徴的な検査や鑑定をうけたか？　グー…○　パー…×』

兄ちゃんは無言を貫いたまま手をパーにしたが、それが一番意外な回答であった。この次に提示しようとしていた検査の種類を聞きだす紙のカードが全て無駄になってしまった。

「ところで部屋から外の景色は見えるのか？　ずっと光が当たらないのもしんどいもんだよね」

『平山和樹刑事を知ってるか　グー…知ってる　チョキ…知ってるかも　パー…さっぱり』

兄ちゃんは手をアピールするかのようにしっかりと握ってきた。その様子を見て俺は数回首を縦に振り次の質問に移った。今度はわざとらしくならない程度に明るい声を心がけて話してみた。

「せーつかく顔見に来てやってるんだからちよつとくらいは返事してくれよなあ」

『死因や自分が逮捕される理由、証拠を知ってる。聞かされている。グー…○　パー…×』

兄ちゃんは書記の刑務官の様子をうかがいながら手をチョキにした。俺は紙に書いた死因の文字を指さすと兄ちゃんは指で小さくバツ印を作り、証拠を指すと手をチョキにした。その後すぐに兄ちゃんは何かを親指と人差し指で摘み取るようなジェスチャーを右手で見せてきた。その意味をすぐには理解できなかったものの俺は

オーケーサインを返し話しながら次の紙を見せた。

「また近いうちに兄ちゃんに会いに来てもいいか？」

『警察に捕まったのはグー…市内 チョキ…市外 パー…県外』

今度は少し考えたうえで手をグーに握り、その後ナイフとフォークで何かを切るジェスチャーを見せた。どこかの飲食店が最後だったのだろう。最後の質問紙を見せながら俺はまた話をつづけた。

「次来た時には何か喋ってほしいなあ。まあそんな精神状態じゃないのも分かるけどさ。俺はいつまでも兄ちゃんの味方だからな」

『何か殺人事件当時のアリバイはあるか？ グー…ある パー…ない』

兄ちゃんは手を固く握り、二秒後には手をしっかりと広げ、この動作を四回ほど繰り返した。アリバイはあるけどない。今回のこの一回の面会だけである程度聞きたい情報を得ることができた。最後に兄ちゃんに向けて親指を立てると兄ちゃんは頼んだぞと言わんばかりにうなずき返してくれた。

「すみません、今日の面会はまだ結構です。またお邪魔しますね。兄のことよろしくお願いします」

そう刑務官に報告し面会を終了させ、俺はロビーに設置された白い硬いソファーに腰を下ろし壁に背をつけた。謎は大きく分けて二つ。兄ちゃんは何か検査を受けたわけでもないのに証拠があると行って逮捕されてし

まったこと。そしてアリバイがあるのにないと伝えてくれたこと。証拠の話の時に見せていたあの右手の動きはきつと何かを拾い上げたというジェスチャー、押収できるものが証拠になったととりあえず考えることにしよう。現場に免許書でも落としたのならわかるが検査もないのに本人を特定できたということは少々不思議である。まともな捜査もせずに逮捕する点、兵庫県警の捜査のがさつさを疑ってしまう。平山刑事は点数稼ぎに必死なのだろうか、それとも犯人に警察関係者が関わっているのだろうか。なんとしてでもこの問題を解決しないとイケない。本当ならばアリバイを提出することが冤罪の証明においては一番手っ取り早い、兄ちゃんにはアリバイに関してあいまいな様子を見せていた。兵庫県まで来ていてアリバイがないというのはどうということなのだろうか。それともアリバイを探られるとまずいことでもあるのだろうか。市内のレストランを片っ端からあたって防犯カメラの映像を確認しに行こうと立ち上がった丁度その時、一人の刑事の声がした。

「頑張っちゃってますねえ。久しぶりのお兄さんは元氣そうにしていますかあ？」

振り向かなくてもそれが誰であるかは容易に分かったが、自分の闘志を燃やすためにあの憎い顔を拝むことにした。

「誰のせいでこうなってると思っているんです」

「それはあなたのお兄さんのせいでしょう。容疑者なんだから」

平山刑事は今日も本調子のようにである。

「告白してくれば罪を軽くしてあげてもいいんですけど」

「俺の兄は絶対に無実です。自白なんかさせません」

「いつまでもそうやって吠えてなさいな」

「一つ聞きたいことがある。兄を逮捕した証拠は何だ。証拠は」

俺は自分の天敵の出現にドバドバとアドレナリンがでてきたようで、俺にも戦うエネルギーが湧いてきたことを一人で感じていた。

「目上の人に何かを尋ねる時にはそれ相応の態度つてものがあるんじゃないかって？」

俺は少し冷静になつて深く頭を下げた。恥や屈辱という概念の無い世界に俺はいた。

「兄は無実だと信じています。逮捕に至つた理由を教えてください」

誠意をもつた発言は無慈悲にも無意味に終わつてしまった。

「ま、教えないんだけど」

殺したいくらいに嫌な刑事である。

「教えないっていうより教える理由がない」

「俺は容疑者の弟で被害者の妹の旦那です。誰よりも関係者ですし真相を知る必要があります」

「豪くん、頭を下げてくださいからと言って何でも願いが叶うと思ったら大間違いですよ。そんなことで願いが叶うなら私は山田颯人さんに自白してくれと頭を下げますね」

「もういいです。失礼します」

これ以上相手をしているだけ時間の無駄である。正式に対等に話し合うためにも俺は弁護士を雇うことにした。



Hirayama chief

第九話 鑑定

「さてお待たせいたしました。豪さん、いろいろと面白い調査結果が出たのですがどこからお話ししましょうか」

俺は近くの個室カフェ店にて若い女性と対面して座っていた。こんなところを遥香に見られてしまったら何と言われるだろう。その女性は遥香より少し身長が高く、肩先までかかった美しい黒髪は身にまとった白い服の上で綺麗なコントラストをつけていた。名は関根朱里と言って埼玉県入間郡に事務所を構える自称弁護士だという。どちらかといえば女子高生探偵のような顔つきで、ハキハキと受け答えをしている彼女は若々しさを隠しきれておらず、正直なところ頼りなさとはまた少し違った種類の不安を感じている。

「今、私のこと高校生探偵みたいだと思いました？」

「なっ、なんでそれを」

「焦点が定まっていなかったのでそうかなと。初対面の人にはよく言われるんですよ、頼りなさそうって」

「そ、そうなんですわね」

バケモノ級の観察力は事件解決の役に立つかもしれないと、一瞬にしてさっき感じた不安が消し飛ばされた。

「まあ実際弁護士になったのは最近で、ちょっと前まで高校生探偵だったんですけどね」

「俺より年上なのに、時空が歪んでいるんですね」

「あらお口が達者なんですわね。君がイケメンじゃなかったら帰ってましたよ」

「そんなにカッコよく見えますか？」

「ええ。寝癖がついてなければですけど」

そう言われて俺は反射的に自分の頭を手で押さえていた。それに気づいた俺は誤魔化すように頭を数回掻いて話を続けた。

「それはそれがあります。では単刀直入に。犯人は兄なのでしょいか」

「いえ、まだそれは分かりません。けれど気になる点はアリバイがあるように見えて無い点なんです」

「あるように見えて無い？」

「ええ。どのようにしてこの街に入ってきたかが分からないんです」

「それはどういう？」

「確認したところ警察に連行された時、どうやら市内のクックルドアンという飲食店にいたようなんです。ただその時一人の女性の人と一緒に」

「女性？」

「ええ。小柄な方だったんですけどまだ特定までは至っていないくて。これまでの動きを辿ればどういう経路で誰とこの街にきているかが分かんと思うんですけど、港町の方に行ったところから防犯カメラはなくなっていて特定できませんでした」

「そっか。だとしたら船から来たっていう可能性はありませんか」

「私もそう思っただけに港に発着している船を一つ一つあたって乗客名簿を確認させてもらったんですけど、どうやら名前が載っていないくて。颯人さんは突如この街に現れているんですね。でも、一緒にいたその女性も同じように港の方から急に現れているので彼女が何かしらの関わりをもっていることには間違いないかと思ひます」

「なるほど。その彼女はクックルドアンに居た時はどんな態度をとっていたんですか？」

「防犯カメラの映像の片隅に映っていたもので鮮明には確認できませんでしたが、それでもお兄さんの彼女のような振舞い方をしていて、警察に連れていかれた時には泣き崩れていたみたいです」

「んー……」

「どうかされましたか？」

「いえ、兄から女性関係の話は一度も聞かされていなかったなのでその女性がどういう人だったのが少し気になって。美人局に巻き込まれたのかとか考えたんですけどその女性が本当に泣き崩れていたのなら辻褄が合わなくなりますよね。それで、その彼女は兄が連れていかれた後どうなったんです？」

「その場でクックルドアンの机を借りて警察からいろいろ事情聴取か何かを受けていたみたいです。その後は解放されたみたいなんですけど」

「じゃあ、その女の人を追って話を聞くのが一番早そうですね」

「いや、それはあまりよくない選択かなと私は思います」

「なんでです？」

「お兄さんはアリバイがあるようで無いと曖昧な反応をみせていたんですよ。普通解放されたかったらいち早くアリバイを探せというはずです。もしその女性の方とずっと一緒にいたのであればその女性に話を聞けつて言うと思うんです。それでも言うてこなかったつてことは、その女性が何かしら良くない方に繋がっている可能性があると考えてもおかしくはないのかなと思います」

「なるほど」

「それと、遥香さんのお兄さんが殺害された事件についても調べてみました。兄の昂紀さんはどうやらタクシ

ーで六甲山まで連れていかれた後、そのまま山に捨てられていたようなんです」

「えっ、じゃあ車の中で殺されている可能性が高いんじゃない。そのタクシーの持ち主を調べれば早いじゃないですか」

「タクシー自体は東京都江戸川区周辺を普段巡っている范珈鳴ふかぬいめいというタクシードライバーのもので間違いないようなのですが」

「日本の人じゃないんですね」

「ええ、確か香港生まれで学生の頃から日本にずっと住んでたみたいで、本名は何て発音するんだったかな」

「本名？ 偽名を使っているってことですか？」

「いや、日本では日本人が呼びやすい発音を名前にしているってだけなんですけど、まあそこはあまり大きな問題じゃないからそんな感じのイメージで大丈夫です」

「じゃあその珈鳴って人が犯人ってことですよね」

「いえ、それが盗難車だったようで。事件発生以前に盗難届が受理済みだったので警察はそのドライバーを捕まえなかったみたいです」

「じゃあ何者かがタクシーを盗んで……ってことを考えるとかなり計画的な犯行になるんですかね」

「そうなんですよ。それですごく最悪なことに、そのタクシーをジャックしたのが颯人さんじゃないかと警察は見ているのだと思います」

「そっか。どこから現れたか分からない兄は盗難車によって県外からやってきたと考えられているんですね」

「ええ、おそらく」

「これじゃあお手上げですね」

ここまで調べても兄が無実である決定的な証拠が出てこないとなると俺の自信も少しずつなくなっていったまう。

「ちなみに一つ聞きたいことがあるんですけど、颯人さんは検査を受けていないって言っていましたよね？」

「はい」

「でも豪さんは検査を受けたんですよね？」

「はい」

「その時他に誰が検査を受けていたかって覚えてますか？」

「えっと、検査って言っても持ち物検査と家宅搜索と、あと口の中に綿棒つまれたくらいですけど、清水

屋家の人は親戚も含めて全員していました」

「なるほど。その時警察の人って何か言っていましたか？」

「いえ。とりあえず後日って言われて、次家に警察が来た時は兄が犯人と言われましたね」

「そうだったんですね。ご両親とかは？」

「父はもう他界したんですけど、母は東京都中央区の家で暮らしています」

「なるほど、分かりました。また何か進展があつたら連絡します」

「あの、俺にできることは何かありますか」

「豪さんはゆっくり休んでいてください。って言ってもなかなか休まらないでしょうけど」

そう言ってお会計を済ませ、俺は帰りたくない他人の家に帰ることになった。家に入ってもいつものような温かい出迎えは無く、気付けは夕食にも呼ばれなくなってしまった。それから二日後、生活サイクルも食生活も徐々に狂い始め、昼間から死体のように自室で寝ていた俺は関根さんからの着信によって叩き起こされた。彼女の話聞いてまず驚いたことはこの二日間で俺の実家まで足を運んでいたことだ。言ってくれば俺も行ったのと思うながら、前回とは違う個室の居酒屋でお話することになった。席に着くとともに関根さんはアルコールメニューを手にしてオーダー用タブレットにビールを入力していた。

「お、お酒飲むんですか」

「たまにはいいかなと思ひまして。豪さんも良ければどうですか」

俺はあまりお酒に強いわけではないがお誘いを断るわけにもいかなかったので同じビールを一杯注文した。もちろん今日も遥香には内緒で来ている。関根さんと季節の話をしていると塩味のぼんじり串が卓に届き、一本ずつ手にして話を続けることになった。以前とは違って関根さんはなかなか事件のことを話し出そうとしなかった。なので今回は俺から話を振ってみることにした。

「それで、実家に行って何か新しいこと掴めました？ 言ってくれば実家まで案内しましたのに」

「すみません、捜査に夢中になっていて。颯人さん、お母さんと一緒に住んでいたんですね」

「ええ。俺が早々に家を出て行っちゃったことがまずかったですけど、父が死んで息子二人が家を出ていくと母が一人ぼっちになっちゃうって兄はずっと気にしてて。それでとりあえず兄は自分が結婚するまでは母親と一緒に住むって言ってたんですよ。そうだ、母に聞けば兄のアリバイも証明できるんじゃないや……」

「はい。私もそう思って東京まで行ってきたんですけど」

「けど……？」

「お兄さん、船旅に行くって言って家を出て行ったみたいなんです」

「船旅？」

そう言つて関根さんはジョッキ一杯のビールを早々に飲み干して、日本酒を二合タブレットに打ち込んだ。
た。

「沖繩に行くつて言つて出て行つたらしいです」

「沖繩？」

「お母様も同じ反応をしていらつしやいましたよ。だから兵庫で捕まつたつて聞いて混乱されていました」

「母に話したんですか？ 兄が捕まつたこと」

「ええ。話すつもりで行つたんですけど、事前に警察から連絡があつたみたいで最初から知つておられましたよ」

「そうなんですね。それで母はなんて？」

「ちよつとバタバタして大変だったけどこっちは大丈夫だよ、とはおつしやっていましたよ」

「バタバタ？」

「家中漁られたらしいです。検査とかは受けてないようでしたけど」

「そうなんですね。まさかそれつて平山刑事ですか？」

「いえ、山崎警部という東京の刑事さんだったみたいです」

「さすがにそうですよね」

「ちなみに警察が家に来たのは最初に清水屋家に兵庫県警が来た日の午後だったようです。あと、お母様の親戚家族のところまで捜査の手が伸びたらしいですよ。家まで入ってきて昔の手紙を押収されたらしいですけれど。筆跡鑑定でもするんですかね」

「それ、本当ですか。清水屋家からも母から届いた手紙を封筒ごと押収されたんですけれど……。でもやっぱり素人には何も分かりませんね」

「いや、それがそうでもないんです」

「それはどういう意味です？」

「もしまた面会できる機会があるならば、ちよつと颯人さんに聞いてほしいことがあって」

「じゃあ丁度いいかもしれません。関根さんがこんなにも早く来てくれるとは思っていなかったのと言ってなかつたんですけど、実は明日面会の予定を入れてるんですよね」

「本当ですか。見当違いだったら申し訳ないんですけれどね、これから言う質問をしてほしくて……」

そう言つて俺の徳利に日本酒をなみなみ注いで渡してきた。関根さんのことを高校生探偵みたいだといった自

分の発言を今すぐにでも撤回したいと思った。俺も相当酔いが回り始めていたようで、関根さんの飛躍しすぎた話もすんなりと聞き入っていた。

「……どこからそんな情報持ってきたんですか」

「元探偵を舐めないでちょうだいね？」

「これ、当たってたらなんていうかアッパレですよ。探偵も弁護士もまさに天職ですね」

「ありがとう。なりたくてなったわけじゃないんだけどね」

関根さんの表情が一瞬曇った。

「じゃあなんで？」

関根さんが両手を椅子について優しい声で話し始めた。

「あれは私が高校生だったの時のこと、当時付き合っていた三つ上の先輩が車の免許を取って買ったばかりの中古の軽自動車によくドライブに連れて行ってくれてたんです。しばらく彼と連絡が取れない時期があつて、ある日警察から連絡があつたんです。彼氏さんが轢き逃げを起こしましたと。彼のもとに面会に行っても何も話してくれないし、もう信じられなくて信じられなくて。真犯人を捕まえてやるつてがむしやらに捜査の真似事をしてたんです」

「でも何で真犯人がいるって思ったんです？」

「彼不用心で面倒くさがりなところがあつて車の中に鍵を置いてたんですよ。盗難に気づく前に警察が来たので届も出せないままそのまま連行されたんですよ。お前の車が勝手に動いて人を轢くわけないだろうって」

「なるほど。それで真犯人を見事捕まえて探偵になったとか？」

「いいえ、結局真犯人は捕まえられなかったんですよ。けど彼の冤罪は晴らせたんですよ」

「それってどうやって？」

「彼のアリバイを証明したんですよ」

「それだったら彼がアリバイを言っていればよかったことだったんじゃない？」

「彼は私に内緒でナイトクラブに行つてたんですよ。だから言い出せなかったのになつて」

「轢き逃げの冤罪より浮気の方が彼にとつては重罪だったんですよ」

「バカな人でしょ？」

「それで探偵になつちやうのもなかなかですけどね」

「探偵になれば浮気癖も消えるかなつて思つて」

「あなたに頼んで正解でしたよ。どこよりも安く依頼を受けますなんて逆打診された時には不安でいっぱい

したけど」

「正直なんですね」

「関根さんが心の内を明かしてくれたからですよ」

「知りすぎると息を吸えなくなりますよ。その前にもう一杯」

彼女は赤ワインを二つ注文し、俺は少し残った日本酒を一気に飲み干した。さて居酒屋の個室で瞬きをしたら朝になっていたのだが、俺は白を基調とした明るいホテルの部屋のベッドで横になっていた。

「しんど。俺いつの間にホテルなんか……飲みすぎたか。それより俺、何時間寝てんだ？」

俺の独り言に反応した女性の声は他の誰のものでもなく関根さんのものだった。

「十時間くらいかな？　昨日のことちゃんと覚えてます？」

「えっ、ええまあ。あの、これはどういう？」

「豪さん、昨日潰れちゃったから。ホテルに運び込んだのよ」

「えっと、関根さんは？」

「私はそのソファで寝たわ。それより今日何の日かちゃんと分かっていますか？」
なんとなく、少しだけ関根さんと距離が近くなった気がした。

「はい、えっと、兄との面会です」

「これ、聞いてほしい内容を紙に書いておいたからまた見せながらお兄さんと話してきて」

「あ、ありがとうございます」

「えっと、関根さんは同席しないんですか？」

「ええ。弁護士が動き出したなんて言ったら警察も何してくるかわからないし、下手に不利益を被るよりはいいでしょ？ この事件に警察が関わっていないとも言いきれないし」

「そうですね」

「私はちよつと調べたいことがあるのでまた面会が終わったくらいに連絡してもらってもいいですか？」

「分かりました」

関根さんは足早に部屋を出て行ってしまった。何もなかったとはいえ妻に内緒でこんなことをしているなんて少し後ろめたい気持ちもある。けれど最初にカフェで密会した時に比べて罪悪感は減っていて、正義を貫いていた人間でも一度罪を犯すとそれに慣れてしまうのかなとふと怖いことを考えてしまった。面会に行くとなるとまたあの平山刑事に会うのだらうと身構えていたが、今日は平山刑事の姿を見かけなかった。

「清水屋さん、こちらへ」

そう声をかけてくれたのはいつも平山刑事の横にいる佐藤刑事だった。面会室に入るとまた見知らぬ刑務官が書記として一緒に入ってきて前回と同じスタイルの情報収集会が始まった。

「兄ちゃん久しぶり。元気してた？」

『石橋河大という男を知っていますか？ グー…知ってる パー…知らない』

兄ちゃんは質問紙をみるなり拳を強く握りしめて

「俺が元気に見えるかい？」

と声に出しながらブンブンと首を振って頷いていた。どうやら関根さんの読みは当たっていたようだった。鋭すぎる元女子高生探偵である。

「やっぱりそこの生活は辛いよな？」

『東京から沖縄に行く予定だったけど何故か兵庫に来た グー…はい パー…いいえ』

「まあな。誰も何も話を聞いてくれないし、俺にとってもかなり信じられないことが起きてるからな」

兄ちゃんの手は握りっぱなしだった。

「そうだよな」

ここまで深い質問をすると、兄ちゃんもかなり調べてくれたのかと驚いた様子でいた。

「ところで兄ちゃんって今彼女とかいたっけ？　いたら捕まってること教えてやらないと心配するなと思ってさ」

「何よ急に。いたら真っ先に報告してるって。すごくいい感じの子はいて数日デートしたんだけど俺がデート中に寝ちゃってさ。それから大胆に振られちゃったよ」

逮捕されていた時に一緒にいた女の正体について話しているということは、二人だけの暗黙の了解であった。

「兄ちゃんらしいな。で、何ていう子だったの？」

その質問には一瞬口をつぐんだが、少し目をそらしながら

「あ、、藍果だな。でももう忘れたいね、そんな話。思い出すとげっそりこけそうだよ」

「思い出さなくてももう十分こけるけどな。までも前回よりは元気そうだな」

「やっぱり最後まで諦めちゃだめだと思ってるね」

そう言った兄ちゃんの拳はしっかりと握りしめられていたのだが、俺はこの時、写真付きの最後の質問紙を兄ちゃんに見せていた。

『この人を知っている　グー…はい　パー…いいえ』

その様子をずっと見ていた俺は腕とおしりと背中と首に一瞬の寒気を感じて、手には無数の鳥肌が立って

た。関根さんの用意した質問に関根さんの予想通りの回答を返していることに非常に驚いたのだ。俺は前回同様兄ちゃんに親指を立ててまた来るよと言残し面会の終了を申し出た。部屋を出てロビーに行くとき佐藤刑事がさつきと同じところで暇そうに立っているのが見えた。いつもの佐藤刑事とはまるで別人のようで、猫背で片足重心のその立ち姿からは怠惰の二文字を感じる。平山刑事が横にいないだけでこうも力が抜けるのかと思ひ俺は話しかけていた。

「お疲れ様です。佐藤刑事ですよね」

「君は、誰だっけ」

「清水屋豪です。山田颯人の弟です」

「ああ、君か。今日は面会ですか」

さつき俺を案内したことすら忘れてるのだろうか、何か話を聞きだせるかもしれないと思った俺は少しずつ事件の話に踏み込むことにした。

「ええ。やっぱり兄が殺人をしているとは思えなくて」

「そうだよねえ。検査も省いて逮捕つてやっぱり納得いかないよね」

「もちろんですよ。それで、何で検査してくれないんですか」

「それが、平山さんがこの事件の捜査を任されているんですけどね、簡単に言えばこれまでの捜査にちよっとお金をかけすぎてしまったんですよ。そのせいでもうあんまり大胆な捜査をできなくなってしまつて困つてたんですけど、そんな時かなり決定的な証拠があがつてきたんです。犯人は山田颯人で間違いないだらうつてなつてからは、これ以上の捜査を終えて事件を処理しようつて方向性になつたんですよ」

「かなり決定的な証拠つてなんだつたんですか？」

「犯人が乗つていた車の話はご存じですか」

「ええ、軽くは知っています。盗難車のタクシーですよ」

「はい。その車内の灰皿に煙草の吸殻があつたんですけどそれが山田颯人のもので間違いないと鑑識の検証結果から出ているみたいなんです。それ以外のことはまだ共有されていないんですけど、不服ですよ」

「不服です」

「でも、誰も平山さんには逆らえなくて」

「そんなにすごい人なんですか、平山刑事つて」

「いえ、平山さんのお父様が警視総監で、何というかそれを武器にした圧力がすごくて」

「なるほど、苦勞しているんですね」

「間違つて煙草の吸殻から平山さんのDNAがゲットできれば良かったなーなんて思いますけどね」

たった数分しか話していないのに佐藤刑事からこんなにもブラックなジョークを聞くことになるとは思っていませんでした。

「あの、一つお願いしたいことがあるんですけど」

「僕にできることであればなんでもしますけど」

「兄の無罪の証明に一つ力を貸してもらえないでしょうか」

「それは少し厳しいかもしれませんが。証拠が何もないと……」

「証拠は作るんです」

「それはどういうことですか」

「そうですね。四作戦つてところですかね。近いうちに是非会ってほしい人がいるんですけれど、お休みとかってありませんか」

そう言つて俺は佐藤刑事と連絡先を交換し、後日関根さんと三人で会食をすることになった。今回ばかりはお酒で失敗をしないように俺がセティングをして高級イタリアン料理店に二人を招いたのだが、開始早々関根さんが白ワインを頼むとは思わなかった。トマトジュースでも飲むかと思つていたが関根さんにアルコール

メニューを渡されて仕方なく俺はメッシーナを注文した。その後すぐ佐藤刑事が堂々とトマトジュースを頼んだ時には一人盛大に後悔していた。

「遅くなりましたが、今日はお集まりいただきありがとうございます。こちらが関根朱里さん、弁護士です。そしてこちらが兵庫県警の佐藤……何さんでしたっけ」

「佐藤^{さとう}滋^じ恩^{おん}です」

「あ、そうだそうだ。すみません。えっと今日集まっていたのはご存じの通り、私の兄山田颯人の冤罪を晴らすために協力してほしいと、そういうことなんですけど」

「先に一つ水を差すようで悪いんだけど関根さん、今のこの状況だと真犯人とそれを見せるだけの証拠を代わりに上げないと颯人くんは解放されないと思うんですけれど」

「それに関しては大丈夫です。私の読みが当たっていれば犯人もそれにたる証拠も用意できます」

そう言った関根さんは勝算のある試合を訴えかけるような眼をしていて、その熱意にこたえようと佐藤刑事は真剣に話を聞くようになっていた。

「えっ、でもそれってかなりお金がかかりますよ」

「それに関しては俺が出します。もつとも弁護士を雇う費用に比べたら相当安いもんですよ」

ちよつと皮肉を交えたジョークに関根さんも佐藤刑事も笑っていた。

「それで実行日は？」

「ある程度準備期間が必要だとは思うので、一週間後とかでどうでしょう」

「分かりました。それでは来週の金曜日とかは空いてませんか。勤務中は僕もあまり勝手な動きは出来ないの
で、私が休みの時にあわせていただければ嬉しいんですけれど」

「なるほど」

「休みの日でも刑事は刑事ですし現行犯逮捕も可能ですので」

「分かりました。それでは来週の金曜日にしましょう」

「ありがとうございます」

「それと、同じく金曜日にお休みをとっている人で協力してくれそうな人ってあと数人いたりしませんか？
最低二人くらいは欲しいです。関東の署に勤務している人とかでもいいんですけれど……」

「あたってみますね。久菜警察学校時代に一緒だった小林刑事って人は多分空いていると思いますので、その
つても使つて数名呼んでみます。あと知り合いに柴田という臨床検査技師もいますので声をかけて見ます。き
つとお役立ちできると思いますので」

「お願いします」

「でも、いいんですか？　ここで真犯人の存在を証明するということは、ある意味平山刑事の顔に泥を塗ることになりますけれど」

「構いません。僕は警察にとって一番大切なことは真相を追求することだと思っていますので。僕は僕の正義を貫きます」

「分かりました。ありがとうございます。それでは関根さんは明日さっき言った人に手紙を送っていただけますか？」

「分かりました」

「佐藤刑事はさっき言ったアレの準備をお願いします。もちろんお金は後日きっちりと払いますので」

「分かりました。でも、上手くいきますかね。ちょっと不安なんですけど」

「大丈夫ですよ。ここまで証拠がそろえば動機も丸見えみたいなんです」

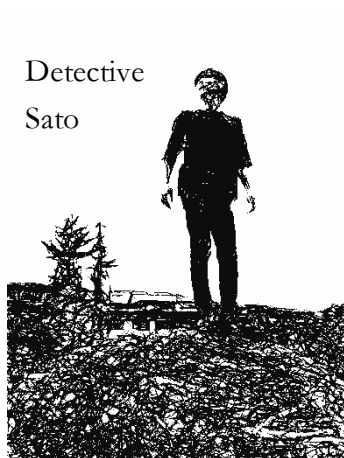
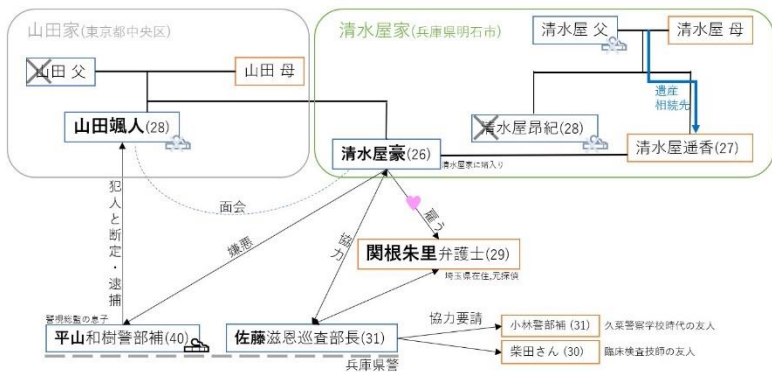
「俺、最終確認として兄ちゃんに話を聞きに行きたいんですけど、どこかのタイミングで面会って予約できますか？　できれば佐藤刑事に立ちあっていたきたいんですけど」

「面会の予約はできると思うけど、僕の立ち合いは厳しいかもしれないな。留置管理課っていうのがあって決

まりとしてその刑務官が立ち会うことになっているんですよ」

「そっか。分かりました。それでも会うだけ会ってきます」

そう言っただけはモレッティーを注文した。



第十話 愛した人の罪

オレンジ色の夕日を受けて焦げ茶色の家の柵は琥珀色に輝いている。柵の近くにはちよつと禿げた赤色の消火バケツが置いてあつて石の階段を二段上がったところに板チョココレートのような質感の大きな扉がある。クリーム色をした二階建てのこの家は紛れもなく俺の実家である。俺が家を出てからは兄ちゃんと母さんが暮らしている家で4LDKのこの家は一人だけが住むのには少し大きすぎる気もする。この家のインターホンは柔らかいポーンという音が三回鳴るのだが、基本郵便物が届く時か回覧板が回ってくる時くらいにしか鳴らない。家の向かい側には小学校の時から仲良くしていた岡田さんの家があり俺は彼女の家の駐車場にて白いワゴン車を借りていた。岡田さんは俺の初恋の相手で中学卒業以来全く連絡を取っておらず、自分の結婚式にすら招待していなかったため、今更になつて連絡を取り合うことには少し抵抗を感じていた。しかしそんなことを言っている暇もなくアポイントメントもなしでお邪魔し、半強制的に捜査に協力してもらうことになった。話は全て佐藤刑事がつけてくれたのだが、気まずさというものはいつまでたつても消えなかった。買ってきたサンシェードと車内カーテンを彼女のワゴン車の中に設置して外から中を見られないようにし、自宅に取り付けた盗聴器から部屋の中の音を盗み聞きするため後部座席で耳を澄ましていた。

ポオーン　ポオーン　ポオーン

お客様が来たようだ。母さんがスリッパを引きずりながら玄関先まで向かっていることがイヤホン越しにでもよく分かる。

「いらつしやい。あれ、今日はお一人？」

「いえ、後からあと二人来るとは思います」

「そっかそっか。じゃあそれまでお茶でも飲んで下さい。ケーキ買っておいたからよかったら食べて行つてよ」

「ありがとうございます」

「近くのコメッティってケーキ屋のショートケーキよ」

「あ、今日来る時に前を通ったかもしれません」

「裏道の方から来たんだね。ところで、最近いろいろ上手くやってるの？」

「そうですね。今はみんなそれぞれの場所でちゃんと働いていますよ」

「あらそう。それは良かったわ、よくやってるのね。こっちはもうバタバタよ。この前急に警察がやってきて
家宅捜査だって」

「あら、例の事件のことですね。それで何か検査とか受けさせられました？」

「いいえ、軽く家の中は漁られたけど私は何もされなかったわ」

「じゃあ、あんまりこういうことって言うもんじゃないかもしれないけれど、当分の間嶋人さんはこの家には
来ないんですね」

「そうねえしばらくの間嶋人は帰ってこないかなあ。なんだかこの家が広く感じちゃうわ。誰か家に同居して
くれないかなって思っちゃうくらい。沙羅ちゃん、一緒に住んじやう？ ……なんちゃってね」

「まったく、冗談ですか？」

「でも悪くないでしょ？」

「そうですね」

「ところで後二人、なかなか来ないわね」

「私ちよつと電話してきますね」

「分かったわ」

「じゃあちよっとお座敷お借りします」

そう言って彼女が座布団を引きずって立ち上がる音が聞こえた。座敷の部屋は玄関に一番近い部屋で昔からお客さんが来た時にはこの部屋を開放するようにしていた。一階にはリビングとダイニングキッチンと座敷の三つしか部屋がないため、もし彼女が電話をかけるとしたら座敷に行くだろうというところまでは読めていた。前もって座敷のコンセント裏にも盗聴器を仕掛けておいたのだが、足音は近づいてくるものの座敷の扉が開く音はしなかった。

「これってどういうことでしょうか」

一緒に車内にいた関根さんも困惑した様子であったが、シェードの隙間から家の玄関を覗くとそこには立って電話をしている女性の姿があった。

「外に出てたのかよ」

「でもドアの音はしなかったよ？」

「きつと開けっ放しにしていたんだろ？」

盗聴がばれたのだろうか。車のロックを解除していつでも降りられるように準備をしていた。俺は少し判断に迷ったが突入することを決めた。

「よし、行くぞ！」

「待つて！」

俺のゴーサインを強く遮って声を上げたのは関根さんだった。

「あれを見て」

真つ黒の車高の高い個人タクシーが勢いよくやってきて家の前で急に停車した。こちらから見えている方のドアは開く様子がなくタクシーから人が降りてくる瞬間は見えなかったものの、誰がこれから登場するのかは簡単に想像がついていた。ボタンと扉を閉める音が響いてタクシーがクリープ現象で動き出した時、いよいよその姿を拝むこととなった。そこには若い小柄の女性と、手に指輪を数個はめたオールバックの男性が現れた。

「関根さんの予想ってあたったことしかないですよね」

「あれが藍果ちゃんか。憎いね」

「クックルドアンの防犯カメラに映っていた女性で間違いないね」

彼女たちが家に入ってからもしばらくは車の中で盗聴を続けていたが、丁度お茶を飲んで一息ついたころを見計らって俺らは車を静かに降り、佐藤刑事を先頭に家の中に入ってしまった。リビングの扉を開けると予想通りの光景が広がっていて母を含む四人の人間が炬燵をかこっていた。

「兵庫県警の佐藤といいます。小川^{おがわ}沙羅^{さち}さん、石橋河大さん、大塚藍果さんですね。いや、あなたに関しては石橋藍果さんと言った方が良いでしょうか？ 清水屋昂紀さん殺害の容疑がかかっています。ご同行いただいてもよろしいでしょうか」

そう佐藤刑事が言った直後、小川沙羅が牙をむいた。

「急に人の家に上がり込んで何ですか。警察手帳も見せずに私服の人にそんなこと言われても納得できませんね」

「本来警察手帳の提示義務ってのはないのでね。まあどうしてもというなら見せても構いませんけれど。藍果さん、あなたとは以前一度お会いしたことがあると思うんですけどもうお忘れですか」

「あらそうでしたっけ。今日は勤務日でもないのにわざわざお越しいただいたんですね。その様子だと令状も逮捕状も取れてなかったか、或いはこれ以上の捜査を止められているか。そんなところでしょいか？ どちらにせよとりあえず今日はお引き取りいただけますか？ これ以上ここにいますようでしたら……そうですね、兵庫県警の平山刑事にでも通報しますけれど」

「お好きになさってください。おっしゃる通り令状も逮捕状ありません。なので任意ではありませんけれども捜査に協力してほしいと言っているんです」

「協力も何もその事件は犯人も見つかってとづくに解決しているんでしょ」

「あら、そんなニュース新聞でもほんの片隅くらいにしか書かれていないのによく知っているんですね。新聞は結構入念に読まれるタイプなんですか？」

関根さんが少し嫌な言い方をして揺すって見たが大きな反応はなかった。

「どうでもいいでしょう、そんなこと。とにかく私たちは捜査に協力しません」

「僕は何もあなた方三人には言っておりません。お母様に対して言っているんです」

そう言つて佐藤刑事は俺の母さんに話しかけると、母さんは誰とも目を合わせず俯きながら構いませんと小さく頷いた。その頷きを合図に、佐藤刑事の呼び掛けた休日警官仲間が一斉に部屋に入ってきた。リビングの大きな窓から外を軽く覗いてみるとそこにはトヨタの白いクラウンが二台と水色のクラウンが二台停まっただけで家の前を封鎖していた。アンテナからして普段覆面パトカーとして使われているものだろう。俺は三人が飲んだお茶のコップとケーキのお皿、フォークをダイニングへ持っていく検査キットを準備している柴田さんにバトンタッチをした。そうしてリビングへ戻った俺は全員に向けてゆっくりと話し始めた。

「いやあそれにしてもビックリしました。こんなにも壮大で練りに練られた犯罪に巻き込まれるなんて思つていませんでしたから。どこから話せばいいかまだ俺も迷つてるくらいです」

パソコンの前に置かれたグレーの椅子に腰を掛けて手を組み、一呼吸おいてまた話し始めた。

「何度か兄さんと話をしてきました。沙羅さんはとかくお二人はよく知っている人物でしょう。颯人です。どうやら船の上でいろいろあったようですね。あ、すみません申し遅れました。私、山田颯人の弟の山田豪です。今は結婚して清水屋豪ですけど、それくらいはもう全員知っていることですよね。面会というのはなかなか不便なものでしてね、事件に関わりのありそうなことはすべて調書を取られるんですよ。なんなら警察にだって都合が悪くなると話すのを止められることがあるんですよ。なぜか強引にも兄が逮捕されてしまうのでこの事件には警察が絡んでいるんだとばかり思っていました。最初の方は捜査にかなり手こずりましたよ。ドラマの考察とかでもよくある警察黒幕説っていうやつですかね。でもそんなこと現実ではなかなか起きないんですよ。今回はどうやら違ったようです。組織内でのいざこざやパワーバランス問題みたいなのが絡んで捜査が上手くできなかっただけでした。そもそも一見関係のないように見える三人が見事にこの家に収まっていること自体が事件解決の何よりの証拠ではあると思うんですけど、それでもまだ何も話す気にはなりませんか？」

「どういう経緯で私たちが犯人扱いされることになったのかは分かりませんが清水屋家の長男が殺されたことに関しては証拠とともに容疑者があがっているんですよ。それにさっきも言いましたけど令状があるわけ

でもない。今日はお引き取りください」

「そうですね。あがつている証拠だけを見れば俺も兄さんが犯人だと思います。それでも兄は人を殺すようなことをしませんし動機もない。なので再調査をこうして行っているんです」

「動機がないのは私たちも一緒ですよ。ましてや兵庫県のある一族の長男をピンポイントで狙う理由が全くない。推理劇に付き合ってる暇なんてないので帰ってください」

「推理劇にいたくないから捜査協力を求めているだけの話です。その結果本当にあなたたちに罪がないのなら帰ります。ただそんなことにはならないでしょう。あなた方四人にはそれぞれ自分の罪を認めてもらいたいと思っています。それまで推理劇にでも付き合ってください。あなたたちの動機は最初から最後まで変わまりません。山田颯人を犯人にすること、ただそれだけです。兄さんは面会中こんなことを言っていました。なぜか毎回俺が疑われる状況になるって。まるで水平思考ゲームをやっているようでした。河大さんと藍果さんは兄さんと同じ沖縄行きの船に乗っていたんですよ。話によればその船の中では大量に死人が出たとも聞きました。兄さんは後半ずっと監禁されていたようでしたけど、『河大さんと同先客の学生が犯人として警察に引き渡されたことを藍果さんから聞かされた』と言っていました。船が着いたのが兵庫県なので本当だったら兵庫県警に引き渡されているはずですけど……佐藤刑事」

「兵庫県警では石橋河大という名の人は逮捕していません」

「というわけです。まあ石橋河大さんは目の前にいるのであたりまえですけどね。あなたたちの本来の目的は船の上で起こった全ての殺人事件の罪を兄さんに擦り付けることだった。それさえできていれば昂紀さんを殺さなくて良かったかもしれない。でも一つトラブルが起きてしまった。河大さんが船内殺人事件に関わっていることが他の乗客にバレてしまった。殺人をしているところ、或いは殺人犯であるという決定的瞬間を他の人に抑えられたんですよ」

「そんなの話が飛躍しすぎてますよ。ただの想像ですよね」

「ええ、推理劇にお付き合いくださいと言いましたよね。推理にすぎませんので特に疚しいことが何もないのであればひび楽しんで聞いてください」

「そもそも、あなたは知らないかもしれないですけど他にも生き残っている乗客は何人もいました」

「その真偽はともかく、今の発言は殺人が起きた船に乗り合わせていたことを裏付ける自供ととらえて良いですね」

藍果の必死の抵抗も無駄に終わり三人は言葉に詰まった。

「そして船内殺人事件犯人擦り付け計画が失敗となつてからは作戦を変更することを余儀なくされて、この船

に唯一乗っていなかった沙羅さんに急いで連絡を取ることにした。おそらく一瞬船を陸地に近づけて電波を受信したんでしょね。そこで今度は山田颯人を海の上で監禁している間に彼を犯人とする嘘の事件をでっちあげることにした。それが清水屋昂紀殺人事件です。そうすればアリバイが完璧にない男に罪を擦り付けられると見込んだでしょう。連絡を受けた沙羅さんは慌てて東京彫外学院大学前に駐車させてあったタクシーを盗み兵庫県の清水屋家近辺まで運転、その後駅から帰宅する昂紀さんを狙って声をかけ、車の中に乗せてからピアノ線を使って絞殺した。既に盗難車が県を跨いで移動していることは小林刑事に記録を取ってもらっています。ターゲットを昂紀さんにしたのは、兄さんと事件の関連性を重視したためでしょう。そして山にタクシーごと乗り捨て、自分は別のタクシーを捕まえて東京まで逃走。防犯カメラには自分の移動記録を残さずに関東と関西を往復することに成功した。とりあえずこれが事件の全貌ですかね」

「今の話で小説でも作るといいわ。きっと売れると思うよ。けれど今ある証拠を覆すような話でもなければ、動機も曖昧すぎるのではなくって？」

犯人扱いされた沙羅が冷静にそう述べてきた。

「そうですね。事件の証拠として挙げたのは乗り捨てられたタクシーの灰皿にあったマイルドエイトの吸い殻でした。小林刑事」

「はい、至急タクシーの持ち主である范珈鳴さんに車を確認してもらったところ、車は本人のもので間違いないと言っていました。が煙草に関して『俺はいつもアフリカンスピリッツを吸うから絶対に違う』と否定をしていました。もちろん重要参考人としてDNA鑑定にも協力してもらいましたが本当に彼のものではありませんでした」

「ありがとうございます。そうするとあの吸殻は清水屋昂紀殺害事件の犯人のものであるとしかいいようがなくなります。ここまでは俺も警察も考えていることは全く同じでした。一つ引かなかった点を挙げるとするならば、なぜ殺人を犯す人があんなにも大胆で分かりやすい証拠を残していくのだろうかということです。俺が犯人でも煙草の吸殻くらい隠そうとします。でも煙草の吸殻はまるで山田颯人が犯人ですと言わんばかりの残され方をしていた。……さてここから先は山田颯人が殺人犯だとなぜ警察が断定したかです。それには母さんが俺に送った一通の手紙が関係してきます。まさかそんなことを調べられているとは思いませんでしたが、母さんの送った手紙の封筒にくっついていた切手の裏の唾液のDNAと煙草の吸殻のフィルター部分についていた唾液のDNAが五十パーセント一致していたようです。どうやら兵庫県警は母さんの両親のところまで行つて鑑定を行ったようですが、そこでは何も出なかったみたいですね。つまりあの煙草の吸殻が俺か兄さんのどちらかのものであると断定できる証拠になってしまった。清水屋家に一番近い存在であり殺害動機も比較的ありそ

うな俺のもとにはその日のうちに警察が駆けつけてしつかりDNA検査を受けることになりましたけれども、簡単に言えば結果俺のものと是一致的でした。そこで消去法で犯人に兄が選ばれた、これが警察が兄を犯人と断定した一連のシナリオです」

「そんな勝手なことを言われても。そもそも私たちは何で颯人さんに罪を擦り付ける必要があるんですか」

「ここまで話してまだしらを切るんですか。本当のことを話してくれませんかね」

母は黙りこくったままだった。母だけではなく全員がだんまりを決め込んでいてそんな静かな空気の中ダイニングから柴田さんが声を上げた。

「DNA鑑定の結果ができましたけれど、事前に聞いていた通りの結果になりました」

「そうですか、ありがとうございます。よかったら鑑定結果を軽く伝えていただけませんか？」

柴田さんはリビングに現れ俺の横で手を後ろに組み簡潔に結果を告げた。

「はい。タクシーに残された煙草の吸殻のフィルター部分の唾液と、今お預かりした小川沙羅さんのケーキのフォークから検出された付着物がほぼ同一のものであったことを報告します。それから……」

「あ、それ以上は結構です、ありがとうございます」

俺は平静を装いながら話を続けた。

柴田さんは軽く全体に一礼をしてダイニングの方へと戻っていった。

「申し訳ありませんが四人のことを詳しく調べさせてもらいました。沙羅さん、旧姓は石橋沙羅さんだったんですね。一昨年六月に千葉県市川市で結婚式をあげたがその四か月後に旦那さんを事故で亡くしてしまった。

今は名字さえ戻しはしないものの石橋家に住んでいるようですね。藍果さんも、船では大塚と偽名を使っていたようですけど。そして俺からして最大の罪はあなたです、母さん。まさかこんな男と不倫をしてその子どもが二人もいただなんて思ってもいませんでした」

「ごめんなさい」

母さんはそう一言だけ謝り、これ以上口を開くことはなかった。

「とは言っても母さんにはそれ以上の罪はありません。今回の事件は全て三人による犯行です。小林刑事」

「ええ、念のためお母様の今までの携帯の履歴や行動記録等を調べさせてもらいましたけれど、事件に関わるものは一切確認できませんでした。もちろん三人のスマートフォンの履歴も後日しっかり確認させてもらいますけど、それは署で行います。証拠は十分なので身柄を拘束させていただきます。念のため手錠を」

石橋河大、藍果と手錠をかけ自由を奪い、続いて沙羅の腕を小林刑事が掴んだ時、彼女は一瞬の隙をつき護身術を使ってすり抜けた。場が騒然となるも俺は動じずそのまま椅子に座っていて、捨て身で出口に走ろうとす

る沙羅は結局佐藤刑事によって取り押さえられ、床に押さえつけられる姿となった。

「公妨罪も背負うことになりますよ」

「なんで私たちはばかりが不幸なのよ。好きで生まれてきたわけでもないのに」

「それは皆一緒です」

吠える沙羅と冷たい圧をかける佐藤刑事との間に火花が散った。

「人生に意味付けをするのが役目とかとでも言いたいんでしょう？」

「もう辞めろ、沙羅」

石橋河大も全てを諦めたような口調で沙羅を宥めたが、彼女の世界に対する殺意は自身が動けなくなっても収まらなかった。

「誰もが最初は祝われて生まれてきているんだ。そんな命を無駄にするような生き方はしちやいけない」

「それは違う。生命の誕生なんて取り返しのつかないことだから人間は祝うことしかできないんだ。祝えば罪も誤魔化せるんだ。大した不幸も経験していないお前らに何が分かる。許される罪って何よ。不倫はセーフで殺人はアウトって線引きは何なのよ。もともとお母さんはお父さんの彼女だったんだ。それを山田家がしれつと奪ったんだ。そのせいで偽物の家族みたいに扱われて被害者はどっちなんです。答えてくださいよ。小学生

の時からそれが理由でいじめられるし、私たちは山田家に殺されたようなもんじゃないですか」

佐藤刑事の顔が更に陰しくなった。

「それは親の問題で颯人くんや豪くんは関係ないじゃない」

「そんなことも知らずに伸う伸うと生きているのがまた許せないんです。父親だって死んで償うのが当然の報いです」

「彼らだって選んで生まれてきたわけじゃないことくらい分かるだろ。君のその考えは憎しみを増やすだけだ」

「じゃあ我慢しろっていうの？」

「そうだ。憎しみは憎しみからしか生まれない」

「黙れ」

気がつけば沙羅と佐藤刑事以外の全員が、二人を視界に入れながらも視線を床に落としていた。

「よく聞け。俺以外の家族は一家心中で全員死んだんだ。そりゃあ今でも佐藤家を壊滅させた世の中も心中を決めた両親も俺は許せないさ。でもその辛さを乗り越えて俺は刑事になった。これ以上憎しみを増やさないためにも。そりゃあ生きていれば人生理不尽の方が多さ。でもそれを理由に殺人が許されるなら人類は滅亡す

る」

「私は二度と人間には生まれたい」

それが沙羅の最後の言葉だった。沙羅は舌を噛み切ろうとしたが佐藤刑事は全く止めようとしなかった。

「行くぞ」

佐藤刑事の言葉を合図にダイニングにいた小林刑事の部下三人がリビングに現れ、涙と血に溢れた三人を連行した。

「舌を切っても死ねないさ。多少大きな口内炎はできるだろうけどな」

石橋家の三人と母はそれぞれ別の覆面パトカーに乗り、署に向けて走り去った。

「動機なんてものは一つしかないんでしょね。俺も婿入りして家をあげたのが悪いんだろうけど、兄さんさえ母さんの元からいなくなれば母さんが石橋家に戻って来るとでも思ったんでしょう。だから関根さんが母を装って書いた『これからは一緒に四人で暮らしたくてその相談がしたい』って内容の手紙にまんまと騙されてここまで来た。母さんも母さんだよ。事件については本当に何も知らないんだろうけど、二か月に一回くらいの頻度で石橋家のみんなには会っていたんでしょう？　せめて話してくれても良かったのに」

どんどんと遠ざかっていくエンジンの音を聞いて俺の顔には涙が伝っていた。覆面パトカーに乗らずその場に

残されたのは豪と関根さんの二人だけだった。その後母さんは事情聴取だけを受けて解放されたいが以降俺は母さんと会うことはなかった。

「私たちも帰りませんか」

関根さんの優しい慰めのような一言が俺に現実を突きつけた。

「俺にはもう帰る場所なんかないんだ」

「何言ってるのよ、清水屋家に戻りましょうよ？」

「俺、どんな顔をして清水屋家のみんなに会えばいいか分からなくて」

「どうどうとしていればいいじゃない、自分もお兄さんも犯人じゃなかったんだし」

「それはそうだけど、俺が振りかざしていた正義って結局は多くの人を傷つけて終わっただけかなと思って。自分の正義と反するものも正義だったんだって。清水屋家にとっては犯人が誰であろうと死んだ昂紀は戻ってこないし石橋家も分裂させてしまった。確かに石橋家のしたことはいけないことだったけど、それでも母さんの存在を求めることは否定しちゃいけなかったんだろうなって思って。母さんも、息子の前ではこんな姿見せたくなかっただろうに」

「それでもあなたはお兄さんの居場所を守り切ったじゃない」

「守り切れちやいねえよ」

俺は思わず大きい声を出してしまった。

「もうこんな状況になったら兄ちゃんも母さんと一緒には住めないだろうよ。結果的に山田家すらもバラバラにしてしまったんだ。俺がバラバラにしてしまったんだ！」

息が切れるくらいに叫び俺は肩から地面に崩れ落ち、コンクリート道路に涙で黒い斑点模様を描いた。

「清水屋家はもう俺を待ちやいないさ。俺はもう正義なんてごめんなんだよ。とりあえず今日はホテルに泊まります。きっともう山田家にも来ません。関根さん、ご迷惑でなければですけど、気が落ち着くまで付き合ってください」

そうして今日の陽が沈んだ。涙はまだ乾いていなかった。これは俺にとって壮絶な一日で、よその誰かにとつて何でもない一日だった。来世は猫になりたい。



Takeshi

第N話 帰納

二日後、兄ちゃんは釈放されたようだ。俺のスマートフォンに何件もの不在着信が入っていた。正直兄ちゃんにも会いたくなかった。どういう顔をして会えばいいか分からなかった。そんなことを相談しながら、関根さんと肩を並べて歩いていた俺の目の前に現れたのは兄ちゃんだった。待ち伏せするかのように兄ちゃんが腕を組みながら立っていた。

「なーんで無視するんだよ」

「いや、その」

スマートフォンのGPS機能から俺の位置情報を割り出したようで電話があつた二時間後には既に東京に到着していたらしい。

「ありがとう」

そう言つて俺らの元へ近寄つてきた。

「いや、礼を言われるようなことは何も」

「きつと、自分のせいで家族がバラバラになつたとも思っているんでしょ」

「……」

「正義は時に人を殺し、時に人を助ける。俺は助けられた側の人間だからこんなことを言えるのかもしれないけど、俺は正義を掲げて生きるべきだと思う。正しく生きてきた人間が馬鹿を見る必要なんてないんだよ。それに、事実を事実と受け止めて更生を見守ることもまた一つの正義の姿なんじゃないかな」

「もし父さんが生きていたら、もし父さんが今の母さんを見たらなんていうだろうな。激怒しないのかな」

「しないと思うな。父さんが息を引き取る直前、母さんに向かって『お前の正義を突き通せ』って言っていたのを覚えているか」

「ああ。すごい弱い声だった。その声を覚えているからこそ余計に母さんのことも許せないのかもしれない」

「父さんは知っていたんじゃないのかな。母さんに別の子どもがいたってこと。あの藍果も沙羅も俺らと年齢二個くらいしか変わらないだろう？俺らには余計な気を使わせないように黙り続けていた、これが母さんの正義だったんじゃないのかな」

俺はこれに対しては何も言えなかった。母さんを見直すこともできなかった。正義対正義の対立は、悪対悪の戦いであると確信してしまった。

「……掲げた正義が正義であるかどうかは関係なくて、もっと、自分のしていることの適切さを見直すべきだったんだ」

「そういえばだけれど佐藤刑事は巡査部長から警部補に昇格するかもしれないらしいな。これも彼が正義を追求した結果であり、適切な選択をしたからかもしれないな」

「平山刑事は？」

「お咎め無しだったてさ。でも周りの目もあるだろうし少しずつ良い方に変わっていくんじゃないかな？」

「そういうところ、やっぱり納得がいかないね」

「結局社会は理不尽だから。そういえば佐藤刑事からいろいろ話は聞いていたんだけど、すごい推理劇を披露したらしいね」

「いや、あれは全部関根さんに頼った結果だから正直俺は何も」

「でも何点か気になることがあるんだ」

「気になることって何です？」

初対面というのに自己紹介も無しに兄ちゃんと関根さんが話し始めた。自己紹介無しにといっても事件や面会を通してお互いのことを知っているから今更不必要だとも感じているのだろう。

「たしかに二人の推理に間違いはないと思うんです。ただ、下船した時俺と藍果以外に乗客があと二人いたんです。茉帆っていう女の学生と塚田さんっていう大人の男性なんですけど、なんでその二人はあの場に平然といたんでしょう。あの時藍果は俺たちにこう告げたんです。『犯人は石橋さんと綸奈っていう女の子の二人で、監禁されていた船長と乗船していたもう一人の菜那子っていう子、たしか藍果の学生時代の友達だったかな、その子が既に警察に届け出た』って。けど何か不自然なんです。船の上で監禁されていたのは俺と塚田さんだけで、茉帆は石橋さんが犯人だと知っていた気がするんです。それに、俺その塚田さんって人から手紙を通して犯行をそそのかされたんです。俺が二日間寝てた間に例えば塚田さんを解放することもできただろうし、なんていうかこの計画のことをあの二人も知っていたんじゃないのかなって」

「うーん、この事件の調査にあたって石橋家三人の親戚家族や交友関係まで調べられる範囲で調べてみたけれど、それらしい名前はなかったし、なによりその男性と女性の間でも年齢差があるのに二人とも石橋家の計画に賛同して協力した共犯者だとは思えないんですよね」

「兄ちゃん、塚田さんのカバンにはお金がいっぱい入ってたって言ってなかったけ？」

「まさか、お金で釣られたってこと？」

「俺はその茉帆って人も塚田さんって人も見てないから性格とかまでは分からないけど、大金があれば人って

簡単に釣れちゃうんじゃないかな？ 特に学生なんて石橋河大みたいな人に睨まれて脅されて、口止め料として例えば百万円とか手渡されていたら何も見なかったことにするんじゃないかな」

「なるほど。……だから何も関わらなかったことにしようって提案してきたのか」

「でも塚田さんが解放されていた可能性は高いかもしれませんね」

関根さんが続けた。

「どうしてです？」

「船の中で二日間寝たって言いましたよね？」

「ええ」

「疲れて寝落ちしたんですか？」

「多分そうですけど……」

「人間って普通、丸二日も寝れないんですよ」

「藍果に二日寝てたって言われたんですけど、嘘だったっていうことですか？」

「いえ、出港日と清水屋家事件のタイムスケジュールを考えると丸二日っていうのは多分本当だと思うの。小川沙羅が東京から兵庫にくる時間や警察が捜査をしている時間に颯人さんを上陸させないためには余裕をもつ

てもだいたい二日かかると思うの。だから蠟人さんは多分本当に二日寝ていたんだと思うんだけど、寝ている間にベグタミンか何かを経口投与させられたんじゃないかな？」

「それって何ですか？」

「睡眠薬の一種なんだけど長期作用型のもののなの」

「なるほど、だから……」

「何か思い出されたんですか？」

「ええ。あの時船室で目を覚ました時に口回りと服の袖が湿っていたんです。自分の涎かななんて思っていたんですけど起きてからもずっと変な眠気はあったので飲まされていたのかもしれないです。それに鍵は藍果が管理していて自由に部屋に出入りできる状態になっていたので……あり得ますね」

「定期的にドアをノックして兄ちゃんから返事があったら『生きてるかどうかの確認』とでも言い、返事がなければ睡眠薬投与のために部屋に侵入……とかですかね。もし塚田さんがお金で雇われていたとしたら彼は早々に開放していたかもしれないですね」

今となつては答えも分からなくなつてしまった事件の推理をしていた時、俺はつい鋭く大きな声をあげてしまった。

「ねえ！」

「何です？」

横にいた関根さんもその声に驚いて飛び上がった。

「兄ちゃんと藍果と塚田さんと茉帆さんの四人が揃って下船したって言ったよね？」

「うん」

「その時石橋河大はどこかに身を潜めていたとして、その綸奈って子と菜那子って子はどこにいったんだよ。綸奈って子や菜那子って子もひょっとしたら事件のこと知ってたんじゃないのかよ？」

「いや、綸奈はあの時ずっと部屋にこもりっぱなしだったから動けるはずがないんだ。でも菜那子に関したら少しあり得るかもしれないな。ずっと藍果と一緒に行動していたし」

「何か思い出せることはないか」

「そういえばあの時、菜那子と茉帆の二人が船の金庫室に向かって、それで、それで、そうだ、茉帆だけが一人だ急ぎで戻ってきたんだ。そうだ、あの時犯人が石橋だって言った後、茉帆は何か言おうとして……。もしかしたら菜那子のことだったのかもしれない」

「これはもう俺の推測でしかないけど、隠れていたことがばれた石橋は菜那子って子を襲って口封じしようと

した。けれどまさかそこにもう一人、その茉帆つて子がいると思わなくてすっかり石橋が加害者側であることがバレてしまった、つてところかな」

「だとしたら輪奈と菜那子の二人は……それどころじゃないや、船長もだ」

とどめを刺すように関根さんが言い放った。

「海に捨てられたのかもしれないな」

「そんな……あれ、でも陸に上がって藍果と歩いていた時確か菜那子から藍果に着信があった気がする」

「そんなのは演技だったんだろうな。スマートフォンだと一一一番で自分に発信することができるじゃない。

全部偽りの姿を見ていたんだろうね」

「なるほど。そういえば船長以外の他のスタッフはどこでいなくなったんだろう。俺が見た限り乗船した時には十人以上いた気がするんだけど」

「きっと船が出港して間もなくだろうね。地上と繋がる術を持っているであろうスタッフ全員を排除した状態で乗客の殺害を決行したのかも。例えばけど船の後ろの解放されたデッキの部分で『帽子が飛んで行つて船の下の方に引っ掛かっちゃたんだけど見てもいいですか?』みたいに話しかけて、覗き込んだところを突き落とす……とか。そうすれば藍果のような小柄な子でも簡単にスタッフを消していくことができるんじゃない」

やないかな。例えばだけどね」

「クルーの優しさを逆手に取ったってことか」

「かなり綿密な計画だったんだな」

「あれ、でもそれって俺が船に乗らなければ作戦は失敗だったってこと？」

「いや、船に乗ることを見越していたんじゃないですか。お母様、足があんまり良くないんですよ。そんな中懸賞で当選した沖縄クルーズ旅行券が自宅のポストに投函されていたら？」

「それってまさか」

「ええ、あのチケットを投函したのも石橋家の誰かでしょうね」

「それが石橋家にとっての正義なんだな。愛する妻、愛する母を取り返すための必死の正義。ほんと、正義って何なんだろうな」

「ま、個人の愛と社会の正義は共存できないんでしょ」

「愛は正義になるけど正義は愛にならないからか」

「安っぽい言葉だよな」

「兄ちゃんはこれからどうするの？」

「俺は母さんとまたいつも通り生活するよ。だからわざわざ新幹線使ってこっちに来たし」

「そっか。元気でな」

「豪はどうするつもりなの？」

「一度だけ清水屋家に顔を出すことにするよ。その後のことは俺にも分からないさ」

「あら、気が落ち着くまでのお付き合いはもうおしまいですか？」

関根さんが少し笑顔で話しかけてきた。

「こんなことがあつちや、いつになっても気分は落ち着きませんよ」

「大胆な不倫ですね」

「じゃあこれが俺の正義です」

そう言つて俺は山田家に背を向けて西へ西へと歩いて行つた。

*

「関根さん、俺と豪のために全力を尽くしていただいたこと、感謝申し上げます」

「これも私の仕事なので」

「それでも、格安価格でしたし割に合わない調査もあったんじゃないですか。なんていうか、愛と正義っていうより『誰かを大切に思う愛』と『大切な人を助ける勇気』で行動していたような、そんな気がしました」

「いえいえ、全然そんなことないですよ。これは私が好きでやったことですので」

「過去に何かあったんですね」

「ええ、まあ。おかげで十三年間探していた答えが見つかりました。ありがとうございます」

「そんな、俺じゃなくて豪に言ってくださいよ」

「いえ、彼にはきつと重すぎます」

「そうですか」

「私は愛と正義で動いていたので。勇気なんてなかなか遠い存在ですよ」

「完璧な人ってそういるもんじゃないんですね」

「だから愛と勇気を友達にしたどっかのアンパンは理想のヒーローなんですよ」

「確かに。関根さんはこの後どうされるんですか？」

「そうですね、家に帰ります。もう何日も主人を放ったらかしにしちゃってるので」

「え、関根さんご結婚されているんですか」

「ええ、関根は旧姓で今の苗字は菊地です。豪さんには黙っていましたけど、これもまた正義ですよね？」

「俺に聞かないでくださいよ」

「ごめんなさいね。きっと、人が正義を掲げた時、私たちは皆冷酷になるんです。それでは私はここで」

そう言って連絡先の書いてある手書きの名刺を俺のカッターシャツの胸ポケットに入れ、上目遣いで「さよなら」と呟き東京の街から消えていった。

「これはあくまで俺の見解ですけどね、人は自分の冷酷な態度や攻撃を正当化するために正義を持ち出すんだと思いますよ」

俺の独り言もまた、誰にも聞かれることなくこの街から消えていった。名刺に記された名前は関根朱里だった。

END



Who does it belong to?

あとがき

筆者の鳥居はあとがきの重要性に今気づきました。

私はもともと活字が苦手で今まで一切小説を読んだことがありませんでした。どれくらい苦手かというと、小学生の頃から「漫画は活字だ」と言い、友達と遊びに行っても周りが漫画を読み始めると一人で家に帰ってくるくらい好みませんでした。さすがに『あとがき』の存在は知っていましたが、筆者の経歴紹介や謝辞ばかりの一番つまらないページだと思っていました。

特に書くこともなかったので、あとがきを書かないまま先日友人にこの小説を読んでもらったところ「裏話的な内容をあとがきで書いてほしい」と熱望されました。調べてみるとあとがきⅡ読者サービスとのこと。それならば世界中のどの本よりもサービス精神旺盛でなおかつ推理小説としてかなり重大なあとがきにしようと思い筆者は張り切りましたので是非最後までご覧ください。

この小説を書くこうと思った理由は特になく、なんとなく創作意欲がわいたので勢いで書き始めることになりました。確かに書き始めたきっかけは何となくでしたが、執筆しているうちに「分り合えない互いの過去やそれによって形成されたそれぞれの人間の思想」を描きたいと思うようになりました。過去や個人の思想は語ったところでそもそも百パーセント理解されるものではありませんが、キャラクターが過去を曝け出した時に、そのキャラクターの見え方が変わるといいなと思ってこの物語を書きました。

さて、もともと私は哲学の問いを考えることやミステリードラマで犯人を推理するプロセスが大好きだったので、「専門的な知識が全くなくても犯人を突き止められるような、読者が本気で考えたいなる推理小説」を目指して執筆していました。また読書嫌いの自分が最後まで読み続けられるかどうか基準の一つでした。ただ勢いだけで書き始めただけあって、情けないことに途中五万文字を超えたところで筆者が犯人を捕まえられなくなる事件が発生しました。ちよつと警察を敵に回しすぎてしまったがために山田颯人を釈放できなくなったのです。このままでは五万文字が台無しだと思い急遽、哀れな死体で登場する予定だった佐藤慈恩を味方の刑事にし、今の

ストーリーに落ち着きました。実際に本編が出来上がって友人の佐藤君に読んでもらったところ「佐藤刑事いいやつ笑 やるじゃん笑」とのこと。彼はこのあとがきを読むまで自分が本来死体だったとは知る由もないでしょう。

……あ、今何か気づかれましたか？ そうなんです。

この物語はフィクションです。しかし登場する人物は架空ではなく実在するものなんです。

さすがに登場人物の関係性や年齢などの設定は全てフィクションですが、友人が物語にでてきたら面白いだろうなと思って以前舞台制作をした時のメンバー全員の名前を一字たりとも変えずにお借りしました。キャラクターの性格や設定は実際の彼らのキャラをかなり誇張させてみたり真反対の性格を描いてみたりして、かなり個性的な友人をさらに個性的にしてみました。各話の最後には物語の主要キャラクターの絵が挿入されていたと思いますが、この挿絵も実際の写真を加工したもので、それも今回このために撮ったものではなく舞台制作時のオフショットとして偶然撮影された二六七一枚の写真の中から厳選したものを使用しました。表紙の男性（山田颯

人)は事件の手掛かりとなる証拠を手にとって何かを考察しているように見えませんか？ スノーと書かれた飴玉を拾い上げているシーンを思い浮かべていただけたのであれば、私にとってこんなにも嬉しいことはありません。なぜなら、元となった写真は彼がシュークリームを地面に零し絶望している写真だったからです。私のお気に入りの写真ではありませんが、こんな形式で悪用できるとは思っていなかったので、膨大な写真も保存して残しておくべきなんだと、たった今学びました。



さて、あとがきもいよいよ終盤となりましたが**ここで最終話について少し触れたいと思います**。タイトル「帰納」が表すとおり、最終話で山田兄弟と関根さんが話している内容は全て事実から導き出された仮説にすぎません。第七話に次のセリフがあったことを覚えていきますでしょうか。

「主人公は筆者が生み出した生き物であり、筆者は犯人を知っている。だから読み進めれば必ずといってよいほど主人公は簡単に真実を見つけれれる」

この言葉を綺麗に裏切った物語がまさに最終話だったのではないかと考えています。事の顛末を知っている筆者鳥居は三人の推理に対し「それは違うよ」と言いたくて仕方ないのです。物語としては全十一話で完結していますが、**石橋家目線の裏のストーリーを最後にここでご紹介したいと思います。**

ほとんどの作戦は計画通りのように見える石橋家の犯行ですが、実は第一話の段階から彼らにとって思わぬトラブルが発生していました。古内菜那子の存在です。若生瑛貴殺害後にシェフの代役を立てるところまでは計画通りでしたが、もともとの計画はその後山田颯人を除く乗客全員を毒殺することでした。しかし、藍果の旧友である菜那子が乗船していることを知り急遽作戦を変更し虹嘉と茉帆だけを殺害することとなりました。配膳の際にバナナプリンの上に藍果がこっそり殺鼠剤を混ぜたのですが、虹嘉が食事を始めて真っ先にデザートに手を伸ばしたため、茉帆がプリンに手を付ける前に虹嘉だけが死に至り茉帆の殺害が失敗に終わってしまったのです。編者がショックを受けて動けなくなることもまた石橋家にとっては計算外でしたが、おかげで容疑のかかったシェフ代行として容易に監禁することに成功します。計画を変更して以降もなお大失

態によるトラブルが発生します。本来は茉帆ではなく菜那子を生きて返す予定でしたが石橋の早とちった襲撃により作戦は更なる変更を余儀なくされました。菜那子と通話する演技をしていた時の藍果の悲しみは計り知れないものだったでしょう。ところで、四人が下船して以降、関根さんが港に訪れた時には既にクルーズ船が消えていたことにお気づきでしょうか。藍果はクックルドアンにて席を立ち警察ではなく石橋に連絡をしていたのですが、その電話を合図に石橋は警察に山田颯人の存在を通報し、のちに横須賀市の漁港から出る沙羅のボートと合流するために残りの燃料を使って船を出します。石橋は綸奈と菜那子と船長の三人をそれぞれ睡眠薬で眠らせたまま船室に監禁したうえで船内での時間を過ごし、沙羅と合流した後はクルーズ船のバラストタンクの海水量を調節しクルーズ船ごと沈没させ、すべての証拠を隠滅して帰港しました。おそらくこのタイミングでは既に沖縄で船の到着を持っているクルーズ会社が船の未着を不審に思っ警察に調査依頼を申告しているところでしょう。往路でスタッフ全員を海に落としておいたため、その周辺で船を沈没させれば事件は全て事故として処理されるだろうという算段でした。以上が石橋家の計画の全貌です。



あとがきでネタばらしをするような邪道な小説ではありませんでしたが、ここまでが私の書いてみたかった物語です。それというのも、「このキャラは憎いから悪い方へ導かれる」とか「このキャラには頑張つて欲しいから一発逆転してほしい」といった描き方ではなくて、「各キャラそれぞれのバッググラウンドを持ちながら、なるべくしてなる運命に導かれた」というストーリーに帰着させたかったのです。そのため山田颯人にとつて完全犯罪のように見える一連の事件も実は欠陥だらけであり、それを石橋家がどう乗り換えたかという裏のストーリーをあとがきでお伝えしました。もう一度お読みいただける際には、より一層石橋家にフォーカスしてお楽しみいただけるのではないかと思います。

私は幼いころからクリエイティブなことが好きで、自分に刺さる作品が誰かに刺さると良いなと思つて曲を描いたり舞台を制作したりしてきました。そして、新しい制作の一つがこの推理小説でした。あとがきの初めに述べました通り私は活字が苦手な人間です。そんな私がここまで物語を形にできたことは、日頃から私の作品の完成を楽しみに待っていてくださる皆様のおかげだと思つております。何より拙い作品ではありましたが最後までお読みいただいたことを嬉しく思

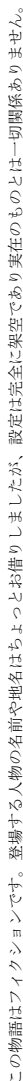
います。それからこれは個人的な話ですが、当初この本は感情移入もしにくいシナリオブックのような小説でした。そして、そんな小説を何度も読み込んで魅力的なアドバイスをたくさんしてくれたのが友人の長崎由依さんでした。彼女のおかげでキャラクターには個性が溢れ、話にはより深みが出るようになりました。おっと、謝辞ってしまいました。でも今ならあとがきで感謝を伝えたくなる理由が分かる気がします。

最期になりますが、この作品をお迎えいただいた皆様に心からの感謝を申し上げます。

鳥居大誠

次のページはネタバレを含む人物相関図です。

2話、4話、7話、9話の最後のページに
人物整理のための相関図を用意しておりますので、
次のページは物語を最後まで読みきってから
見ることを強くお勧めします。



彼ら彼女らは健全です。

「愛した人の罪」

彼らの正義に愛を込めて。



愛した人の罪

発行日 令和二年五月二十六日

著者 鳥居 大誠

ここは海の上。「プールに人が!!!……死んでるんです」
一年前に流行した感染症により客足が激減したクルーズ旅行。

「自殺なら何で海じゃなくてプールで死んでいるんだろう」
事故を事件と断定した山田颯人(28)は心中穏やかではなかった。

海の上に監禁された乗客と犯人捜しを始めるも、捕まったのは山田颯人だった。
アリバイはなし。この事件は海よりも広く深く壮大に仕組まれた計画だったのか？

専門知識不要。君はこの謎を解けるだろうか。

愛した人の罪

島居大誠